遊詠歌

おもかぐら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊詠歌

【Ｎコード】
Ｎ９１１８Ｌ

【作者名】
おもかぐら

【あらすじ】
東方の二次創作小説。“詠夕鈴”から一年後。自称旅人の主人公が幻想郷を彷徨い旅する話。
※元はニコニコ動画に投稿している作品です。サイトにて検索していただければ動画形式でも見られます。

一話　雨絶ちて、三枚羽の幻想風車よぐるぐる廻れ

ドン・キホーテという物語をご存知だろうか？

騎士道物語を読みすぎて幻想に囚われた主人公が、己を伝説の騎士と思い込み名を「ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ」と名乗り。遍歴の騎士として旅に出る物語である。

有名なシーンとして旅路の途中の風車群に出くわしたドン・キホーテがそれら風車を巨人だと思い突撃してゆくシーンがある。

ドン・キホーテにとってその風車は自分の手柄を奪おうとする魔法使いが風車に変えた巨人だったという、滑稽で有名なシーンだ。

だが、もし。

物語が語らないだけで本当に風車が魔法使いの仕組んだ巨人だったとしたらどうなのだろう。

誰が彼を馬鹿にできるのだろうか。

少なくとも私は出来ない。彼は幻想を持って現実という名の巨人に真っ向勝負を挑んだのだから。私には到底真似できない。

彼は世界に踊らされること無く騎士道を追い続けた……いや、騎士で在り続けたのだろう。

私はこの物語に悲しみと同情を禁じ得ない。

彼が本物の騎士であったのならば、彼を誰かが認めたのならば、彼はどんなに素晴らしい騎士と為ったのだろうか。

それはただ、現実と幻想における、その小指の先ほどのズレが彼を喜劇たらしめているのだから。

偶然だろうか、私もドン・キホーテのように旅をしている。
だが私は騎士でもないし、巨人に立ち向かうような度胸はない。
だけど見てみぬフリが出来るようには成ってない。
そう、それなら巨人を見にいこう。それはきっと楽しいことだ。

だって、私は魔法使いを見てしまったのだから。

一話　『雨絶ちて、三枚羽の幻想風車よぐるぐる廻れ』

雨、雨、雨。

どしゃ降りの雨。

私は雨合羽に身を包んで歩いていた。
その手に身の半分以上もある大きな旅行ケースを引っ張りながら。
周りは木々の乱立する森、斜面をなぞっている曲がりくねった道。
雨の中、私は深い深い山道を歩いていた。
　それはちょうど一年ほど前からだろうか。去年の冬、とある事件をきっかけに私は女子高を中退してあちこちと旅をしてきた。といっても自称は旅人というだけでそうも偉い旅人でもない。

旅人というよりは準備の良い観光客と云った方がしっくりくる、観光客じゃあカッコがつかないので私としてはお断りだけれども。
不意に、雨にぬかるんだ地面に足を取られそうになり何とか堪える。
「――っと。山の天気に女心はイライラしっぽなし。といっても秋じゃないけどね」
此処何日も降り続けたしつこい雨だ、虚しい独り言を猛って云っても止むわけがない。
「……お？」
硬い雨音に気付き目をやると雨の狭間から道の脇にある石段が目に入った。上を見上げると赤い鳥居が見えたのでそこが神社なのだとすぐに分かった。
「へぇーこんなところに神社なんかあるんだ」
丁度いい。ここで雨宿りをさせてもらおう。そう思って私は旅行ケースと共に早速その石段を登り始めた。
こういう階段は荷物があると辛いものだが私は慣れているので乱暴に旅行ケースを石段にぶつけながらも平然と階段を登っていく、だが私の乱暴な扱いに旅行ケースはビクともしない。
私の愛用の旅行ケース。元は市販の旅行ケースだったのだが、市販の物は悪路を進むようには造られておらず荒っぽい旅路ではすぐに壊れてしまう。そうして旅先でキャスターを頑丈なものに変えたり補強などをして、今では一人旅用に改造された最強の旅行ケースとなった。ちなみに名前は“ロシナンテ”だ。
「これはこれは。まぁ……こんなところにある神社だもんね」
階段を上りきるとそこに人の気配は欠片も無かった。境内は閑散としており、出迎えてくれたのは波紋乱れるでかい水溜りだけだ。
人の来ないような神社だからか、神社自体は小さくは寂れている。だが形はしっかりとしていて崩れそうな様子もない、雨をしのぐには十分すぎるだろう。
とりあえず私は見えていた縁側へと足を運ぶ。

「よっと」
勢いよくロシナンテを縁側に乗せて私も靴を脱いで縁側に上がって雨合羽を脱ぐ。ついでにロシナンテを覆っていたビニールを外して水を払って縁側に置いておく。
「誰か……いないのかな？」
見た感じ人は居なさそうだったし気配も無い。だが万一もある、とりあえず人が居ないかと私は中を調べてみることにした。
無造作に縁側に並ぶ障子を引くと楽に開いた、外観は寂れているが意外に立て付けが良いなと感心してしまう。
敷居をまたいで中へと入る。一応、ロシナンテも一緒だ。
「おじゃましまーす。誰か居ますかー？」

声を掛けながら、後ろ手にストンと障子を閉じた。

すると、空気が変わった。
障子を閉じる音と共に私の身を取り巻く冷気が嘘のように引いていくのが分かった。湿気もない、からりとした空気だ。その空気の豹変ぶりに私は首を傾げながら部屋の中を物色する。
それはずいぶんと手入れの行き届いた内装だった。
埃など被っていない、箪笥やちゃぶ台まで置いてある。それどころか今のさっきまで人が住んでいたと云われても信じてしまうほどに生活感があるのだ。
「何か……変な感じ」
呟きながらなんとなく伸ばした手が箪笥に手が触れた瞬間。後ろの障子が開き私の耳に少女の声が届いた。
「誰？　もしかして盗人かしら」
背筋を跳ね上げて驚く私、これじゃあ不審者だ。
「え！？　ああ、すいません。雨が降っていたので雨宿りをさせてもらおうかなって思って……」
慌てて弁解を述べながら振り返るとそこには赤と白の巫女服を身

に纏った少女が立っていた。
「雨？　最近の盗人はずいぶん分かりやすい嘘を付くのね」
そう云って巫女服の少女は後ろに首を向ける。そこには先ほどの土砂降りの雨は無く、ただ晴れた空の光を浴びる庭があった。
「あれ……だって今さっきまで降っていたのよ。本当だってば」
私は慌てて縁側に出て先ほど置いた雨合羽を捜すがそこには無かった。当然のように脱いだはずの靴も無い。
「盗人の周りだけ雨が降る？　物なんか盗むからお天道様に嫌われたんじゃないの」
「だから盗人じゃない、違うのよ。私はただの旅人で雨宿りを……っと」
云いかけた私を縁側から庭に押し出して巫女は問答無用といった様子だった。
「さー出ていった出ていった。盗る物なんかないんだから用事も無いでしょ。なんにも無いんだから」
「私は盗人なんかじゃないってば。そんなつもりはなかったのよ」
ソックスのまま庭に立ち、縁側に立つ巫女に弁明する私。その時、目の端に入った景色に私は目を剥いて首を向けた。
カラリとした日差しに透き抜けるような風、神社から眺めるその景色は明らかに先ほどまでの山中のものとは違っていたのだから。
「ちょっと。ここ、何処……？」

「博麗神社よ」

その言葉に私はさらに驚いた。
博麗神社。私はその名前を知っていたのだから。
昔、私が旅に出るきっかけになったある事件があった。
偶然だろう。私はある日突然、幻想郷から来たという妖怪に出会ったのだ。
妖怪は“紅　美鈴”と名乗り、彼女を元の幻想郷に帰すために私

は彼女と一緒に“博麗神社”を捜したのだ。
結果的に博麗神社は見つからなかったのだが……まさかここがその博麗神社だと云うのだろうか。
その博麗神社に私が居る、だとするのなら此処は……。
「げんそう……郷？」
となると、もしや目の前の彼女が美鈴の云っていた“空飛ぶ巫女”なのだろうか。
巫女は私の驚愕を察したようで“なるほどね”と云って納得していた。
「その様子だと、アンタ外来人なのね。なんなら外に送ってあげるわよ」
「待って、巫女さん。もしかして“紅魔館”って知ってる？」
「吸血鬼が居るわ」
「やっぱり。幻想郷なんだ」
「そうよ、ここは幻想郷。　アンタは迷い込んだ外来人じゃないの？」
「たぶん……そうなるのかな」
「それなら私が外に帰してあげるわよ。ここはそういう所だし」
「あ、でも待って！」

コレはもしかして貴重な事なのではないか？
本当ならば送り返してもらうのが無難なのだろう。だけどこの境遇が幸か不幸かは私が決めればいい。
それに世話になった美鈴に会って挨拶をしたい。

そして何より、おもしろそうじゃないか。

「見学していってもいいのかな。知り合いに挨拶もしたいし、新天地開拓ってのも好きだから」
私の返答に驚きもせず。巫女さんは頓着無さそうに答える。

「いいんじゃない？　別に誰も文句云わないわよ。帰りたくなったら帰してあげるし。ああ、でもうちは駄目よ。私、旅人なんかに構ってあげないから」
なんとなく分かってきたが、この巫女さんは他に無頓着でどこまでも自分本位らしい。
ならば私もこれまでどおり自分本位にいこう。
いくらここが幻想郷であろうとも、天あって地がある限りは旅人としての経験則で用意よく不用意に動いてみよう。
とりあえずは宿を探す。まだ日も高いが知らない土地では宿を探してそこを拠点に動くのが一番良い。
フラフラとこのまま紅魔館を探すのも手だけど下手をして見知らぬ土地で野宿になるのは嫌だ。私は好んで野宿をするタイプじゃない、やはり先に宿を見つけてから紅魔館にいけばいい。
「用事が無いなら私部屋の掃除をしたいんだけど」
「ああ、まって……宿を探したいんだけど、どこか知らない？」
「宿？　それなら里に行けば、人間の里」
「人間の里。ここから近いの？」
「この先の森。“魔法の森”を抜けると着くわよ。妖怪が出るかもしれないから。ああ、そうね」
何か思い出した巫女は奥へと引っ込み、箪笥をあさって戻ってくると、その手に持っていた紙の束を私に手渡してくれた。
「はい。これだけあればいいでしょ、妖怪に襲われたらそれを使えばいいわ」
渡された束の一番上には模様と文字が描かれていた。どうやら御札の束らしい。
「御札？　これを貼ればいいの？」
「そう“貼ればいい”わ」
「ありがとう。気前がいいのね」
「妖怪退治が仕事なのよ。最近、天まで昇って天人退治に地面の中で動物退治でへとへとだからサボりよサボり」

「サボリって……」
ああ、つまり。気前がいいのではなくてサボりたいから御札を私に渡したと、そういうことか。
「そういえば博麗の巫女さん。名前は何ていうの？」
これも旅のコツだ、名前を知っていれば
「霊夢よ。そういうアンタは？」
「私？　名も無き、少女Ａよ」
霊夢は少し首を傾げた後に分かったように手を打った。
「少女“詠”（えい）ね。苗字が無いの？」
昔、幻想郷の妖怪と出合ったとき、その時にも私は詠と呼ばれたことがあったがその時は苗字までは訊かれなかった。この幻想郷で名乗るのならついでに決めておいてもいいだろう。
何か私を形容するような……そう、私は旅人だ、道を行くのだから。
「どうぎょう……“道行　詠”よ。お見知りおき」
そう云って私は手を振りロシナンテを引っ張りながら神社を後にした。

「そういえば。御札あげちゃったわね……ああいう盗人なのかしら。う～ん」

“神社から変な人間がでてきたわ”

“あの変な格好、きっと外の人間ね”

“そうね、神社の中にいきなり現れたんだもの外から来たに違いないわ。暇つぶしに霊夢を見ていた甲斐があったのよ”

「ん？」

少女の笑い声がくすくすと聴こえてきた気がしたので、木々の中に視線を送ってみたが其処にあるのはただ風に揺れる緑だけだった。

「……」

気のせいさ、と自分に云い聞かせてから私は森の中へと足を踏み入れた。

魔法の森。
この森は私が知っている、日本にあるようなそこらの森とは大分違っていた。日の光は地面に届かないほど木々が濃く、湿度が高い。
木々は太く高齢で蔦が絡まりいかにも原生林といった具合。さらに見たことも無いような珍妙なキノコが沢山あったり、現実的と云うよりはだいぶファンタジーな森だ。
悪く云えば魔女でも出てきそうな陰湿な森。なるほど“魔法の森”と云われるわけだ。
そんな森だからかロシナンテのキャスターの音も心なしか元気がない。いや、そもそもロシナンテを引く私の元気が無い。
ソックスのまま旅行ケースを引っ張って、見ず知らずの森を何時間も迷っていればそれは疲れる。キノコの胞子とかだろうか独特な森の匂いが鼻について気分も良くない。
正直、早く森を抜けてしまいたかった。だが、歩いても歩いても出口に着かない。
実は人間の里は気軽に歩いていくような所ではなく、昼夜歩き続けなければならないほど遠いのだろうか、実はあの巫女が嘘を付いたのだろうか。
私も初めは思った。だが、どうやら違うらしい。
見覚えのある木の配置に嫌な予感を覚えながら歩いていると眼前に切り株が現れたのを見て私は深々とため息を漏らした。
「また、この切り株。四回目だっけ」
この森に入ってからというもの、どうもおかしい。明らかに私は同じところをぐるぐる廻っている。
別に私が方向音痴と云うわけじゃない。これでも旅人の端くれだ、

道なき道を進む心得くらいある。
だが、その心得がことごとく無視されるのだ。
コンパスで確認しても無駄だった、気が付くと私はあさっての方向を向いているのだ。木漏れ日を頼りに日の指す方向で向きを確認しても気が付くと太陽は真後ろにある。川を下ろうと思ったけどもそれも見つからない。
万策尽きた私はロシナンテを脇において目印代わりにした切り株に座り込んだ。
「やっぱり……犯人がいるってことよね……」
まさかそんなことはないさ。と心の隅で否定していたのだがそろそろここが幻想郷であることを認めるべきだろう。
この怪奇現象はやはり巫女の云っていた妖怪のせいなのだろうか……。もしそうなら一体どんな妖怪なのだろうか。
私の出合った事のある妖怪は“紅　美鈴”と“八雲　紫”。この二人しかいない。
美鈴は強かったけども全然良心的な妖怪だった。彼女のような妖怪なら心配はない。だが、八雲　紫みたいな妖怪に出会ったら最悪だ……。
そもそも、あんな風に人の形をしているとも限らない。
例えば鬼だったらどうだ、ムキムキマッチョの金棒持った大男なんかでたら最悪だ。
河童のような妖怪だったらどうだ、頭に皿を乗っけた全身緑の人型なんか出てきたら気持ち悪いだろう……全力で逃げてやる。
天狗や九尾の狐もそうだ。
風に飛ばされ爪で切り裂かれたり……。ロクでもない目に逢うんじゃないだろうか。
「早く人里に着かないと……」
意を決して切り株から立ち上がると同時にガサリと後ろの茂みが揺れた。
「ひっ……！？」

まさか妖怪かと身構え驚きながら振り返るがそこには何も居ない。
「……あれ？」
何も居ない代わりに私は異変に気付く。
変だ、茂みの奥がぼやけている。炎の熱気で揺らぐかのように空間がゆがんで見える。その中に何かが見える。
「むぅ……」
人の形をしている。なんだろうかと瞬きをしながら凝視をすると、ぼんやりとそれが時間と共にはっきりと見えてくる。
「女の子？」
それは背中に薄羽を生やした三人の小さな小さな女の子達だった。その女の子達が私を指差して笑っていた。
赤、黒、青とそれぞれ個性的なドレスを見に纏っている。あれが巫女の云っていた妖怪なのだろうか。なら、想像していたゲテモノみたいな妖怪じゃあ無くてよかった。
恐怖心が空振りした私は少し強気に出てみることにした。
こっちには御札だってあるのだ。あんな可愛らしい妖怪なら怖くもない。巫女の云うとおりお仕置きをしてやろう。
「見つけたわよ。アナタ達が巫女の云ってた妖怪ね」

「「「え？」」」

私の言葉に驚いたのか、三人が顔を合わせてからもう一度私を見直すと確かに視線が交差した。
「私達、妖怪じゃないわよ！　ちょっとサニー」
真っ先に黒いのが云い返しながら赤色に云いかかる。
「私じゃないわ。ルナが調子にのって音を漏らすから気付かれたのよ」
なにやら云い合いをしているが私には関係ない。少女達の前に立ち、早速とばかりに巫女に貰った札を取り出す。
「こういうときは悪霊退散？　何か違うわよね」

「悪霊でもないわよ！」
ちゃっかりと言い返してくる黒色。妖怪でも幽霊でもない、じゃあ何なのだろうか。
「スターは？」
「居ないわよ？」
「え？　またぁ！？」
我先にと逃げた青色のことを云っているのだろう。ちなみに青色は私に見つかってすぐに脱兎の如く逃げていった。
「まぁ何でもいいわ。悪い子にはおしおきよ！」
ぺんっ！ぺんっ！と格好を付けて、少女達の額に御札を貼り付けてやる。

夢符「封魔陣　接発」

「ぎゃー！」
燐光を散らし額に貼った御札を中心にして四角形の結界が発生する。いつか見た八雲紫の“四重結界”のような具合だ。
「わっ……うわっ」
あまりのことに驚いた。こんなに強力とは思っていなかった私は慌てて少女達から御札を剥がしてあげる。
お仕置きにしてはちょっとやりすぎた。
御札を剥がすと二人の少女は額に四角く、火傷の様な痕を付けてぷんすかと怒りだした。
「外来人め、覚えてなさいよー」
そして、可愛らしく捨て台詞を投げつけてから森の奥へと飛んでいってしまった。
「……悪いことしちゃったかな」

女の子達を追っ払ってしばらく、途端に森は素直になった。方向を確認して道を歩けばその通りに道は進む。やはりあの女の子達が私を惑わしていたのだろう。

しばらくすると私は森の出口らしきところまでたどり着けた。木々がひらけ、光が差す。そしてそこには人家らしき建物があった。

「こんなところに家？　山小屋……には見えないわよね」

家の周囲にはなにやらガラクタが沢山置いてあり、まるで家がガラクタを纏っているように見える。

ゴミ屋敷かなにかだろうか。まぁいずれにしても地獄に仏、私はさっそく入り口であろう扉に回りこむ、すると扉の真上にデカデカと看板が掲げてあった。

「こう……りんどう……香霖堂？　なにかのお店なのかな。まあいいや、誰か居れば話を訊けるでしょ」

楽天的に考えながら、とりあえず私はその扉をノックすることにした。

二話　香霖堂風「詠み手の衣」（前書き）

あらすじ

人の忘れた有象無象。幻想の行き着く先、幻想郷。
何の因果か、雨宿りのつもりが幻想郷の博麗神社と呼ばれるところに紛れ込んでしまった私。
巫女に泥棒呼ばわりをされながら偽名として“道行詠”を名乗り、とりあえず私は宿を探しに人里に向かうことにした。
魔法の森だったかな、道に迷ってずいぶんと時間を食われたけれどなんとか妖怪と思しき三人娘を見つけて巫女にもらった札でお仕置きをしてやった。
そうして森を抜けた私が目にしたものは……。

二話　香霖堂風「詠み手の衣」

第二話　『香霖堂風「詠み手の衣」』

冬の雪化粧も溶けた幻想郷。冬は峠を越えて緩やかに春に変ってゆく。

幻想郷の人里から離れた“魔法の森”その森の入り口に僕の店“香霖堂”はあった。“香霖堂”は古道具屋であり店内には色々な道具があり外の世界の品も多い。最も僕の趣味の品が殆どで非売品も少なくないのだが。

きっかけは僕自身の能力を生かすためだった。店を構えた当初は人の住む所と妖怪の住む中間に店を置けば人妖の両方の客相手に商売できると目論んでこの場所を選んだのだが、これが大外れで位置の中途半端さからか人妖両方から客が来ることがほとんど無い。その代わりに賑やかな客以外の人物がよく訪れるような店になっている。

今日は日差しが暖かいのでストーブを点けなくてもよかった。そういえばこの前、霊夢が神社の近くに間欠泉が湧いたと言って喜んでいた。もしも温泉が出来たのなら冬が終わる前に行ってみるのもいいかもしれない。

――カランカラン。

「ああ、もう寒いわ！　今年も寒くなってきたわね」

「霊夢か、いらっしゃい。温泉は出来たのかい？」

噂をすればというやつだ。丁度良く霊夢が扉を開けてあがりこんできて火の入っていないストーブを見ると口をへの字に曲げた。

彼女はこの幻想郷の結界を預かる巫女なのだが僕の見る限り巫女

かどうか疑わしいことをすることが多々ある。
「温泉？　ああ、人は入れないわよ、でも温泉卵なら出来たわ」
　言いながら霊夢は無断でストーブに火を入れていた。いつの間に火の点け方を知ったのだろうか、僕のやり方を見ていたのかもしれない。
「卵だけ温泉に入ってもしょうがないだろう、人が入れるようにはしないのかい？」
「そうそう、聞いてよ。今日ね外の掃除が終わったから部屋の掃除をしようとしたらウチに盗人が上がりこんでいたのよ」
「盗人だって？」
　ずいぶんといきなりに温泉の話が盗人話に摩り変わった。だが彼女と会話が成立しないのはよくあることなので僕はもう慣れている。
　しかし、霊夢の住んでいる博麗神社は盗る物など無いだろうに、博麗神社で盗みなんてその盗人は余程の間抜けだろう。確かに神社に貴重なものはあるだろうがそれらに金銭的な価値は無いと言っていい。
「部屋の掃除をしようとしたら箪笥に手をかけていたの。すぐ追い出してやったわ。それでその後に掃除をしていたらお茶が無くなりそうだったのを思い出したのよね」
「それでたった今お茶を買った帰りというわけだ」
　僕の指摘に“そうよ”と言った霊夢は先ほどから手に持っていた茶筒の蓋を開けて僕の鼻頭に突きつけてきた。
「ほら、いいでしょう？　香りが良くて驚いたの」
「それで、お茶を買った帰りに僕の店に寄った理由はあるんだろう？」
「ええ、さっき言った盗人が外来人らしくて、里に行くって言い出したの。危ないし、私も里まで送るのが面倒だったから御札を渡したんだけど……。道中見かけなかったのよね」
「それで、その盗人の外来人を捜しにわざわざうちに来たのかい？」
「違うわよ。急須を借りにきたの」

そういうと霊夢は平然と棚から急須を持ち出してお茶の準備をしはじめた。家に帰るまで待てなかったのだろう。
どうやら話を本題に戻したと思ったのは僕の気のせいだったらしい。

その時、コンコンと控えめに扉を叩く者がいた。それに倣うように控えめに扉が開く。
――カランカラン。

「すいませーん。誰か居ますかー？」
扉の隙間から女の子の顔が生えて店内をきょろきょろと店の中を窺う。
そのおっかなびっくりな様子に疑問を覚えつつも僕は客人に対する対応をする。
「いらっしゃいませ。何か御用ですか？」
「あ、すいません。ここってお店なんですか？」
「見かけない顔だね。ここは道具屋“香霖堂”だよ」
「あ、やっぱりお店だったんだ」
安心したのだろう、少女は改めて扉を開き店内へと入ってきた、その手には身丈半分はありそうな大きな箱を引っ張っている。
「ああ、コイツよ。さっき言ってた外来人の盗人」
「あ、博麗の巫女さん」
「ずいぶん遅かったのね。私は里まで行って帰ってきたわよ。アンタよっぽど方向音痴か、きっと足が亀なのね」
「違うわよ。それともう盗人は止めて」
霊夢は盗人と言っていたが少女の様子から見るに盗人や押し入り強盗には見えない、恐らく霊夢が一方的に盗人と勘違いしたのだろう。
道行　詠と名乗ったその少女は霊夢からお茶を受け取り、大きな

箱を椅子代わりに事情を話してくれた。
話を聞くに少女は外の世界で旅をしていたらしく、神社で雨宿りをした際に敷居を跨いで境界を越えてしまい、そこで霊夢と顔を合わせたらしい。
そして、彼女は元の世界に戻る霊夢の提案を拒否して観光目的で博麗神社からなんとか此処まで歩いてきたらしい。
「それでね、途中で妖怪に襲われたわよ……いや、悪戯されたのよ。背中に羽が生えててね小さいのが三匹」
「それなら妖精よ。渡した御札は？」
「貼り付けたわよ。ぺしっとね」
少女は霊夢に自分の額を指してみせる。
「直に？」
「へ？」
「馬鹿ね。それは、地面に張るのよ」
「ああ、だからあんなことになったのね」
何を思い出したのか納得したように微笑する少女を見ていて僕は思う。元の世界に戻らず観光すると言うところといい、この詠という少女は外来人にしてはずいぶんと“らしさ”が無いように思える。
外来人の中には藁をも掴むような必死さでここに辿りついた者も居たというのに、この少女はよほど肝が据わっているのだろうか。
霊夢がやかんのお湯で次のお茶を準備しだす。この調子で茶菓子まで持ち出されてお茶会になっても困る、本題に入らねば。
「それで、観光とは言ったけれども君はこれから具体的にどうするつもりなんだい？」
「里に行って宿探し。その後は紅魔館に行ってみようかなって思ってるの。で、道を尋ねようかなって思って」
この場合、道を聞くだけで店に来る彼女が不躾に見えるがこれはこれで僕にとってはチャンスだ。
「うーん、そうだね……道を教えるのは構わないが、僕も商売人だ。何か買ってくれると助かるんだが」

「む、それもそうよね……でも、私幻想郷のお金なんて持ってないですよ」
少女は胆は据わっているが人間らしい所がある、こんな素直な手は霊夢や魔理沙なんかにはまず通用しないだろう。
ちなみに、彼女がお金を持っていないのは分かっていた。もちろん僕の目的はお金ではない、外来の品を手に入れることだ。外来人は幻想郷にはない珍しい道具を持っていることがよくある。だからこそ彼女の引っ張ってきたずいぶんと大きい箱に何が入っているのか僕はずっと気になっていたのだ。
「物々交換というのはどうだろう。珍しくなくても二束三文くらいにはなる」
「物々交換ねそれなら大丈夫。……と言っても私お金になりそうなもの持ってないですけどね」
「価値の有る無しは僕が判断するよ。それに、君がこの幻想郷で旅をするのに必要なものもあるだろう？」
「必要なもの。えーっと……」
少女は自分の服装と僕と霊夢の服を見て気付いたのだろう。だが、先に口に出したのは霊夢だった。
「服が変よね。あとその箱も変よ」
「これは駄目よ。ロシナンテは大事なんだから。じゃあ店主さん幻想郷らしい服とか見せてもらいますよ」
ドレスに和服。メイド服の住人も居るこの幻想郷で“らしい服”というのもあるのだろうか。
「幻想郷らしい服か、とりあえず奥にあるから好きなのを選んで構わないよ。その代わり君の持っている箱を見せてもらってもいいかな」
「乱暴に扱わないでくださいよ」
そう言うと少女は店の奥へと姿を消した。
さて、少女の許可を得たので早速僕は箱の中を拝見させてもらうことにした。“ロシナンテ”と呼ばれた箱を横に倒して中を開く。

「なんだか、どうでもいいようなものばっかり入ってるわね」
「生活必需品って云って頂戴よ」
店の奥から少女の声だけが返事をするが正直僕も霊夢と同じく拍子抜けしていた。
箱の中は衣類に食器、寝袋にナイフなど旅人らしい道具ばかり。見たことがあるものばかりで僕が期待していたような珍しい物は見当たらなかった。
彼女がロシナンテと呼んだ箱も頑丈な普通の入れ物らしい。
「この服、店主さんの服ですか？」
声に顔を向けると店の奥から少女が首と服だけを出していた。
「霖之助さんの服だと大きいからやめた方がいいわよ」
「そういう霊夢も着ていたじゃないか」
「そうだったかしら」
いつだったか霊夢が勝手に僕の服を着たこともあった。だがあの時は服の修繕が終わるまでの話だ、彼女が普段着として着るにはサイズが合わないだろう。
「君くらいのサイズなら確か天狗の服が奥に入っていたはずだよ」
「奥……おくっと」
少女の首が引っ込み、しばらく漁る様な音の後に“あったあった”と声が聞こえた。

「うん、これならピッタリ。これがいいな」
しばらくして、奥から出てきた少女は白と黒の天狗の服に身を包んで頭にリボンまで結んでいた。なかなか様になっている。ただひとつ、彼女のその足が裸足なのを除けばだが。
「裸足で神社から歩いてきたのかい？」
「ちょっと靴無くしちゃって……靴とかもあります？」
「ああ、あるよ。ちょっと待ってくれ」

天狗の服なら高下駄が似合いそうなものだがそれもあんまりなので僕は普通の靴を取り出して少女に渡した。
「裸足で神社か、まるで修行だね」
「修行？」
「聞いたこと位あるだろう“百度参り”だよ」
少女はピンときていない様子だったので僕は少女に百度参りとその経緯について語ることにした。
元は、近くの氏神神社や有名な社寺に、百日間毎日参拝するというもので、これを百日詣といい。回数を重ねることで仏さまと顔なじみになり、信仰心の篤さと願いの切実さを訴えてご加護を得るのだ。
それが簡略化され、百日もかけていられない急を要する祈願があって、一日に百度参るという形で百日詣の代わりとするようになった。それが百度参りだ。
そして百度参りは人に見られないように行うとか、裸足で行った方がより効果があると言われている。
「そのまんまね。裸足でこっそり」
ちなみに話の間、霊夢は知っている様子で満足そうにお茶を啜っていた。
「裸足でこっそりしてたけど。百度参りでも、盗人でもないわよ」
「だけど、神様と仲良くなるためにする百日詣が簡略化されて、百度参りは神様との交流じゃなくなっている。自分のための修行になってしまっているんだ」
「なんで百度参りが修行なの？　お祈りだったんでしょう」
「修行というのは独りでするものだ。修行をしているということは自分の未熟を示してしまう恥ずかしいことだからね。だから人に見られないようにこっそり足音も立てずに行う百度参りは神様のためじゃなく自分のためにする修行なんだ」
少女はふんふんと興味深そうに聞いていたが、ふと疑問が浮かんだのか“んー”と小首を傾げた。

「だけど百日詣でも……毎日同じ来客があると神様もうんざりしそうよね。そんなので神様と仲良くなれるのかな？」
「毎日盗人に入られたんじゃ神様もたまらないものね」
「あーもー、だからー」
霊夢も分かっておちょくっているのだろう、少女の方も分かってやっているように見える。
だが、確かに少女の言うことも一理ある。信仰こそが神様の力となるが、信仰を示し顕すための行動は神様ではなく人が決めるのだ。それはおかしい、時間がないから回数だけこなせば良いというのはあまりにも虫が良すぎるのではないか？　形骸化という言葉もある。それが百度参りだ。
だが、もしも百日続けて毎日同じ客がやって来たら僕もうんざりしてしまうだろう。つまりそこに信仰心がなければ百日詣も形骸化してしまうのだ。

Ｉｔ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｓ．．．．．．．．

三話　宵闇よりもより深く、十に至れば二重に並び（前書き）

あらすじ

魔法の森を彷徨って古道具屋“香霖堂”に辿り着いた私。
店内には店主のである森近霖之助さんと博麗神社の巫女さん。
人間の里への道を訊くついでに私は幻想郷で過ごすために服と靴を物々交換してもらう。天狗の服だそうで、動きやすい割に見た目も悪くなかった。
そうそう、店主さんの趣味だろうか私の裸足の足に掛けて百度参りについての話を聴かせてもらった。
やっぱり幻想郷の住人は一風変わっているものだ。

三話　宵闇よりもより深く、十に至れば二重に並び

一風変わった店主の経営する幻想郷の古道具屋、香霖堂を後に、魔法の森からしばらく歩くと人家の群れが見えてくる。

人間の里。私はここにきてようやく幻想郷でも人の住む場所にたどり着けた。今まで博麗神社だったり香霖堂だったりと点々とした場所を転々としていた身として、そこはようやく安心ができる場所だった。

早速、里に入り通りを練り歩くと幻想郷の世界が外の時代にいかに逆らっているのかが改めて良く分かった。私の住んでいた外の世界から見るとずいぶんと古風な建物、服装は着物が一般的でそれはまるで映画のセットの中に紛れ込んでしまったような気分だった。

だが、映画とは違う。そこに作り物はなく生活という名のリアルがそれらを形作っている。里には活気もあり、時代観の違いも浮いたような違和感というよりは田舎に来たような安堵感すら感じられた。

そんな見物をしながら通行人に宿の場所を聞いてなんとか私は目的としていた宿屋にたどり着けた。

「すいませーん」

声をかけながら中に入る。中は宿屋なのだろうか疑いたくなるような普通の家だった、もちろん昔話に出てきそうな古風な家だ。

すると、中でなにやら料理をしていた中年の女性が私の声に振り返る。

「何だ、天狗様かい？　あら、羽が無いね」

「いえ……こう見えて人間なんです」

香霖堂でもらった天狗の服のせいだろう、里に入ってから何度か天狗と間違えられて丁重に挨拶されたりした。どうやら人間の里で妖怪の類は敬われているらしい。

ちなみに服は香霖堂の店主の霖之助さんとの物々交換。ちなみに

靴もセットで私の持っていた携帯ミュージックプレイヤーとそのほか細かな雑貨いくつかと交換して貰った。
「宿をやってると耳にしたもので。部屋をひとつ借りたいんですけど」
「なんだ、宿かい。ああ、でも宿っていってもウチはそんな上等なもんじゃあないよ。部屋が余ってるから貸してるだけだけれど、それでもいいかい？」
「そんな、充分です。今からでも荷物を置かせてもらっても良いですか？」
「部屋は二階だよ。好きな部屋を使うといい」
そう云うと私の目の前に女性の手が出てくる。
「？」
「宿代だよ。大丈夫、安くしとくから」
宿代……。宿代か、代金か。
ああそうだった。
「ちょっと……待ってくださいね」
私は視線をそらし、数秒思索してからロシナンテのキャスターをくるりと回した。
「ちょっと用事を思い出したんでまた後で来ますね」
「どうしたんだい？　まぁ、別に私は構やしないけど」
「じゃあまた」
そそくさと私はその場から出て行く。宿屋から通りに出て自分の顔が赤面していることに気付く。仕方ないだろう。
実に恥ずかしい。ついいつものクセで忘れていた。宿を借りると云っておきながらだ。

私には宿代が無いんだった。

“宵闇よりもより深く、十に至れば二重に並び”

宿屋を後にした私は顎に手を添え、通りを歩きながら頭を唸らせていた。

さて、どうしたものか

……。

いや、どうするもこうするもないのだろう。

私が目を向けると通りで商人が食べ物を売っているのが目に留まる。そこで食べ物の対価として支払われるもの……。

お金。

そう、金だ。お金、これがなくてはご飯も食べられない、無一文のまま森で蛇やキノコを食べるようなサバイバル生活なんか御免こうむる。

今更だけど、こんな事なら霖之助さんに適当な雑貨を換金してもらえばよかった。

まぁ、過ぎたことを後悔してもしょうがない。兎にも角にも、何か適当な稼ぐ手段を見つけなくては。

「とりあえずはやってみますか」

前向きに、前向きに。そう云い聞かせ、両手で頬を叩いて私は早速近くの手ごろな家に声を掛けていった。

しばらくして、私は通りの脇に無造作にロシナンテを立たせていた。何をしているのかと訊かれれば“私のできるお金儲けの準備”だ。

地面を均してロシナンテの位置を調節、水平になるようにしてその上に太めの薪を置き立てる。ちなみにこれはそこらの家に云って譲って貰った物だ。

「よしっ」

準備は完了。ロシナンテから距離を取り、私はひときわ大きく息を吸い、大きく手を広げて言い放つ。

「皆さま、御耳を拝借！　御目を拝借！　不肖ながら只いまよりわたくし道行詠の芸をご覧に入れたいと思います」

声高らかに口上を述べると、通りを歩く皆が振り向き、興味を持ってくれた人が数人寄ってきてくれた。出だしは上々、私は懐から一本のナイフを取り出す。

幻想郷に来てからというもの、森に迷ったり靴をなくしたりと甲斐性の無いような私だが……こう見えて胸を張れる特技がある。一つ目が“手品”。そしてダーツやナイフ投げといった“投擲”の二つ。

「まずは小手調べ。このナイフを四間ほど先のあの的に突き立てましょう！」

つまりは“大道芸”で稼くわけだ。稀に多めに御捻りを投げてくれる人がいるのでそういう人にめぐり合えば万々歳だが、少なくとも宿代くらいはどうにでもなるだろう。

ちなみに特技と云うだけあってナイフ投げなんかはそこらの人よりは巧いと自負している。直打法で7メートル、まわしていいなら15近くまでやれる。

観客に魅せながら左手に持ったナイフを逆手にする。そのまま半身に構えて左手を右肩にもっていくように振りかぶる。

本来、直打法という投法は腕を使って投げる。これが手首を使って投げると変な方向に力が掛かって回転してしまうのだが、私は力の方向を手首でコントロールできるので直打法に手首も加えて投げるようになっている。
「せぇのッ……！」
指と手首で微調整、投げるフォームよりもナイフに真っ直ぐに力が掛かることを意識してカタパルトの如く撃ち出す。
揺らぐことなく、真っ直ぐに。鈍くも響くキレの良い音と共にナイフは的に突き刺さった。
それとともに周囲から感嘆の声があがる。
見物人の反応に満足しつつ私はトランプケースを投げ銭入れ代わりに芸を続けていった。

芸を始めて一時間ほどたっただろうか。
声を上げたり、大仰に仕草を混ぜて、観客の人に協力を申し出たり、引き込む努力もした。
私の特技の披露に見物客は来た、確かに何人も来て私のナイフや手品に関心、感嘆してくれた。
けれども。
「何で……子供しかよってこないのよ」
私の落胆を他所に服の裾がぐいぐいと容赦なく引っぱられる。
「すげーどう投げんだ？」
「オレもやらしてくれよ、なぁなぁ」
ちょうど私の芸を観ていた二人の男の子が服の裾を引っ張って私にナイフを強請っていた。
「……あーもぅ。一回だけよ一回だけ」

仕方ない。投げれば満足するだろうと私は少年たちにナイフを渡してあげる。
「お前ずるいぞ、俺が云ったんだから俺が先だろ」
「俺が貰ったんだから俺が先だって」
はてさて。何故だろうか、私の芸に肝心の大人が全然食い付いてくれない。初めは観てくれるがしばらくすると皆、右に倣って去ってゆく。当然、御捻りは無い。長々と観てくれるのは子供ばかりだ。
私の芸が悪いのだろうか。まさかここにはよっぽど巧い大道芸人が来るのだろうか。
「どうせあたんねーんだからさっさと投げろよ」
「いっくぞー！うぉらぁ」
いつのまにやら順番が決まったらしい。少年の一人が腕をこれでもかと振りかぶり力の限りナイフをブン投げた。
ちなみにナイフがまっすぐ飛ぶ飛距離には限界がある。子供だから仕方ない、投げたナイフは投げた直後から変な方向に加えられた力のままにくるくる回転していた。
そうして弧を描いて正に“的外れ”のままに的をスルーして飛んでいってしまった。
そして、あろうことかその回転するナイフが平然と空中でキャッチされた。
「お前たち。授業中に抜け出すとはどういうことだ」
云い方から察するに先生だろうか。キャッチした本人、青と白の服を着た女性が的の向こうでナイフを手に眉をひそめていた。
「……」
「……」
女性の言葉に申し訳なさそうに、俯き視線をそらす少年たち。だが怒られると分かっても逃げ出したりしない素直さに私の頬が緩む。
怖がっている子供たちが十分反省したと分かったのだろう、女性もやわらかい溜息をもらす。
「……まったく、反省したのならもう戻りなさい」

女性が表情を緩めて諭す様に云うと子供たちは何も云わずにそそくさと寺子屋らしき家の中に入っていった。
男の子たちが戻ったのを確認した女性が歩み寄って私にナイフを手渡してくれた。
「商売の邪魔をして申し訳ない。筆子達が粗相を」
「いいえ、お気になさらず。開店休業でしたから」
私が冗談めかして云うと“それなら尚更”と冗談を汲んだ上で云ってくれた。教師らしいと云うべきか、冗談は一歩後ろに礼節が前に来る人らしい。
「大道芸ですか。この芸は、魅せるために？」
「いえ、宵越すくらいに稼ぐために」
多いのか少ないのか、どちらでもある私の冗談に女性はくすりと笑う。
「それはさぞ大変だろうに。ここで芸をしても妖怪に比べられたら堪らない、それに……」
私がナイフを手の上で弄ぶ様を見てから云う。
「ナイフを投げるのならよっぽど巧い人間もいる」
“妖怪”にナイフ投げの“巧い”人か……」
どおりで見世物にならないわけだ。
「では、授業があるから失礼させてもらうよ」
そう云うと女性はトランプケースに一枚の硬貨を紙に包んで入れてくれた。一枚と云うのは慈悲でもあり戒めでもあるのだろう。ここで私の芸は“慈悲も含めてコイン一個”が正当な評価。
そのまま女性は少年たちの入っていった寺子屋へと戻っていった。
「コイン一個じゃ宵も越せない……よね」
女性が戻っていったところを確認して私は休憩がてら私は家の外壁にもたれて座り込む。
“妖怪に比べられたら”か。ああも云われちゃあ流石に息もつきたくなる。それに、こっちに来てから歩きっぱなしの立ちっぱなしで流石に疲れた。

早速、トランプケースに入った唯一の御捻りを開いて、中から硬貨を取り出し手のひらで玩んでみる。きちんと見るのは初めてだ、外の世界とは違う、酷使からくる重みを感じる、悪く云えば粗悪な硬貨だった。

手品で百枚くらいに増やせないかな。と、出来もしないことを考えながら硬貨を指の間を転がり滑らせて姿を瞬時に隠してみる。

これくらいは手品の一環だ。隠すことは基本、云ってしまえば容易だが増やすとなると手間がかかる。お金も一緒、増やすのに手間が掛かるが使って消すのは楽だ。

なら、手品を魅せれば百枚に増えるだろうか？　無いだろう。見栄えが良いからナイフを投げたんだ。

そもそも大道芸で稼ごうなんてムシが良すぎたのだろうか……。

そんな思考を廻らしているとまたしても服の裾が引っ張られる。

「ねえ、ちょっとそこの人」

「何？　お姉さんちょっと考え事を……っ！？」

また子供が来たのだろう。そう思い、声に首を向けた私は目を剥いて身を後ろへと引いた。硬貨を取り落としそうになったのを堪えて声の主の様相に素直に驚く。

ピンクの服をきた少女。そこまでなら別に驚かない、しかしその頭には兎の耳がぴこぴこ揺れていたのだから驚きもする。

ここでバニーガールなんて云うと無粋だろう。うさぎの妖怪だろうか？

「お賽銭の集金に参りました」

「……お賽銭？」

云うと兎の少女は小さい木の箱を私の眼前にだしてきた、見ると箱は小さな賽銭箱の形をしている。お金を入れてくれと云うことだろうか。

お賽銭、集金。賽銭は神社で入れるものだ……真っ先に思い浮かんだのは博麗の巫女さんだった、その集金だなんてどういうことだろう。

「もしかして……」
私は懐に入れておいた御札のことを思い出す。恐らくコレの代金の請求にきたのだろう。
「御札は有料だったわけね。あの巫女は……ま、しょうがないか有り金持ってって」
御札の代金くらい自分で徴収すればいいのに、わざわざお賽銭なんて肩書きまでつけて嫌な巫女だ。
「コレで足りる？」
「お賽銭だから気持ちだけ入れてもらえばいいよ」
なら良かった。とはいえもしも足りないといわれても今はすずめの涙しか流すものもない。私は未練も無くたった今稼いだ一枚の硬貨を兎さんの持つ小さなお賽銭箱に入れてあげた。
なんだ、コイン一個あればお賽銭くらいできるものだ。
「はい。どうぞ」
「大丈夫、きっと幸運があるよ」
よほど私の様が不憫に見えたのだろう。うさぎさんはぽんぽんと私の頭を撫でて励ましてくれた。
「あ、ありがとう……」
うさぎさんの好意は素直に嬉しい反面、小さな子に励まされるのは情けなくて複雑な気分だった。
「てゐ！　もう薬は売り終わったから帰るわよ」
その時、道の先から声がした。見ると角のところに大きな薬箱を手に持った少女が此方を見据えていた。ちなみに頭に兎の耳がついているのも見える、外見から見るにこの子の姉だろうか。
「はいはーい」
目の前のうさぎさんはその声に身を翻し素直に駆けていく。
遠目に見るが姉らしき妖怪の服はブレザーにプリーツスカートを身に着けている。兎の耳がなければ学生と云われても無理が無い。
存外、幻想郷の服も近代的なものがあるものだ。視線を向けているとうさぎの二人はそのまま一緒に角に消えていった。

「妖怪って可愛い子ばっかりなのかな……」
美鈴に八雲紫、森で見た三人組も先ほどのうさぎさんもそうだ。そう考えていると不意に先ほどのうさぎさんの言葉を思い出す。
“きっと幸運があるよ”か……幸運があれば端からこんな路上で大道芸なんかしなくて済むだろうに。
視線を向けると夕日が茜色の日を射して日が沈んでゆく。ついでに私の心も沈んでゆく。
「日が落ちる。仕方も無い……か。野宿かぁ」
こんなことならどこかの店で手伝わせてもらえないか探したほうが良かったかもしれない。
それもこれも、今となっては、だ。それのこれのも明日の話。

それは、諦めた私が野宿に適当な場所を探そうと通りを歩いていた時だった。後ろから足音がしたと思うと、小走りに子供が私を追い抜いて眼前に立ちふさがった。
私よりもひとつ頭小さい少女は紅い着物を身に着けていて、私に向かって屈託も無く笑顔を向けた。
「ちょいとそこゆく天狗様」
また天狗。この一日で散々云われていい加減に飽きてきた。
「……こう見えて人間なんですけど。何かご用？」
「人間だなんて妙な謙遜をなさりますね。天狗様は宿をお探しなのでしょう？」
「探してますけど……それが何か？」
「それならぴったりの場所がございますよ」
しかしまぁ、小柄な身体に似合わずずいぶんと達者な口でしゃべる。幻想郷の妖怪はかわいい姿が多いと思えば、もしかして妖怪だろうか。
「少し外れになりますが、あそこの家屋です。今は住む者が居なく

なったので空き家になっているんですよ」
少女の指す先に視線を向けると先には生活感の無い家屋があった。確かに空き家に見える。
「ですが、人の物で無くなろうとも里の物。勝手に扱えばいざこざにもなりましょう。取り纏めている者がそこの道の先に住んでおりますので、彼に許可をもらえばよろしいかと」
私の都合に合った話だ。その、ずいぶんと至れり尽くせりな言葉に流石の私も眉をひそめる。
「それで……私には嬉しい話だけど。無闇な親切は疑うようにしてるの、疑いたくは無いんだけどね」
「お疑いですか？　騙すなんて滅相も無い、私はしがない情報屋ですよ。情報屋が天狗様にご贔屓頂ければこれ幸いというわけです」
そういうと少女は意味深ではない、やはり屈託の無い笑顔で笑っていた。まるで邪気が無い無邪気なものだ、疑った私が虚を突かれたような気分になるくらいに。
「だから私は天狗じゃあ……」
「それでは、またお会い出来たならご贔屓に」
云いかけた私の言葉を無視して少女はそのまま道の先に駆けていってしまった。
「空き家……ね」
どうにも狐につままれたような気分だったのだが……私の視線は少女の云っていた道の先に向いていた。

疑うべきだったかもしれない、でもそれ以上に“情報屋”の女の子の云っていた家のことが気になっていた。仕方も無い私はそのまま素直に示された家を訪ねていた。
遠慮がちに家の戸を叩くと返事の後、中から初老の男性が顔を出

す。
「何か用事かな」
白髪の混じった髪に無精ひげ、少しの酒臭さに私は顔をしかめてしまう。
「あの……あそこの家が空き家だって聞いたんですけど」
私が空き家を指差す、それをみて男性はうんうんと頷いた。
「ああ、あの家か。空き家っちゃあそうだな、誰も居やしない」
半信半疑だったが、どうやら女の子の話は本当だったらしい。
「そうだなぁ、ふた月ほど前に住む者が居なくなってほったらかしだ。……なんだ、あんた住みたいのかい？」
「住むとまでは……宿を探していて。一泊だけでもいいんです」
「空き屋になってるから別に構いやしないが……はいどうぞと住まわしちゃあお互い周りに示しがつかないだろう」
示しか、確かにそうだ。宿代わりとはいえ、余所者が何の苦労もなしに屋根の下では心象も悪い。
「それが、お金がなくて」
「そうだろう。丁度いい仕事がある……ちょいと妖怪を退治してもらえないか？」
「……退治？」
「何、最近ふらふらとうろついてるのが居るんだよ、家畜が何匹か襲われてもいる。ちょうどあの家の裏手だ。昼間に投げ物していたのはみたぞ、天狗にゃあ楽な仕事だろう」
なるほど、ナイフ投げを見られていたのだろう。だからと云って、そもそも私は天狗とは違う。妖怪退治なんかしたことはない。
そもそも退治なんて何をすればいい？　聖水でも撒くのか、念仏でも唱えるのか、炒った豆でもぶつければいいのだろうか。
こんな冗談しか出てこないくらいには私に縁がない。だがしかしだ、宿を得られるのならと思うと首を横に振るのは躊躇われる。
そして、ひとつだけ退治のアテがあったのが幸か不幸か。
「や、やってみます」

懐にある博麗の御札の束ならどうにかなるかもしれない。
いや、どうにか上手くやるしかない。
私が頷くと男性は“がんばってくれ”とお使いでも頼むような気軽さで云ってくれた。

男性と分かれて、私は例の空き家に足を運んでいた。退治するにしてもとりあえず荷物を置かせてもらって、ついでに少し息を付ける場所が欲しかった。
戸を引いて家屋に入ると、がらんとした空気が廃屋を連想させた。靴を脱いで足を乗せると積もった塵が足の裏に張り付く。
埃の薄化粧と云ってはなんだろう、家の埃は歩くたびに足跡が残るほどに積もっていた。
ロシナンテを持ち上げて、畳の上に無造作においてやるとあからさまに埃が舞った。差し込む夕日がそれを照らしチラチラと静寂の中を埃が舞い落ちてゆく。
「埃まみれで、のどが悪くなりそう」
とりあえず私は家の中に何があるのか物色しようと奥に足を進める。そのとき何かに足をぶつけてバランスが崩れる。
「あっ！？」
盛大な音と共に部屋中に埃が波のように吹き上がった。
「痛ったぁ……」
無様にも足を放り出してすっころんでしまった。あれに躓いたのだろう、見ると小さなちゃぶ台が私と共にひっくり返っている。
大所帯では無かったのだろう、それは二人で座れば丁度良いくらいの大きさのちゃぶ台だった。
「……」
何も云わず、私はちゃぶ台を元に戻してやる。

ここには誰が住んでいたのだろうか、何があったのだろうか。それらを男性に深く訊くような真似はできなかった。
誰かが此処に住んでいた、そして今は居ない。それは悲しいことだろう。それだけ分かれば、興味本位で訊くような事情でない事くらい分かる。
「掃除は明日にしようかな」
何かを振り払うように独り言がもれる。我ながら滑稽だろう。
“誰かが此処に住んでいた、そして今は居ない”ただそれだけで私は悲壮に囚われてしまいそうになる。
小さなちゃぶ台。新しさの残る桶。一際立派な茶箪笥。意図的に付けられたのだろう、傷の入った柱。
生活感が“無くなってしまった”。その喪失感。どれだけの想いがここにはあったんだ。家を満たす重い想いが私を感化する。
勝手に瞳が潤んでくる。私は駄目だ駄目だと云い聞かせて目元を拭う。
空き家の中で泣いている女なんて変な人にしか見えないじゃないか。私らしくも無い。だって、そうだろう。
「水……汲んでこよう」
昼間に飲み干して空になった水筒を手に取り私は井戸水を汲みに行くことにした。
まるで逃げるようだった。だが、それしか仕方も無かった。

日が沈み夜が訪れる。月明かりが闇を照らす頃、私は家の縁側に座っていた。ただ、風情を求めて座っているわけじゃあない。件の妖怪は縁側の方、つまりこの家の裏手で夜によくうろついているらしい。

ここからは良い月が見える。待つだけで特にやることも無いのでぼーっと月を見上げて影を落とす雲を眺めていた。
風に揺れる笹の音も心地よい。家の裏手には竹林が群生していた。男性に訊いた話では“迷いの竹林”と呼ばれる有名な竹林らしい。
何でも里の人間が入れば目印も無いままにたちまち迷ってしまうらしい。余所者の私だからだろう、迂闊に入ることの無いようにと男性は念を押してくれた。
その話の間に竹林に住む薬屋が里によく来ると聞いて私は脳裏に昼間に見かけた薬箱を持ったうさぎさんを思い出していた。
もしかして彼女らが竹林に住む薬屋なのだろうか。だが、竹林に住むのなら何故あのうさぎさんはお賽銭箱を持って私のもとにきたのだろうか？　博麗神社なら方向が違うだろうに。
「……ん？」
そのとき目の端に違和感を覚える。私は目を瞬きなおしてそれが気のせいでない事を確認する。
黒い球体がふわふわと低速で漂っている。大きさにして直径5メートル程度か、球体は夜だというのに輪郭がくっきりと分かるくらい不自然に黒い。
今まで可愛らしい容姿の妖怪ばかり見てきたが、いよいよ妖怪らしい妖怪の登場らしい。
しばらく様子を見ていると黒い玉はそのままゆっくりと竹林の方へと浮遊して竹にめり込んでゴツンと鈍い音を出した。
「痛たーい」
見た目のわりにずいぶんと可愛らしい声が響いた。
その素っ頓狂な声に、そうだ退治せねばと思い出して私は縁側から立ち上がりその黒い玉に歩み寄った。
「さぁ、待ってたわよ」
のっぺらぼうのくせに耳くらいはあるのか私の声に黒い玉がくるりとこちらを向く、いや真っ黒なので向いた気がしただけだ。
「あんた誰？　人間か妖怪？」

「何度も何度も……こう見えても人間よ」
「どうも見えないからわからないー」
「そんな丸いだけで眼がないから見えないんでしょう」
「眼くらいあるわよ」
すると眼前の闇が裂け霧散してゆく。闇を纏って擬態していたのだろうか、中から白黒の服に身を包みリボンを結んだ少女の姿が現れる。
「日の光はご免だけど。月の光は嫌いじゃないの、夜は闇をだす必要が無くて明るいわ」
やはりこうなのか、ここの妖怪の姿がどういうものなのか大体分かってきた。
「で、人間は何の用？」
「いやね、最近ここらで妖怪がフラフラしてるって里の人が怖がってるのよ」
「それはおっかないわねー」
「というわけで私の寝床のためにあなたを退治してやるのよ」
「寝床？　私は布団じゃないわ。……でも、私が居ればきっと安らかに眠れるわね」
「あなたが居たら私が眠れるわけでもないんだけど……」
「そう？　私の闇は夜より深いのよ」
その言葉を皮切りに少女はニンマリと笑顔を作って両手を広げる。対する私は仕込んでおいた札を取り出して少女の額めがけて駆けた。
「暗ければいいってわけじゃないわ、暗すぎると人は不安になるのよ」
先手必勝。額にこの貼り付けてやればお仕事終了だ。
腕を突き出して手の平にある御札が触れる瞬間、少女の身体が真上に飛んで逃げる。
不意の動きに貼り付けそこないって勢いのままに私は前につんのめる。見ると少女はふわりと宙を舞い、私の後ろで距離を取って首

を傾げていた。
さすがに空を飛ぶのは卑怯じゃあないだろうか……。
「弾幕ごっこ、じゃないの？」
「えー……と。弾幕ごっこ？」
弾幕ごっこ。少女の云ったそれは確か一年前に一度だけ見たことがある。
互いにスペルカードを魅せ合うという、確か実力主義の決闘ではなく人間と妖怪の実力差があってもできる勝負だと聞いた。この幻想郷ではこの試合で決着を付けることが良くあるらしい。
「そ、そうよ。弾幕ごっこで勝負よ」
それならそれでいいだろう。客観的に見て弾幕ごっこに関してど素人の私が無謀に見えるかもしれないが、まともに戦ったら勝てる可能性はもっとなさそうに見える。それに“弾幕ごっこ”なら人間でも妖怪に勝てるルールのはず、勝てばこの子に帰ってもらって私は宿にありつけるのだ。仮に負けたとしても取って喰われたりはしないだろう……恐らく。
「じゃあ、私から！」
少女がカードを取り出し宣言する間に私はナイフを取り出して構える。

夜符「ナイトバード」

宣言と共にカードに秘めた弾幕が顕現して私の眼前を埋め尽くしてゆく。
「ちょ……と、多いんじゃない！？」
左右交互に鞭を振るうようなその軌跡が二色の弾幕となって折り重なり私に迫ってくる。
避けろ？　これをどう避ければいいんだ。間を縫うのか。
右も左もない前なんか以ての外だ。どうしようもなく私の足は無様に後ずさりしてしまう。

「えっと……えっと！？」
規則的に動く弾の動きは分かるがそれが複数重なって頭が追いつかない。
頭で追い詰められていると分かっているが身体が追いつかない。
「やば……」
無理だと頭で判断してしまい、反射的に手にあった札を自分の足元に投げつけた。

夢符「封魔陣」

地面に張り付いた御札を中心に周囲を四角く青白い光が立ち昇り弾幕を遮断する。その余波で周囲の弾幕が消し飛び周囲から弾が消え去った。
なるほど、結界とはこういうものか。
「へー。あんた巫女の弟子なの？」
「違うわよ」
云う間に弾幕が補充されてゆき、あっという間に先ほどと同じ光景が眼前に作られてしまう。本当に“一息”着くしか間がない。
また結界を使ってもいいがこのままだとジリ貧になるのは目に見えている。
やはり、避けなくてはいけない。腹を据えて眼前の弾幕に集中してその動きに合わせて間に潜り込む。
弾幕が見えていたわけじゃないが、偶然被弾せずに滑り込めた。
避けれた。そう思うが早いか、既に眼前には次の波が迫っていた。
合わせ鏡のように右と左から規則正しい弾幕が私を挟撃する。
「っ！！」
避けられない。気づかないうちに諦めた反射で両腕が顔をかばっていた。
直撃。

弾は当たった瞬間に炸裂。
響くような衝撃と共に頭の中がぐるんと廻った。身体に浮遊感を感じて一瞬、夜空が目に映ったと思ったら私は大の字に地面に叩きつけられていた。
「痛っ……」
これはやばい。頭がくらくらする、意識がはっきりしない。頭が回らない……。
痛い。痛覚は生きてる、刺すような痛みも違和感も無い、全身の鈍い痛みだけだ、打撲か何かだ。動け……しっかりしろ私。
なんだこれ？　思う私の意思に反して身体は云うことを利かない。麻痺をしたように全身の自由が無い、その不自由だけが良く分かった。
「あなた弱いねー。他の人間のほうがよっぽど強いわよ」
被弾……か。
意識の焦点が合わない。そのままズレてゆき意識が遠のいてゆく……。
その時、土を踏みしめる足音がした、私の視界の月の明るさに影が落ちる。
「さて、そこまでにしなさい」
声、誰？　誰かが立ちふさがっている？
駄目だ、気が……遠……。

四話　水は低きに流れ萃まり溜まり、流れぬ水はやがて腐るのみ（前書き）

あらすじ

なんとか人間の里にたどり着いた私。

とりあえず宿を取ろうと思ったけれど、肝心のお金を持っていないことに気づいて失態その１

大道芸で稼ごうと頑張ってはみたけれど見事に空振りして失態その２

諦めた私の目の前に“情報屋”を名乗る女の子が現れて空き家のことを教えてもらう

空き家を借りる代わりに私は妖怪退治を引き受けた。今思えば少し無謀だったと思うが、それもこれも宿のため。

その夜、闇を纏った妖怪少女と初めて弾幕ごっこをしあったが見事に被弾して失態その３

それから……えーっと

それから、どうなったんだろうか……？

四話　水は低きに流れ萃まり溜まり、流れぬ水はやがて腐るのみ

「気がついたか？」
聴こえた声にまぶたを開くと差し込む日差しが目にしみた。朝だろうか、昼間のような柔らかい日差しじゃない斜めに射す朝日だった。
仰向けになっていた身体を起こす。ここは何処だろうか。どこかの家の中らしいが、覚えがない。布団で寝ていたことに違和感を覚えて周囲を見回すと私の横には女性が座っていた。
「ええと……」
女性の容姿だ。どこかで見たような見なかったような気がするようでしない気がするけども。

「……どなた？」

四話　「水は低きに流れ萃まり溜まり、流れぬ水はやがて腐るのみ」

目の前の女性はどなただったかな、覚えはあるんだけれども、思い出せない。
うんうんと頭を唸らせて思い出していると、勘違いしたのか女性は私に水を手渡し心配そうに訊いてきた。

「もしや、頭を強く打ったのか？」
「いえ、記憶はあります。えーと……」
記憶はある、喪失などしていない。私は“道行　詠”の偽名を名乗って幻想郷にやってきた。宿を探して人間の里にもやってきた。うん、大丈夫だ。
で、目の前の彼女は誰だっけか？　欠落したわけじゃない、希薄なだけだ。
「昨日、筆子達が世話になったろう」
“筆子”という耳慣れない単語に私の記憶が反応した。
「ああ、寺子屋の……」
青と白を基調とした服に長い蒼白の髪。頭に四角い帽子を付けた姿は確かに昨日出会った先生だった。
「上白沢　慧音だ。昨夜の弾幕ごっこに居合わせたからおせっかいさせてもらったよ」
「ああ、そっか」
弾幕ごっこで負けたんだったな、私。それで彼女に助けてもらったのか。
「それでここは……記憶には無い。と思うけど」
「私の家だ、もちろん上げたのは初めてだ記憶には無いだろう。里の人に事情を聞いたんだ、様子を見に行ってみれば……弾幕ごっこをしているとは思わなかった」
女性が取り出し、布団の脇に御札の束が置かれる。見覚えがある物だ。懐を漁ると案の定、御札が無くなっている。それは私が巫女から貰った物だった。
「確かに博麗の巫女の札は強力だ。確かに“弾幕ごっこ”は安全な勝負だ、だが危険が無いなどということは在りえない」
「助けてくれた事は感謝しています。でも……」
もちろん云われるほど能天気なつもりはない。だが、そうせねばならなかったのだ。それを咎められては困る。
「無一文とも聞いた、ああせねば仕方なかったのなら私も無責任に

止めろなどとはいわない。だが感心はしないよ」
「はい……心に留めておきます」
昨日のイメージの通り、教育的な人だ。云うことが最もな事ばかり。
返す言葉も無いので水を飲んだ。一口二口。飲み終え差し出したコップを受け取ると女性は立ち上がりそれを机に鎮座させた。
「それと、あの妖怪は私が追い払っておいたから心配しなくていい」
「えっ……それは困ります！　妖怪は私が退治するって約束をしたんですから」
私の過剰な反応に面食らったのか、一拍置いて先生はあしらうように云う。
「その約束のことも聞いたよ。全部話は聞いた、約束のことも別に私が退治したとは云わないよ」
他言しない。その意図することを察して頭に血が上った。
「そういう問題じゃなくて！」
「嫌なのか」
「い・や・で・すっ！　私が退治できなきゃ意味がないんです」
私は勢いのままに布団から立ち上がって服を整える。
脇に置かれたお札を懐に入れて、戸に向かう。
「どこに行く。まさか妖怪退治にいくなどと云うつもりか」
「そのまさか。弾幕ごっこであの妖怪をギャフンと云わせるんです」
そう云い残し、一礼してから私は女性の家を後にした。

「まったく、難儀な子だ……」

日が昇り始める、そんな時間なのに里の人は起きて働いている、ずいぶんと朝が早い。外の方が遅いのは灯の価値が希薄だからだろうか。

そんな朝の通りを私は歩きながら思索していた。

あの女性が、上白沢の先生が私の代わりに退治をしてくれた。あそこで“代わりに退治してもらえてラッキー”と云いたいところだが私はそこまで楽観的じゃない。

私が妖怪退治を出来なくては意味が無いのだ。

例えばここで私が退治できなくて別の仕事を探すとする。だが世の中、別の仕事を見つければいいなどと云ったら二度と仕事なんか出来ないと思ってもいいくらいだ。

それに、見ていれば分かる。外のアルバイトのように、はいそうですかと代替の利くような仕事はここに無い。皆生きるに必要な仕事をする、外のように何もかも飽和しているわけがない。

起業するくらいの気概がないといけないだろうここで見つけた蜘蛛の糸が妖怪退治だ。逃して成るものか。

私にだって責任感とプライドくらいある。

そのためにも、私は“弾幕ごっこ”の特訓をしなきゃいけない。

「と、いうわけよ！」
私の説明が終わると興味なさそうな眼で見返された。話を聞く気はあまりなかったようだ。
「何よ、そんな理由で私のところに来たの？」
私の説明の返事に縁側で茶を啜っていた巫女は半ば呆れながらそう云った。
「ええ。遠路遥々、あの陰湿な森を抜けてご教授賜りに来たのよ」
「何で私なのよ」
「アテがなかったのよ。この“博麗神社”しか」
「霖之助さんは？　あのハクタクにも遇ったんでしょう」
「霖之助さんは暴力反対。先生は寺子屋でご教授……そう。アテがなかったのよ。この博麗神社しかね」
「はぁ……」
私の言葉に折れたのか霊夢はお払い棒を手にとって縁側から腰を上げた。だが面倒くさそうな様子に変わりはない。
「弾幕ごっこを教えろ、だなんて。そうね、こうしましょう。私と弾幕ごっこをして負けたらこの話は無しよ。もし勝てたら、私から教えることはないわ」
「勝っても負けても教えたくないのね……」
「だって――」
巫女は懐から御札を取り出して準備をする。ああ、戦う前から分かる、その一挙一動が手慣れていると。
「めんどくさいもの」
幻想郷の異変を解決してきた“博麗の巫女”そんな相手に勝てるわけがあるのだろうか。半ばあきらめ気味に、私もナイフと御札を取り出し、構え相対した。

それから、たったの三分後になる。

「驚いた。本当に弱いのね」
「だから云ったのに……」
満身創痍。大の字に寝転がり、屈辱の晴れ渡る青空を眺めながら私は返事をした。
被弾して昨夜は気を失ってしまったが、こういうものかと身構えれば気を失うようなこともない。いや、やっぱり痛いのは変わりないけれども。
「負けたんだからこの話は無しね」
云いながら立ち去ろうとするので私は用意しておいた包みを懐から取り出して霊夢に見せびらかす。
「そう云うと思ってお茶請けを持ってきたわ」
包みを見て、見上げる霊夢の口元がわずかに緩む。
「そういうものは先に出しなさいよ――って。お金がないから宿に困ったんじゃなかったっけ？」
「霖之助さんに適当に換金して貰ったのよ」
「それで宿代払えばいいじゃない」
「今が良くても、ロシナンテの中身がすっからかんになったら困るの」
「まったく……仕方のない。少しだけよ」
そうして、ようやく承諾を得て弾幕ごっこの教授がはじまった。
まず、霊夢に私がどの程度弾幕ごっこをしたことがあるのかと訊かれた。もちろん私は“一度きり、見よう見真似でルールもよく知らない”と素直に答えた。
霊夢はため息をひとつついた後、口頭で大雑把に弾幕ごっこの概要を説明してくれた。

・スペルカードとは自分の得意技に名前を付けた物で、使うときは宣言してから使う必要がある。

・お互いカードの枚数は予め決闘前に提示しなければならない。
・手持ちのカードが全て破られると負けを認めなければいけない。
・勝者は決闘前に決めた報酬以外は受け取らない。相手が掲示した報酬が気に入らなければ決闘は断れる。
・勝者は敗者の再戦の希望を、積極的に受けるようにする。
・不慮の事故は覚悟しておく。

霊夢の説明が砕けた内容でだいぶ分かりやすかったが、当の私はご教授賜るなんて久しぶりで学校の授業を思い出していた。
「大体こんなところかしら」
「口頭じゃあややこしいわ。こういうのって纏めてないの？」
「色々あるわよ、稗田家の……確か“幻想郷縁起”には書いてあったわね」
しかし説明されたコレは純粋な決闘としてのルールらしい。妖怪退治において霊夢は不意打ちをしたこともあると平気で云っていた。
確かに妖怪退治の前に報酬の交渉なんてやってられないだろう。実際、私の場合も昨夜がそうだった。要は臨機応変ということか。
「まぁルールは大体分かったわよ。見たほうが分かりやすいし、適当にやるわ」
「じゃあ次は、避け方」
「避け方？　弾幕ごっこなんでしょう。何かこう、バーンと格好の良い必殺技とか教えてくれないの？」
「そんなの要らないわよ」
「要らない？」
「そんなもの無くても、さっきの弾幕ごっこ。私の弾幕がどっちからどう来るか、しっかり視得ていたでしょう。目がいいんだからどうにでもなるわよ」
確かに眼では見えていたが、だからと云ってだ。霊夢の弾はありえない方向から誘導してきたりして私には避けようも無かった。
「避けたって倒さないと駄目なんじゃないの？」

「弾幕ごっこっていうものは詰まるの処“当たらなければ勝てる”の」
当たらなければ勝てる？
「避けてればスペルブレイクで相手のスペルカードはそのうち尽きる。極端だけれどもね」
「要は、撃つ前に避けろ？」
「避けなきゃ話にもならないわ」
「なるほどね」
つまり弾幕ごっこにおいて避けるということは撃つよりも前提なのか。
「そうね。避け方……何を教えようかしら、“零時間移動”とかは無理でしょう」
「ぜ……ぜろじかん？」
なんだか悪い意味で格好の良い響きの単語だが、耳覚えなんかはない。
「こういう――」

亜空穴

云いかけたまま巫女の体が忽然と消える。前兆も無いその一瞬に目を剥く暇もない。
「やつよ」
次の瞬間、私の頭上から霊夢が降ってきて目の前に着地した。まるで一年前に見た八雲紫のスキマ、数メートル先から一瞬で私の頭上に移動して降ってきたのだ。
「いわゆる……瞬間移動？」
「無理でしょう？」
「無理に決まってるでしょ！」
断言すると霊夢は仕方ないわねと云って懐から御札を四枚取り出してそれを前方へと鋭く飛ばした。お札は四角垂を描くように広が

り一定のところで静止。まるで縫い付けたように空中で静止した札が頂点となって結界となる。青白い、四角の“壁”を造り上げた。
「何これ。空中に張り付いてるの？」
空中に静止する“壁”に興味のままに私は伸ばした手で触ってみる。
その刹那、衝撃。
電流！？　触れた瞬間、刺し痺れるような痛みと同時に鈍い衝撃音。
「痛っ……！」
電流の奔ったような感覚に私は脊椎反射で手を引っ込めた。
「結界……？」
“警醒陣”って云うわ。少々の弾幕なら止まるから、せめてこれだけ覚えとけば妖怪から逃げれるわよ」
逃げるため……ね。逃げてばっかりでいいものだろうか。そう思ったが口を噤んだ。
まずは満足に自分を守らなければいけない。まずは盾だ、私が剣を持つのはもっと先でいいのだろう。
時間が経過して“壁”が力を失って消滅する。役目を終えたのか、四枚のお札は壁と共にそのまま跡形もなく消滅してしまった。
「じゃあ、あとは頑張りなさい」
霊夢に振り返るといつの間に用意したのか御札の束が縁側に鎮座させられている。
「あ、ちょっと。放りっ放しでどこいくのよ」
「今夜の準備があるのよ」
何の準備だろうか。端的に云うと霊夢はそのままどこかへと行ってしまった。

結界とは面白いもので、身近でも仕切るものであればそう呼ばれるものがある。ちょうど私の横にある縁側。襖のその障子や敷居などもそれだ。

しかし練習している結界は襖とは違う、これは霊力と云われるモノを使って張るらしい。

だがどうにもコツが掴みにくい。例えれば、箪笥の裏にあるそれを掴もうと必死に手を伸ばしても爪の先で引っかくような感覚だ。

だから反復。投げては張っての繰り返し。どれくらい練習したのか良く分からない、だが、縁側に置かれ積み上げられたお札は目に見えて減るくらいには頑張って練習していた。

「何よそれ」

横から掛かった声に顔を向けると昼間と同じような呆れた顔で霊夢がお盆を手に縁側に立っていた。

彼女の視線は私に向いていない、私が練習で展開した一点欠けた結界に向いていた。

「だって四枚も使ったらもったいないじゃない。三枚なら三回練習したらもう一回できるもの」

最初は出来るのかと半信半疑だったが出来てしまったものだから。途中から私は四角ではなく三角でひたすらに練習をしていた。

「まぁ、三角形でも形には成るものね」

巫女は無造作に飛針のような棒を一本取り出して結界に向かって投げる。

すると弾けるような音と共に三点の結界は破壊。針を弾き飛ばして相殺してしまった。

「脆すぎね。障子紙の方がまだマシよ」

「練習中だからいいじゃない」

云いながら私が次の札を取り出していると、霊夢はお盆を置いて

縁側に座り込んだ。
「全く、いつまでやる心算なの。休憩よ」
「ん？」
まだロクに練習も出来ていないのに巫女は何を云うのかと疑問を浮かべて改めて気づく。
ずいぶんと影が長い、振り返ると赤い赤い夕日が私の背中いっぱいに浴びせていたのだ。
「あれ、もう夕方？」
「必死になると見えないものね、あんなに綺麗なのにもったいないわ」
縁側に座り茶を用意する霊夢。私の持ってきた茶菓子もちゃっかり準備している。
「そういえば、幻想郷でも夕日とかは外と変わらないのね」
「知れないから判らないわ。外は違うものなの？　たとえば、外では西から昇ったお日様が東へ沈んだりするとか」
「そんな歌ならあるわよ」
「変な歌」
時間が分かってしまうと溜まっていた疲れまで分かってしまったようで疲労感が溢れてきた。
霊夢の隣、お盆をはさんで縁側に座る。早速、綺麗に切り分けられた茶請の羊羹を摘んで齧ってやる。
「んー甘い」
洋菓子には無い小豆の味と和菓子独特の濃厚な甘味。その糖分がへとへとになった身に染みるようで一層美味しい。
「はい、お茶」
「どうも」
差し出されたお茶を受け取り。その暖かさを掌に移す心地よさ。
コクリと一口、喉を過ぎて、体の中から暖かくなる。
おいしい。単純だがその飾り気の無い言葉の方が的確だ。
うん。とてもおいしい。

横に目をやると霊夢もおいしそうに羊羹を食べている。
それにしても、私とどれ程も違わないように見えるこの少女が幾多の異変を解決してきたつわものだと、霖之助さんから聞いたときは耳を疑ったものだ。
そもそも、霊夢は一体いつから妖怪退治なんかやっていたのだろうか。何故こんな女の子が妖怪退治に駆りだされているのだろうか。
「ねえ霊夢、あなたは何で妖怪退治なんかしてるの？」
私の疑問に何を思ったのだろう、やはりいつもの調子。興味なさそうな、当然といった目をしていた。
「私は巫女だもの」
「そういうものなの？」
「そういうものよ」
どういうものやら、端的に云って霊夢は楊枝で切った羊羹を口に運ぶ。
「それに引き換え。おかしな奴よね」
「誰が？」
「アンタよアンタ」
羊羹の刺さった楊枝で指される。おかしな奴、か……何時だったか“ずいぶんと変わった人”とも云われた覚えがある。
「よく云われるわ」
「そもそも、何で旅なんかしてるのよ」
旅の理由……そういえば何でだっけ。と自分で問いかけて笑ってしまった。一体私は何を改めなおしているんだろうか、と。
「笑うような理由なのね」
「違うわよ。そういう切っ掛けがあったからしているだけ」
ああ、そう云えばと私は思い出す。
旅に出る前。一年前、美鈴と共に見た夕日も綺麗だった。あの時から私はどう変わったのだろうか、自評としては何も変わっていないようにも思えるが、はてさて。
湯飲みに目をやる、茶の底では茶漉しを抜けた葉が僅かに沈殿し

て溜まっていた。そうだ、私はこうだった。

「水は低きに流れ萃まり溜まり、流れぬ水はやがて腐るのみ。私は一年前まで泥水の中で沈殿していた。それに気付いたから私は道を行くことにしたの、それ自体の何がおかしいのよ。地と共に寝、風と共に歩み、緑を見つめ、天の下を此処まで来た。“ただそう在ってきただけ”」

「そう……難儀なのね」

ただの一言。それは端的で的確だった。

「あとはここに姉が居ないかなって期待もしてるかな」

「へぇ、姉なんか居たの？」

「ここは幽霊とか居るんでしょう。小さい頃にね……」

私の言葉に間をおいて霊夢は茶を啜る。

これは不幸を、荷を負って欲しくて云っている訳じゃあない、その悲劇を分かち合いたいわけじゃあない。タイミングは悪かっただろうが、だからこそ無闇に放ったのだ。彼女はそれくらいわかる人間だと私にもわかる。

だがやはり“間”が必要なのだ。それを理解する私にとって、卑しくも心地の良い間が。

「姉探し。それが本音？」

「違うわよ。逢えたらいいなってくらいだもの」

「そういう奴ほどいざ出逢ったときに慌てるものよね」

「いいじゃない、その方がきっといいわ」

「……やっぱり難儀ね」

「まったくよ。本当、綺麗な夕日だこと……」

博麗大結界の話は知っている。結界の練習をしながら大結界一枚に少しだけ迷っていた。そんなことに迷う必要もないというのだから、難儀なのだ。

羊羹を齧ると甘さが少ししつこく思えたので茶をすすって甘さを

濁してやった。
「さて、そろそろ里にもどるわ。明日も来るからよろしく」
「明日も来るなら今夜は宴会よ。ついでに呑んでいけばいいんじゃない、気がついたころには朝になるわ」
「宴会？」
「地下の奴らがやってきたからって鬼が張り切ってるのよ」
両人差し指を頭の上にかざして鬼の角のポーズをする。やはりここには鬼もいるのか。
「それなら、なおさら遠慮しとくわ」
「意外ね。てっきり便乗して飲みたいって云うかと思ってたけど」
「私……お酒は苦手なのよ」

そのときの霊夢の顔は忘れられないだろう。
無頓着で無関心な巫女の顔が“信じられない”と云った具合に眼を見開いたのだから。
もちろん次の瞬間には笑われた。お酒も飲めないで幻想郷でやっていけるなら、へそで熱燗ができる。などとまで云われた。
なにもああまで云わなくてもいいだろう。お酒なんか今までちょくちょく味見をしてきたがいずれもコップ一杯あれば顔が真っ赤になる。甘酒程度なら飲めるのだが。
ビールは苦いし、果実酒を飲むくらいならジュースの方が美味しい。日本酒がましだけどそれでも私の体がアルコールに弱い。
いや、そもそもだ。あんな少女が宴会だなんて、ここに飲酒禁止法というものは無い――。
呆れと冗談半分の批判が冗談になっていないことに気付いて、私は心の口を噤んだ。

……恐らく本当に無いのだ。

それから数日、私は博麗神社に通い詰めて弾幕の避け方と結界の扱いだけをひたすらに反復した。

視野が狭い。だから視界に入ってくる弾が不意になる。
自分の周囲だけじゃあない、全体の弾幕の流れを見ればいい。
そこに法則性があるのなら、見出せれば楽になる。
気合いだけで避けれないものもある。
世の中の勝負には仕方というものがある。弾幕ごっこで云うのなら避け方というものがある。
勝負のルールに違いはあれども、その感覚に違いはない。

ただ、我武者羅に霊夢と勝負して負けて、ひたすら結界を作った。

それは鍛錬を初めて何日目かの帰り道。いつものように魔法の森を通り、ちょっかいを掛けてきた妖精をとっちめた所だった。
私の眼が森の中に浮かぶ不自然なものを捉える。闇？　黒い闇の塊がふよふよと森の中を漂っていた。
あの子だ。あの妖怪だ。そう思ったら躊躇いもなしに私は声を掛けていた。
「おーい」
駆け寄ると私の声に気がついたのか中できょろきょろと周囲を確認しているが闇は纏ったまま。全然見えていない様子だ。
「暗くしたまんまできょろきょろしても見えないんでしょう」
「ああ、そういえばそうよね」
言葉と同時に闇が裂ける。白と黒の服、ブロンドの髪に御札のリボンを付けた少女の姿が現れる。
「あれ？　またアンタ、何の用事よ」
「リベンジよリベンジ。恨みがあるわけじゃないけど私なりのケジメってやつね」
リベンジの言葉に何を思ったのか少女はその場で笑い始めてしまった。
「何で笑うのよ。再戦の申し込みは積極的に受けるものじゃないの？」
「だって、あんた弱いもん。どうせ私の勝ちに決まってるわ」
「甘い甘い。あれから特訓したのよ。弾幕ごっこもお手の物なんだから」
云って私は懐からスキルカードを取り出す。
「魅せてあげるわ“三点結界”」
“三点結界”

宣言の後、虎の子のナイフを片手、御札をもう片手に取り出し準備完了。
「そんなに云うなら、魅せて頂戴。三点の結界とやら」
私の勇ましさに満足したのか、笑いを笑みに変えた少女が両の手を大きく広げた。

月符「ムーンライトレイ」

スペル宣言と同時に二本の光の筋。レーザーだろうか、少女を中心として私の左右に伸びる。
私の左右から迫ったそれは角度を変えて私を追い込み静止。丁度、切り分けられたショートケーキの苺の位置に私は立っていた。
そのまま少女から円状に弾幕が放たれる。隙間だらけ、私狙いの奇数の弾だ。
一つ一つ確実に避けていけばいい。落ち着いて右へ左へと確実に隙間に入り込んでゆく。
リズムを守って二十秒ほど経っただろうか、逃げ続けていると時間切れのスペルブレイクと共に弾幕が消滅した。
「よし、どんなもんよ！」
「むぅー！」
間髪入れずに少女は二枚目の宣言。

夜符「ナイトバード」

覚えがあった。前回見たスペルカードだ。
やはり、鞭を振るうような左右の軌跡が弾幕になる。二色のそれが折り重なっていく。
その視界を埋める数は多いが目くらましだ。相手を狙った奇数弾、

さっきのスペルとそうも変わりない。
だが少女は一射ごとに左右へと違う射点からそれを撃ちだしてくる。
角度が変わり自然と弾幕が絡み合う。安定が不安定になる。
とっさの事態に追い詰められそうだが事前に三点結界を展開して弾幕に穴を開けて私は瞬きなおす。
リズムを崩しても、点ではなく面を見る。迫る弾を見るのではない、重なる波の満ち引きを見れば自ずと“避ける場所”が見えてくる。
そう意識するだけで同じ弾幕もずいぶんと印象が変わる。なんだ、私はこんなものも見えなかったのか、と。
そして弾幕の先で少女の顔が膨れっ面になっているのが見えた。無理もない、こんな逃げっぱなしの戦法をされたら私だってあんな顔になるだろうし、正直性分にも合わない。
「さっきから逃げてばっかり。ちょっとくらい攻撃してきなさいよ」
「ご心配なく、これから攻めるところよ」
「そうなのかー」
ああ、逃げ切るつもりだったが流れでつい云ってしまった。まぁ、云ってしまったのだし無策というわけでもなし。やってみるかと意気込んで両手に札を取り出す。
周囲に三点結界をばら撒いて。少女から完全に目隠しする。
相手に見えない内にそばにあった木を足がかりに蹴上がる。三角とびの要領で飛び上がると私は三点結界の上から打ち下ろすように少女へとナイフを投げた。
「当たらないよー」
相手が身構え警戒していたからか、ナイフは当然のように避けられて少女の足元に突き刺さる。だがその一挙一動で隙が出来る。すかさず自分の足元に三点結界を展開、足場代わりに私はさらに蹴上がった。
右手に“封魔陣”の札を据えて。少女の懐へと飛び込んでゆく。

「やっぱり近づくんだ」
少女と視線が交差した。私に注意を向けている、警戒されていた。
迎撃される？　そう思った瞬間、細い光の筋が私の身体を射した。
「！？」
刹那。防御するために御札を準備した掌を突き出し結界をその場で発動させた。

夢符「封魔陣」

次の瞬間、光の筋を導線として連続で発せられたレーザーの束。ギリギリのタイミングで展開された結界がそれを弾き飛ばす。
「危ないわねぇ！」
封魔陣の効果が消える直前に結界を蹴って後ろに飛ぶ。クルリと空中で回って四肢で着地した。
「痛ったぁ……」
痛みが落ちるものでもないがプラプラと右手を振ってやる、結界を展開した手が耐えられずに痺れていた。あんまり無茶はするものじゃないな。
「前も札を貼り付けようとしたよね。そんなモノがそうそう当たるわけないわ」
「――よかった」
「よかった？」
不敵に笑う私の顔を疑いもせずに少女は素直に小首を傾げる。
「よかったのよ。貴方は私の技を覚えててくれた。お札を貼り付ける。私が一挙一動何をやっているのかに注意してくれた。もし気付いていたら、その隙に貼り付けて接発してたけど、仕掛けが無駄にならなくて良かったわ」
私はちょいちょいと指で私の足元を指す。少女はそれが何を意味するのか分からなかったようだが、次の瞬間には自分の足元に目をやった。

「あれ？」
ようやく気付いた。少女の足元に刺さったナイフ。そのナイフの刃が結界の札を貫いていたことに。それは“警醒陣”の札じゃない、最初にもらった巫女の札。
幼稚なトリックだ三点結界の裏でナイフの刃にお札を仕込んだだけ。
「灯台下暗し。だからタネに気付かなかった。手品の基本よ」
パチンと指を鳴らす。同時に札から博麗の力が茜色に染まり、地面を八角に包み込みそして顕現する。

神技「八方鬼縛陣」

仕掛けとしてはナイフの方が本命だった。だからとっておきを仕込んでやったのだ。
「どんなもんよ。これは効いたでしょ」
結界の中がどうなったのか私にはよく見えなかったが、結界越しに見える少女の影が傾いて倒れた。
「勝ち？　私の勝ちよね！」
確かめるように自分に問い掛け云い聞かせる。歓喜に自然と声が大きくなる。
「いやぁ、これで里の皆さんに大手を振って報告できるってもんよね」
満足をした私はそのまま踵を返してその場を立ち去ろうとした……が。

闇符「ディマーケイション」

スペルカード宣言。その宣言の意味すること、緩やかに私の歩きが止まる。
「えーっと？」

振り返ると、少し焦げた装いで少女が笑っていた、それが口だけで目が笑っていないもんだから、私も乾いた笑いしかでなかった。
「三枚目、最後のスペルカードだよ」
「私、ネタ切れなんですけど……」
「ダーメ」

日は落ちた。月明かりが照らすだけの夜道、帰路として私は人里へと辿り着く。
「……」
肩を落としながら歩いていると、里の入り口で提灯を提げた慧音さんと出くわした。
「あれ、慧音さん。何してるんです」
「何といわれても見たまま、夜回りだよ。しかしまたその格好……最近は鍛錬をしていると云ってはいたが、盛大に負けたのだな」
先生は汚れに塗れた私の姿に苦笑をする。服の裾を摘んで持ち上げてみるとずいぶんと汚れていてボロボロだった。改めて肩を落としてため息を吐き出す。
「ボロ負けですよ。ああ！　いや、でもギャフンと云わせたのは本当で……“勝負に勝って試合に負けた”とか云っちゃだめかな？」
「負けは負けと思うが？」
「そうですよね。いや、どうにか次こそは勝ちます」

「次か……またあの妖怪に挑むのならもう十分だよ。次に何か妖怪退治の仕事が起きたときに頑張ればいい。自警団の人にも“道行詠”の名で言付けておこう」
それが嫌だったのに。ここの人達は人情に溢れすぎる、私が仕事が無いと泣きつけば助けてくれるのだろう。
その厚意に甘えたくなかった。そんなものに期待する自分が許せないのだから。
「でも……それだと私」
「負けたんだろう。意地を張るより里のためになる事がある」
「はい……」
素直に私は認める、今回は私の負けだ。負けは負け。
でもやっぱり……悔しかった。

翌日、私はまたしても博麗神社で特訓を続けていた。負けたからといって諦める訳にもいかないのだ。
「結局、負けたんでしょう？　筋金入りの負けず嫌いね」
境内の掃除を終えた霊夢が竹箒を片手に縁側に座っていた。尻目に私はスキルではないスペルカードの練習を延々と続ける。
「挽回しなきゃいけないのよ。負けたんだから次は勝つのよ。だから新しい技の練習もしている」
私の意気込みに何を思うのか、霊夢は呆れた声で答えてくれる。
「そんなだから勝てないのよ。、名誉返上にならないように頑張ればいいじゃない、汚名挽回じゃあないんだから」
「どっちかなんて私には判らないわよ。だから、そんなもの分かってもやることも変わらないんだし」
結局、何だかんだと言葉を並べてもやるのだから、私にとってはどちらでもいいのだ。

「でも……アンタ行かなくていいの？」
「行くって？　何処へよ」
「吸血鬼の所よ。知り合いが居るから会いに行くとか云ってなかった？」
霊夢の指摘にそういえばと本来の目的を思い出す。
「……忘れてた」
ああ、そうだ。
本当なら紅魔館に行く前に宿を探すのだった、だからこそ宿探しに躍起になったのだが気がつけばこんなことをしている。
迷走にもほどがある、
一年前に美鈴に姉の事を探してくれと頼んだのだ。その結果も訊かねばならない。

そのためにも“紅魔館”に行かなきゃ。

五話　銀の刃よ、手を取り本を裂くならば（前書き）

あらすじ

弾幕ごっこに負けてしまった私は弾幕ごっこの修行のために博麗神社へ

霊夢の結界“警醒陣”を模倣して、自前のスキル“三点結界”を扱えるようになった。

立派なのは名前だけと云うのは置いておいて、これはこれで便利なので私は気に入っていたりする。

だが、肝心の本番では成果は出ても結果は出ず私の負け、しぶしぶながらに里の厚意に甘えることになってしまった。

そして忘れていた肝心なこと。宿を探したり弾幕ごっこしたりとふらふらしていたが私にも目的くらいはあった。

紅魔館である。

五話　銀の刃よ、手を取り本を裂くならば

私は走っていた。

地を蹴り、前へ前へとただ真っ直ぐに、視線の先に見える紅い館に向かって、私は一心不乱に走っていた。

脇目を振ると“霧の湖”と呼ばれる湖が目に入る、大きな湖だとは思うが、昼間だというのに霧に隠れてその全容は見えない。

視線を前へと向きなおす、瞳で“紅魔館”と思しきそれを見つめた。あそこに辿り着かなくては。

リズムを取るように吸って吐く。その息が真っ白のもやになって風に流れた。

吸う息だけが異常な冷気を帯びている。冬のマラソンどころじゃない、肺が凍ってしまいそうだった。

その瞬間。耳に風とソレを切る音を感じた、顔の横を塊が通り過ぎて、それが湖に落ちて盛大な飛沫と波紋を立たせた。

サッカーボール大はありそうな氷の塊が水面に浮かぶ。あと数センチでアレが脳天直撃していたと思うと流石に血の気が引いた。

「あ、あのね！」

逃げる足はそのままに振り返って、私は“彼女”に呼びかけた。

「私はね、用事があるから。アンタなんかと遊んでる暇ないのよ！」

先ほどから私が走っているのにはきちんと理由がある。

振り返った先、私の後方には羽を生やした少女が飛んでいた。

体の大きさは妖精と同じくらいだろうか、白のシャツに青色ロングのワンピース、水色のショート髪にリボンを結んでいる。

妖精なのだろうか？　他の妖精とは違う生物的な羽ではなく氷で創ったような綺麗で異質な羽が背中で羽ばたいていた。

「何で私なのよ、私じゃなくてもいいでしょう！？」
「冬眠しててカエルが少ないの。だからアンタが代わり」
「だからって人間凍らせる！？　馬鹿なのアンタ！　馬っ鹿じゃないの！　またはアホなの！？」
「バカと云うほうがバカじゃないのさ」
氷付けなんて原始人みたいなことになってたまるものか。
足止めにやたら滅多らに三点結界をばら撒いて目隠しと威嚇を試みるが、少女はその隙間を器用に縫って追いすがってくる。

妖精みたいな子供っぽい性格だが実力がある。弾幕ごっこにも慣れていて物怖じしない。
私が形容するのなら“手に負えない悪餓鬼”だ。
「ああ、もう付いて来ないでよ！」
視線を前に戻すと館の門がはっきりと見える距離だった。その門の正面に人影が見えた。
「居た！」
このまま走って逃げてこの妖精を振り切れるとは思っていない。不本意だが私の中で美鈴に助けを請うてこの妖精を追っ払ってもらう算段だった。
もう少し、もう少しだ。門前に立つ人影がはっきりとしたものになっていくのと同時に懐かしさがこみ上げてくる。
間違いない紅　美鈴だ、紅魔館の門番。一年ぶりに見た彼女は相変わらずの緑を基調としたチャイナ服に帽子を被っていた。
「た、助……」
助けを請いたいがもう息が切れて声がでない。息を整えたいが声を出すより足を動かさなくてはならなかった。
そのとき、美鈴の視線が此方に向いた。視線が交差する、私に気付いてくれた。安堵しながら大きく手を振る私に拳を構えて彼女は叫んだ。
「二人がかりなら抜けられるとでも思ったか！」

「……はぁ！？」
美鈴は姿に気付いただけで肝心なところを気付いていなかった。
私は侵入者と思われて後ろの妖精とセットで数えられている。
美鈴の下げた右足が地を磨り潰し、全身をバネとして弾丸のように前へ、私へと水平に跳ね飛ぶ。
「ちょ、ちょっと美鈴ま――っ」
とりあえず話をと思ったが時既に遅く、口を開いた私の身体は美鈴の射程内にあった。

がくんと脳が揺れる衝撃。顎だった。

それはそれは綺麗に顎を掌底で打ち抜かれていた。
頭を軸に、走り抜ける勢いのまま逆上がりをするように視界が回る。受身も取れずに背中から地面に叩きつけられた。
そして、その痛みを痛感する前に私の意識は途絶えていた。

約一年程前、去年のことになる。
私が紅　美鈴と名乗る妖怪に出会ったのは年の暮れだった。
まだ、私が学校に通っていたとき。早朝、有様の大きく変わった学校の門前、真冬に緑のチャイナ服に身を包んで彼女は立っていた。
私は彼女を用務員さんかと勘違い。美鈴は私を侵入者と勘違い。
そして事情を察した私達は幻想郷への帰り方を模索したのだった、といっても私は好奇心のままに美鈴を連れ回したようなものだった

が。
そして当の事件はすぐに解決したのだが、幻想郷に帰る美鈴に私は一つの頼みごとをしたのだった。
“そういえば幻想郷には冥界があるんだっけ？”
“もしも姉が居たらよろしく伝えておいてくれないかな”
美鈴とはそれっきり、そもそも私の方から幻想郷に来ることがあるなんて夢にも思っていなかった。
姉はこの幻想郷にいるのだろうか。もしも美鈴が姉を見つけてくれていたのなら……。

私の姉が死んだのは私がまだ幼い時だった。
手品も、ここに来てから得意にやっているナイフ投げも死んだ姉の真似事。それは無意識に無いものねだりをする私の虚しいままごとなのかもしれない。
でも、幻想郷……こんな非常識な世界に内心は期待をしていた。
もしかしたら、と。
それが間違っているのだとも。わかってる。
でも……

“銀の刃よ、手を取り本を裂くならば”

背中に重力を感じる。朦朧とした意識のまま身体が柔らかいものに包まれていて心地よさだけを感じていた。

私は寝ているのだろうか、身体を転がして瞼を開けるとアンティークなサイドテーブルが視界に入った。

「なんだか、つい最近も気絶した気がするけど……」

またか、というのが素直な感想で。己の不甲斐無さにツッコミを入れつつ上半身を起して周囲を見渡す。

私はベッドに寝かされていた、そしてここはどうやら西洋風の一室のようだ。視線を配せていると独特の品のあるそのセンスにわずかな恐怖を覚える。

それはクリーム色など温系の色合いではなく。紅色の室内に対して少ない窓から差し込むわずかな光が陰影を際立たせる。深い、紅黒いといった印象の色彩だった。調度品の品格にもどこか刺が見え隠れする。

ここは一体どこなのか？

思索するまでもない。幻想郷の中でこんな西洋風な場所はそうないだろう。“紅魔館の中”その答えが妥当だ、それ以外に覚えがない。

もしかしたら、ここは幻想郷では無く本当の現実世界、私は長い夢から覚めただけの館のお嬢様だったら在り得るのかもしれない。なんて、思考を冗談に回してる場合じゃないか。

少なくとも、館のお嬢様と私の趣味は合いそうにないなと思う。もし私がお譲様ならもっと窓を増やして紅色をもっと緩めるだろう。こんな館で暮したら紅くて暗くて目がおかしくなってしまう。

「誰かいないのかな……？」

とりあえず、ベッドから降りてみる。周囲に人の気配は無い、静寂だけが部屋の中を支配している。

その時、身体を包むごわごわとした感触に違和感を覚えた。

服がおかしいのだ。確かめてみると私がいつもの天狗服とは違う服、青と白色のエプロンドレスに着替えさせられていることに気がついた。

「メイドさんの服？」

言葉の通りエプロンドレスというよりはメイド服。実務的というよりはデザイン重視のそれだ。

「メイドの雇用に受かった覚えなんかないんだけどなぁ……」

ベッド横のサイドテーブル。その上に水筒とナイフに御札、一通りの荷物が鎮座していた。ああ、ちなみにロシナンテは例の借家で留守番して貰っている。

荷物を懐に、忘れ物がないことを確認して私は部屋から廊下に出る。相変わらず暗くて紅い、趣味が悪い。

暗くて先が見えないが、延々どころか永遠続いているのかとも思えるくらいに廊下が長い。

とりあえずは“何か”を探そう。

何かと云ってもアテがないわけでもない。

出口を見つけて美鈴に会うという選択肢が一つ。

人を見つけるのも手だ、介抱してもらったのなら礼を云わねばならない。いや、ここの門番にやられたのなら私は被害者だから文句くらい云ってやろうか……。

まぁ、それもこれも屋敷の主の人柄次第。気に喰わなかったら文句を云ってやるとしよう。

扉を開くとかび臭く、ひやりと肌を撫でる冷たさがあった。地下室なのだろうか、沈殿した空気がまるで空き家に入ったような錯覚をくれた。
光は射してこない。だが、天井から吊るされた灯りがここは空き家ではないことを教えてくれる。
「一階に行きたかったんだけど、降りすぎたかな」
部屋に入ると本、本、本。本の山。
本棚を埋め尽くす本の羅列。その本棚が部屋中を埋め尽くしている。大図書館と云っても差し支えないだろう、そこは私が今まで見てきたどの図書館よりも広大な本の山だった。
これだけあれば、本棚を利用して難攻不落の巨大迷路でもつくれそうだ。
私は何となく適当に本棚から一冊引き抜く。薄埃を被り古びていかにも年代物といったそのハードカバーを開いてみる。
手書きだろうか、インクの滲みと漂白のされてない洋紙が雰囲気作りに一役買っている。肝心の内容は……少なくとも私には読めない。日本語でも英語でもない、見たこともない複雑怪奇な文字に所々に幾何学模様の魔法陣や何を示しているのかよく解らない奇妙な図が記されている。これがファンタジーで云うところのグリモワールという奴だろうか。
パタンと本を閉じてもとあった棚に戻しておく。とひょっとしたらここは魔女の棲家なのかもしれない、とんがり帽子を被った黒尽くめの御婆さんを勝手にイメージしながら私は図書館探検をしてみることにした。
静寂の中を私の足音だけが歩いてゆく。しばらく歩いているとその足音に誰かの咳が割り入った。反響で近いのか遠いのか分からないがこの図書館には誰かが居るらしい。
「喘息持ちの魔女でも居たりして」

その時、一陣の風が私に吹きかかった。
何だろうかと顔をしかめると、風に乗った少女がふわりと私の眼前に立ちふさがっていた。
「そこのメイド。歩くなら音を立てないように歩いて頂戴、ついでに埃も」
薄桃色のワンピースにロングカーディガン、それと帽子。その帽子に月形のアクセサリーがあるのを見て、星型のアクセサリーの付いていた美鈴を思い出してしまう。
髪は紫のロングヘア。二つに分けたその横髪をピンクと水色のリボンで留めている。それは可愛らしいという印象だがずいぶんと部屋着らしい楽そうな服装だなというのが同性としての感想だった。
そして、不機嫌なのか眠そうなのか、血の気があるとはとてもいえない顔に覇気のない目付きが私を見据えた。
「メイド……の格好だけど違うみたいね」
「出たわね吸血鬼！　さっそくこの十字架で……って云いたいところだけど忘れてきたわ」
「吸血鬼なら銀か雨。嘘つきは炒った豆を蒔くほうがいいわね。ちなみに私は吸血鬼じゃあない」
「あら、そうなの。日の光に弱そうだったからつい」
「けれども十字架。最近のレミィならノったかもしれないわ」
「レミィってのがお嬢様？　吸血鬼って聞いたけどノリがいいのね」
“ぎゃおー！たーべちゃうぞー！”と云って鴉天狗を食べたわ」
「むむ、まるで、モケーレムベンベね……」
「貴方は何に似ているのかしらね」
「私は私よ。道行　詠」
「メイドの服を着た侵入者の退治の仕方は……」
「載ってたら驚きね……」
挨拶もそこそこに弾幕ごっこをはじめようとする私達。
正直、勝てるなんて思っちゃいないがこの本棚の密度だ。隠れ逃げ回るに不自由はないだろう。

その、いざと云う時だった。
「ああ、こんなところにいた」
横から第三者の声が掛かった。
声に目を向けるとひとりの女性が本棚の間から歩み出てきた。
「メイド？」
女性は白銀のショート髪。三つ編にした横髪を緑のリボンで結んでいた。ちなみに当然のようにヘッドドレスも付属している。
彼女の身に着けていたメイド服がどこかで見たことがあると思えば、それは私の着せられているメイド服とまったく同一のものだった。
「この服は貴方が着せてくれたのね」
メイドにスカートの裾を摘んで見せ付ける、その裾を持ち上げられるほどの余裕も無いくらいスカートが短い。
「びしょ濡れのままベッドに寝かせたら、シーツが濡れちゃうもの」
「頭悪そうな妖精に氷漬けにされるところだったのよ……」
「氷付けになっていてくれたらベッドに寝かせる必要もなかったのに」
「あーもう、なんでこうも物騒かな……」
「殺生な話じゃないだけましよ。さぁ、お嬢様が呼んでいるから一緒に来てもらうわよ」
「お嬢様？」
「レミリアお嬢様よ」
さっきの少女はレミィと呼んでいたが愛称のようなものだろう、お嬢様はレミリアというのが本名のようだ。
とりあえず、おとなしくメイドに付いていくべきか否か。私が悩もうとしたところで少女が割って入ってくる。
「ふん。咲夜、邪魔をしないで。その人間は私が追っ払うのだから」
「パチュリー様。それは困ります、私もお嬢様の命令ですので」
「鼠退治の前に猫根性の躾ね」
相対した少女とメイドは風を巻き上げて本棚の上へと昇っていっ

た。もちろん私はそれを見上げるだけ、当人の私は置き去りにして二人は弾幕ごっこを始める様子だ。
「こういうときは“やめて、私のために二人が争わないで！”とか云うべきなのかな……」
冗談はさておき、こういうのはどうにも居心地が悪い。
とりあえず、どうするかと思索するよりも先に本棚を蹴上がり、三点結界を足場に上へと飛び上がる。クルリと身を翻して私は本棚の天板に着地した。
「加勢するわよ」
私の加勢をどう思ったのか少女とメイドは互いに顔を合わせた。
「どっちに。私、それとも咲夜？」
「正直どちらでもいいんだけど、待遇はこっちの方が良さそうだからね」
云うと私はメイドの横に立ち少女と相対する形になる。
「二対一、構わないわよ。咲夜は？」
「構いません。前にも経験がありますので」
了承を貰って私はナイフを取り出す。相方のメイドは何を取り出すのかと目をやるとメイドの手にもナイフが握られていた。
そしてメイドの視線はナイフを持つ私の手に注がれている。
「「ん……？」」
互いの視線が互いの手を見つめていた。
そして互いに切るためよりも、それが投げるためのナイフだと一目で分かっていた。

「「貴方もナイフを投げるのね……」」

まったく同じタイミングで同じ言葉が出た、それはそれはメイドと私の声が重なって滑稽なものだった。
「ナイフを投げるメイドは二人も要らない、両手にティーカップを持ったら本がもてないでしょう」

メイドでナイフ、私達の御揃いを皮肉る少女の手には既にスペルカードがあった。

火符「アグニレイディアンス」

宣言と同時に私達は本棚を蹴って距離を取った。私はまた適当な本棚の上に着地、メイドはなぜか宙に浮かんでいる。そういえば、少女も闇を使う妖怪少女も理屈は分からないが空を飛んでいた。やはり飛べないと不利なモノなのだろうか。

少女から発せられた紅い光を帯びた紅輪と火球。無数のそれらが三種の動きを持って弾幕になる。

サイズの大きな紅輪は疎らに散って襲い掛かるが避けようとも思わずとも隙間の方が大きい。残りの火球は少女を中心に二つの渦を巻く。互いに逆の渦を巻き、流れを造る火球が混ぜ広がってゆく。

そして二つの渦は少女から一定距離で収束、少女を中心に互い違いに廻る火球の波が重なり大きな輪を造り上げた。

炎が輪舞曲を踊り狂う、流れ揺らめく業火のその最中、少女を迎えて。その美しい超常現象は正に壮観と云えるだろう。

スペルカード。まるで楽譜だ、その冠する銘を体現すること、嗜好という美しさがそこある。改めて噛み締める。そのあまりに非現実的で幻想的な光景に私は素直に見惚れてしまいそうだった。

だが、見惚れる間がある筈も無い。

一拍を置いて留まりを解いた火球の波が二つに別れて襲い掛かってきた。

「むっ……」

熱い。

火球の波を前に空気を歪める熱気が空気の壁として私を包み込み、最中で息苦しさを覚える。それはもう空気を肺に入れるのが辛い位だ。

左右から来るその火球の雨を紙一重で避けていく。大丈夫だ、見

た目ほど難しいスペルじゃあない。もう弾幕の出口までのルートも見えたときだった。
第二波。同様の弾幕が少女から放たれた。
サイクルが早い。減速して低速で流れる初発の紅輪が、まだ私の周囲を漂っている。火球を抜け切ってもいない。それらが私の動きを制約する。
何を気を抜いていたんだ。弾幕のサイクルが重なりその脅威が真価を見せる。眼が追いついても波状攻撃に頭の中での弾幕の処理がつかない。
だからと諦めてなるものかと、意地で挑むが縛れた足取りでそう持つはずも無かった。
あっという間に私は詰みの状況。眼前に燃え盛る火球が束になって迫ってくる。
無理だと分かっていたが、直撃に一瞬ほど遅く封魔陣の札を取り出そうと懐に手を入れた。

「やば――――

「咲夜の世界」

その瞬間。

いや、瞬間も何も無い。何かはよくわからないが世界から重要なものがぽっかりと抜け落ちたのだ。

異常な現象？　幻象かもしれない。その“時”が、ただ凡てが静止していた。

瞬きすら出来なかった、瞬きする時間が許されていなかった。

身体が動かない、息すら吐けない。此れは何だと喉を震わすことも出来なかった。

私の眼前で静止する焔はまるで硝子細工か飴細工のように活き活きとした炎の形を留めている。

私の見ている光景が、この世界が丸ごと写真なんじゃないかと疑いたかった。

呆気に取られていると。後ろから襟首が掴まれて私の身体は弾幕の薄い方へと放り投げられた。

その時に目の端に青いメイドのスカートが眼に映る。

それで、察しが付いた。この幻象はあのメイドの仕業だ。彼女がきっと何か――

その瞬間、ズキンと刺すような頭痛がした。

――――いっ！」

唐突に時間が融解して流れ始める。

静止の前に吐いていた息が声となって吐き出された。

懐に突っ込んだ手のまま本棚の天板に放り出されたもんだから慌てて片手で受身を取る。ついでに異様に頭が痛かった、まるで私の頭がさっきの異常事態を拒絶しているかのように思えてならない。

「世話の焼ける子ね」

「むぅ……悪かったわね！」

そうこうしている間に少女のスペルがブレイクして火球と紅輪が消え去ってくれた。

「見てなさいよ！」

少女が次のカードを取り出した所で私は即座に仕込んだナイフを投げつけてやった。

狙い通り。投げつけたナイフは少女の手にあったカードを射抜きそのまま本棚の横板に突き刺さる。

「なっ！？」

少女がそれを私が宣言潰しに投げたのだと思ってくれたら幸いだったのだが、運の無いことに少女の視線がナイフの先端を追っていた。

「札？」

まずい、気付かれた。

夢符「封魔陣」

投げる前にナイフに仕込んだ結界の札。本棚の横板から直角に結界が展開するが少女には平然と避けられてしまった。

「結界使い……能天気な紅白のものか」

「……御明察」

私の虎の子を見られて、紫少女の警戒心が増す。冷静になれ私、

子供だましの仕込みじゃあこのオチだ。
私が口をへの字に曲げると横にいるメイドの口からため息が漏れた。
「駄目じゃないの」
「駄目だったわ。ねぇ、さっきのあの変なので一気に近づけないの？」
「無理ね。パチュリー様は私の一息で扱える時間を知っているから充分な余裕と距離を取っているの」
「勝手知ったる仲って奴か……まぁ、仕込みがばれたら手品になっても驚きと歓声は得られないものね。仕方ない、私が虚を作るわ」
「あなたが？　はぁ……また世話焼かなきゃ」
「今度はへましないわよ！　さぁ刮目してよメイドさん、魅せてあげるわ。不肖、道行詠たる一芸を」
私が胸を張って笑顔を向けてやると僅かに逡巡したメイドさんは観念したように首を縦に振った。
「……分かったわ。で、それは今すぐできるの？」
「十秒。それだけでいいわ“時間”を稼いで。あの紫もやしをびっくりさせてやるわ」
「私に“時間を稼げ”だなんて」
「時間稼ぎは不得意？」
「逆ね。それこそ、時間を止めてでも時間稼ぎができるもの」
今度はメイドが私に笑いかけた。それは自信に溢れていながら控えめな笑みだった。
「そこの人間。弾幕ごっこは不慣れなのでしょう、諦めるのが賢明よ」
「諦めるだなんて。ご冗談！」
「往生際が悪い鼠」
少女の突き出した本から巨大な炎弾が飛び出して襲い掛かる。
即座にその場から散って回避。メイドとは反対の方向へ私は本棚の上を飛び回って避ける。

私に追撃を加えようとする少女、その眼前を紙一重の距離でナイフが通り過ぎて威嚇をした。
「パチュリー様」
“スクエアリコシェ”
云いながらメイドは取り出したスキルカードの宣言をする。
「些かのお時間を頂きます」
メイドが取り出したナイフを少女とはあさっての方向へと投げつける。
どんな意図があるのだろうか無作為に空中へと投げ込むナイフは奇妙なほどに遅く、水の中を流れるようにゆったりと空間を泳いでゆく。
そして投げたナイフが天井にぶつかった瞬間、それは起こった。
ナイフは刺さるでもなく弾かれて落ちるでもなく、カツンと金属を打つ様な音と共に天井を“反射”して向きを変えたのだ。
結果、無造作に投げ込まれた複数のナイフ達が天井や本棚に次々と反射をして少女を追い詰めプレッシャーを与えてゆく。
「何の相談をしたかは知らないけれど、あの人間のために時間を稼ぐの？」
「未熟で荒々しい。しかし、筋が通ってその筋も悪くない。何故でしょうか、ああいうのは不思議と信頼に足るものです」
「本の読みすぎ」
「パチュリー様ほどではありません」
“サマーフレイム”
「薙ぎ払え……」
スキル宣言。少女の言葉と共に、突き出す白く細い指先から火炎放射器のように火炎が噴出す。

ばら撒く様に放射される焔が大蛇の様にナイフを飲み込み空間を制圧してゆく。
圧され気味の状況にメイドの表情に焦りが浮かぶが心配は要らない。
丁度、準備を終えた私の声が図書館に響き渡った。
「そこの魔法使いさん、ちょっと借りたわよ！」

「借りた？」
声に向けられた少女の視線が私を捉えて見開いた。
「本！」
気付いてももう遅い。私の腕は振りかぶりソレを投擲した。
これでもかと。思い切り、ナイフの代わりにハードカバーの本を少女へと投げつけてやったのだ。
「乱暴なことして！」
飛来する本に紫少女が手をかざすと風に圧された本がクッションにぶつかったように減速してそのまま空中で静止。
そのまま緩やかな軌道と動きで少女の手に収まった。やはり本が大事らしい。
「無駄よ。こんなもの投げて当たると思――」
充分に引き付けた、得意げに私はパチンと指を鳴らした。
「開け護摩」
その瞬間、懐に仕舞われようとしていた本が弾けるようにしてそのページを捲り広げた。そして開いた頁の隙間から無数のお札が飛び出す。

“三点結界”

四方八方に飛び散った札が三枚づつの組みとなり結界を展開。少女の周囲を覆い尽くす。

「これも結界！？」
不意は突かれても場馴れしていた少女は即座の判断でトラップに使った本を放り出す。そして、その指先を突き上げると一気に八方へと火炎弾が散りすべての結界を消し飛ばした。
呆気もなく私の結界は全部吹き飛ばされてしまった、周囲に残った爆煙の中で少女がため息をつく。
「こけおどし」
「いやいや、目暗まし」
私の煙に巻いたような言葉を訝しげな顔で受け止める少女。そんな私には既に先ほどと同じ頭痛が起こっていた。
「パチュリー様」
「！？」
後ろから掛かった声に不意を突かれて少女が振り返るとその鼻頭が何かにぶつかる。
「むっ……！」
顔を押しつぶしたそれを手で払うと、ハードカバーの本を手に持ったメイドが少女の後ろに立ち、少女に笑顔を向けていた。
「被弾ですね。申し訳ありませんが、お約束通りそこの人間は預からせて頂きますわ」
三点結界を展開して視界が塞がれた瞬間。メイドはあの妙な幻象を使って裏に回り込み接近。ナイフを使わずわざわざ私がトラップに使った本を回収するとは律儀なメイドさんだ。
しかし、渡す本を相手の顔にぶつけたのは皮肉なのか、それとも天然なのだろうか……。
「わかったわよ。但し、そこの詠とか云うのは図書館に入れないで頂戴。今度読書を邪魔をしたら、えらい目に遭わせてやるんだから」
少女はつまらなそうな顔で私を一瞥してメイドから本を受け取った。

しかし、メイドの起こすあの幻象は何なのだろうか。“時間の停止”という形容がしっくり来るが……そんなモノがあるものかと私の常識は否定する。
だがメイドはそれらしいことを云っていた、この幻想郷では人智の外のそれが多すぎるのもまた事実だから私は素直に鼻で笑えなかった。

図書館を後に、私はお嬢様に会うためメイドと共にやたらに長くてやたらに紅い廊下を歩いていた。

「そういえば、アナタは何で屋敷にやってきたのかしら？　用事でもない限りは此処にそう人間は近づかないと思うけど」
「知り合いに挨拶しにきたのよ。美鈴ってここの門番なんでしょう」
「そうだけれど、門番と知り合いだなんてね」
「彼女の休暇旅行でガイドさんをやったの。ああ、それと。姉を探してるのよ、冥界に居るかも知れないから。そういえばアナタはナイフ投げ得意なんでしょう、知らない？」
わずかに顎に手を当ててから、なんでもない風に答えてくれた。
「さあ……知らないわ」
「……そう」
短く云って私はおとなしくメイドの横を歩き廊下を進んで行った。

六話　誰が為に祭りは踊る（前書き）

あらすじ

せっかく幻想郷に来たのだからと、私はその日、知り合いである美鈴に会うため紅魔館へと向かったのだ。
だが、肝心の美鈴に侵入者と勘違いされてキツイのを一発お見舞いされるわ、迷い込んだ大図書館では弾幕ごっこでひと騒動。散々な目に遭った。
騒動が終わってから、私は助けてもらったメイドさんに連れられて、紅魔館の主であるお嬢様に会いにいくことになった。

六話　誰が為に祭りは踊る

ティーカップがソーサーに置かれ、気品のある音が静寂を打った。
お嬢様に呼び出しをくらって、メイドに連れてこられた紅くて暗い一室。そこに足を踏み入れた私の眼前にはティーテーブルに腰掛ける小柄な少女があった。
薄ピンクのドレス、真紅のリボンに帽子、蒼紫のショート髪に幼い横顔。少女。お嬢様という形容が似合う年齢だ。その身体は小柄で床に届かない足を無為にプラプラとさせている。
そんな少女を前に私は生唾を飲み下していた。べつに凄まれたり威圧を受けたわけではない。ただ、年端もいかない少女の背中にはコウモリのような禍々しい羽が生やしてあったのだから。
吸血鬼。ただの一目でそれを納得させられ、僅かな畏怖が私の心にあった。
「貴方がレミリア・スカーレットね」
「……ええ、そうよ」
少女が私の声に視線を向ける、鋭く紅い眼光が私を見据えた。それに怖じずに私は言葉を返す。
「何で私を呼び出したの。しがない旅人に何か用事でもあったの？」
「別に用事なんかは無いよ」
首だけでなく身体で私のほうを向くとティーテーブルから立ち上がり少女は私の眼前まで歩み寄ってきた。
用事も無いのに呼んだ？　僅かに浮かんだ疑問だったが、少女の底の知れなさに私はそれを疑心に置き変える。
「と云うか……そもそも呼んだ覚えもないんだけれど。咲夜。こいつは何、新人メイドの研修でもしているの？」
「ちょっと、ちょっと。アンタがこのメイドに指示したんでしょう」

深読みをしようとした私の思慮は肩透かし。指摘に少女からは鳩が豆鉄砲食らったような顔が返ってくる。
「おかしいわね、暇だったから咲夜に“何か暇つぶしはないか”って云ったんだけれど」
「丁度良い人間を仕入れましたので、お持ち致しました」
私の後ろから当然といった声が聞こえた。元凶はこっちだった。
「人を勝手に仕入れ品にしないで、物騒どころか殺生な話じゃないのよ」
吸血鬼の暇つぶしの相手だなんて。血なんて吸われたらどうなるものか、言い伝えのとおり吸血鬼にでもなったら文字通りの一生日陰者だ。
私の思慮が顔に出たのだろうか、それをつまらなさそうに見てお嬢様が手を横に振った。
「あー心配要らないよ。別に取って喰ったりはしない。ここではそういうルールだから」
「それは……大変有難いルールね」
「でも折角なんだから暇つぶしには付き合って貰おうかな」
「暇つぶしって。何よ……や、やる気？」
弾幕ごっこかと思ってナイフと札を取り出すが、対するお嬢様は何か釈然としない顔をする。
「いや、そうじゃなくて。もっと、こう派手なのがいいわよね」
「派手？」
「規模よ規模」
「ドームで弾幕ごっこでもするの？」
「そういうのも悪くないけどここにドームはまだ無いのよね」
何がしたいのかサッパリ分からないけれども。妙案でも浮かんだのだろうかお嬢様はポンと手を打つ、その頭の上に光る電球でも見えそうだった。
「人間、貴方がもし迷子になっている人を見つけたらどうする？」
「迷子？　いきなりね」

脈絡もなく云われても困ってしまう。迷子と云っても一概じゃないからここは迷うところだが、そういえば私には丁度のいい前例があった。
「んぅー、多分事情を訊いて手助けでもするんじゃないかな？　そうしたことがあるし」
そんな私の答えが正解だったのだろうか、お嬢様はようやく満足の顔を見せた。
「合格ね。咲夜。耳を貸しなさい」
よどみの無い端麗な動きでメイドはお嬢様に歩み寄り、耳を傾けなにやら耳打ちを受ける。
「承知しました」
何を承知したのやら、何がなにやら良く分からないが話の前後から察するに私に関係することか。しかし自分の思慮の及ばないところで関係事を話されるのはあまりいい気がするものじゃない。まして本人の目の前で謀り事というのはわざとだろうか。
わざとだろう。
「人間。名前は何て云うの？」
「詠よ、“道行　詠”。お見知りおきってね」
「それでは詠。貴方は運がいいわ、貴方は紅魔館の来客一万人目の客人よ」
「……はぁ」
うっかり語尾を上げてしまいそうだった。
一応客人の私が云うのも何だがこんな陰気な館に客がどれほどくるものか。そもそも今まで来客した客の数を覚えているものか？
「というわけだから一泊していきなさい」
「それは構わないけれど、私が泊まったら何かあるの？　今なら一泊したら夜はエレクトリカルなパレードでも見せてくれるとか」
「パレードは無いわ。でも、今宵は祭りがあるから満を持してなさい」
「祭り？」

「そういう“運命”だよ。変えなくても分かるさ」
「祭りなら準備をすればいいじゃない。運命だなんて見透かしたようなこというのね」
「運命はお嫌い？」
「好きじゃあないわ。誇示する運命は自分のだけで手一杯よ」
「上等。とっておきの部屋でもてなして差し上げるわ」
お嬢様が企む顔でニヤリと笑うと口の端に吸血鬼の証でもある牙がちらりと顔を覗かせていた。自分としては美鈴と挨拶をして姉の事を訊ければあとは大した頓着もない。取って喰わないというお嬢様の言葉を信用するなら“暇つぶし”に付き合ってもいいかもしれない。まぁ、そもそも私とお嬢様では反りが合わないだろうけれども。
そんな思慮をしているとメイドに先に廊下で待っているように云われたので私は素直に部屋を後にすることにした。

扉を閉じる音と共に部屋に静寂が満ちる。客人の退出を確認したレミリア・スカーレットと十六夜咲夜の視線が交差して、先にレミリアが口を開いた。
「あの人間はあの部屋に通しなさい。それだけで構わないわ」
「お部屋に通すだけでよろしいのですか？」
「内側からなら大変だけど外からなら簡単だもの。お膳立てというなら充分」
主人の意図を察しても気になるところがある咲夜は重ねて問いかけた。
「ずいぶんと回りくどいのですね。今からでも私が偶然致しましょうか」

「ダメよ、暇つぶしなんだから興に入るにはさかし方にも気を使うでしょう。それにあの人間が火種を付ければ、云い訳が立つのよ」
「誰に云い訳を立てるんですか……」
「威厳とか気品とか。文句を云ってくる奴とか、その他諸々」
「左様ですか。それでは案内をしてきます」
「頼むわね」
客人の案内のため部屋を出てゆく咲夜を、レミリアは満足そうに見送った。

「どこもかしこも紅いのね。さっすが紅魔館……」
メイドに通された部屋に入ると呆れ半分の感想が漏れた。紅くて暗い。どこもかしこも、最初に私が寝かされていた部屋とはまた違った一室だったが紅いのは何処に居ても変わらないのだと、もう感心してしまいそうだった。
「紅いのは当然。この館は人の血で染めているのよ」
「血って、え……っ！？」
淡々としたメイドの言葉に私は反射的に紅に染まった壁の際から身を避けて後ずさり、反対の壁に後頭部をぶつけて肩を跳ね上げてしまった。
「い、いきなりそういうこと云わないでよ……」
壁から遠く、部屋の中央に逃げると最後は足元を見つめて眉をひ

そめてしまう。人の血だなんて云われたら視界の紅が禍々しく見えてしまって気味が悪いに決まっている。
「冗談よ。屋敷は元から紅色だったわ」
「……」
いったいどこからどこまでが冗談なのか、今ここで“冗談というのは嘘よ”と訂正されてもおかしくないから困るところだ。
「そういえば。私の服なんだけど」
「天狗の服ね。脱がした後にすぐ干したから、夜には届けるわよ」
「ありがと。私ちょっとメイド服ってのはどうもね」
「嫌いなの？」
「私は給仕には向かないわよ」
「でしょうね」
間髪も無く返事が返ってくる。自覚して云ってはいるがそうも素直に肯定されるとそれはそれで複雑な気分だ。
「それと、お嬢様からの伝言」
「伝言？　血を頂戴とかなら勘弁してよ」
「そんな事じゃあないわ。貴方が館で変な事をして、何かあっても保障しないそうよ」
何だ、そんな事か。宿泊代にご大層な我儘でも注文されるのかと思った。
「いかにも私が何かしそうな口ぶりね」
「しないのかしら？」
「しないわよ。私を何だと思ってるのよ」
「浮浪者？」
「旅人よ！」
それからメイドは一通りの部屋、屋敷の説明を終えると恙無く、にべもなく部屋を後にした。部屋に残された当の私はディナーまでは自由にしていいらしい。
それならば、やることをやっておかねば。私はまだ肝心の人物に挨拶が済んでいない。

抜けるような空の下に風が吹き抜けて、葉を撫でた。風は水面も撫でそこに足跡を残す。
なびく私の髪とその自然が風を映し出している、広大な庭の植物にその先に見える湖の波紋が小さな波になる、霧の湖と呼ばれるこの湖は妖怪の山という巨山を流れる滝から流れ込み創られているらしい。見上げると岩肌を剥き出しにした巨大な岩山が見えるが山頂は遥か雲の中に隠れて見えはしない。一体どこまで高いのだろうか、目が眩んでしまいそうな天の上まで届きそうな山だ。
首が痛くなる前に視線を戻す。紅魔館の敷地にある広大な庭、そんな庭では一人の女性が水やりをしていた。私に気付かずジョウロを片手に鼻歌交じりに庭園に水をやっている。この庭の手入れは彼女がしているのだと聞いたが、館の大きさに見合う広大な庭で花も豊富に咲いている、門の番だけでなく庭の手入れも大変だろうに。
私は彼女を少し驚かせてやろうと思い立ち、緑のチャイナ服を着たその背中にこっそり近づいてやった。
「美鈴。仕事は順調？」
後ろから声を掛けると長身の双肩が跳ね、女性が振り返った。
「咲……詠さん？　その格好は」
メイドの服のことだろう。私の服装に眼を丸くする紅魔館の門番“紅　美鈴”は一年前と変わらない、相も変わらない様子だった。
「服を借りたのよ。似合う？」
「一瞬、咲夜さんかと思いましたよ」

「あのメイドの服だものね。まぁ、何にしてもお久しぶり、一年ぶりかな」
「一年ですか？　えーっと、四年くらい経ってませんか」
美鈴は私よりも頭半分ほど高い長身に整った顔立ちの顔を傾げてみせる。そんな様すら私には懐かしく思える。
「そんなわけ無いわよ。年を跨いで一昨年の年末だったもの」
「そうでしたっけ。まぁ。それよりもお久しぶりです詠さん。あの、昼間の件は……」
「強烈なのくれたわよね。顎が外れるかと思ったわよ」
私は先刻打ち抜かれた顎に手を当ててわざとらしく見せてやる。最初、門に駆けてやってきたときの掌底だ。
「咄嗟に分からなくて、すいません。加減はしたんですが」
「すごい体重乗ってたわよ」
私の格好が違ったとはいえ、顔も見えて手を振ったのにだ。杭打ち機を叩き込まれたように容赦もなかった。
「うっ。で、ですが詠さんも打ち込む時に受け流してたじゃないですか」
「まぁ……ね」
美鈴の云うとおり、私は掌底を打ち込まれたその力の向きに身を任せて重心を前に投げていた。簡単に云えばタイミングを合わせて顎で逆上がりしたのだ。……

だからと、殴ったことがチャラになるわけがない。もし私が受け流さなければ私の身体は錐揉みでもしながら彼方に吹っ飛んでいただろう。ちなみに受け流しても美鈴の一撃は予想外に重くてそれ以上は何も出来ずにダウンしたのだから。
「体育の授業は得意だったのよ」
云いながら、私は胸中の疑心からか目を細め僅かに逸らす。
確かに元から運動神経には自信があった、それはもうそんじょそこらなら自慢できるくらいに。だからって格闘技を習っていたわけ

でもない、本で読んだりしたことはあっても私は喧嘩なんかしない。ここに来てからの動きは全部アドリブと云っていい。

そう、何故だろうか、此処に来てからと云うもの違和感がある、逆か……しっくりしすぎるのだ。身体が私の云うとおりに動いてくれる。と云っては当然か。イメージどおりに動いてくれるのだ。そう、“知識と現実の齟齬が薄くなった”と云うのがしっくりくる。そして、知識だけではない咄嗟にも“ああすればこうなる”という理屈が分かる。イメージに到達させるだけの何かがあるのだ。

美鈴の掌底の時は掌から来る“発”を受け流した。言葉では簡単だが実際出来るようなものじゃないだろう、だがそれが言葉で云うほど簡単に出来る。身体の軸、重心の動かし方なんか手に取るように出来るだろう。

修練の賜物ではない、そもそも身体の動かし方の修練なんてまともにした事も無い。

不安は残るが特に身体に異常があるわけでもないんだ。人の限界に近い動きをさせて酷使することはできるだろうが人外の動きは無理だろう。これはやはり幻想郷に来たからなのか、そもそもここが幻想の集積の地なのだからそういった不思議なことがあるのかもしれない。

「そうそう、中に担ぎ込んでくれたついでに、図書館に居た本の虫とメイドさん。あとお嬢様にも挨拶してきたわよ」

「それはまた……よく無事で」

「弾幕ごっこの練習もしたし、逃げ回るくらいならどうにかよ」

「ですが怖くは無かったですか？」

「魔女に吸血鬼でしょう。そりゃあ怖いって素直に思ったよ。でもね、魔女はちょっと陰気な本の虫。お嬢様なんか我儘な子供みたいで、何も違わないんだなって思った」

「違わない？」

「ちょっと安心してるのよ。美鈴に出会ってたのに、こっちにきてから妖怪だ吸血鬼だから違うんだって内心では色眼鏡で見ようとし

てたの、でも話してみると意外よね」
「ですが、お嬢様なんかは人の血を飲む吸血鬼ですよ」
「そんなことを云ったら、蚊だって血を吸う化け物ね」
「……」
私の発言が迂闊だったか、美鈴が呆れと心配の入り混じったような顔をしてしまう。
「そんな顔しないでよ。無謀をしようというわけじゃないの、力が強いとか種族が違うとか、そういう以前の話よ。私とお嬢様はお話が出来る、皆が泣いて笑って怒るんだもの、それって素晴らしいことだと思わない？　物怖じなんかしたら失礼よ」
「相変わらず、変わった人ですね」
「よく云われるわ。まぁ館に来てから最後になっちゃったけど美鈴の元気な顔が見れたし私は満足よ」
「それはもう、私も同じですよ」
「ああ。それとね、ついでに美鈴に姉のことも訊いておこうと思って」
「お姉さんですか」
「帰るときに云ったんだけど忘れてた？」
「いえ、その事なんですが、あの、そのですね……」
云い淀む美鈴の様子に案の定か、と私は笑って見せた。
「いいっていいって。あの時、私も本気で云ったわけじゃないし美鈴は門番でしょう。調べにいけなかったのは仕方ないよ」
「……は、はい。ですがその」
まだ何か引っかかるのか美鈴はさらに云い淀む。
「詠さんは、お姉さんを探すんですか？」
それはなんて事も無い疑問だった。でも自身でも掛けなかった疑問に迷い、言葉が詰まった。
「……うん。そうだよ」

死者を追いかける。そうだ、私は死んだ人間を探して歩いている。
常識的に考えてこんな行動は異常と云えるのかもしれない。しかしここは、幻想郷は例外だ。物語の中に居るのなら許されてしまう状況があるのだ。
だがそれを口にして意識すれば、その思考が真っ当なのか云い訳なのかも分からなくなってしまっている自分が居る。
「そういうのって駄目なのかな？」
「え？」
分かって云ってる。一年前も同じような事をして、賢しい私の悪い癖だ。
「ごめんね。またこんなこと云って……。どうせ私は探すんだよ、頭で考えるほどに器用じゃないもの。それに、探してどうなるかは後で考えなきゃわからないもの」
「詠さんは、いつもそうですね」
「いつもこうなのよ。よく云われるわ」

「あー、疲れた」
疲れたと云えばどうにかなるものではないが云ってしまうものだ。

時刻は夜、いやもう深夜と云っていいだろう。ディナーにシャワーを済ませて疲労感を抱えた身体で私は部屋に戻ってきていた。
友人に挨拶のつもりが図書館で大騒ぎ、館のお嬢様に云われて怪しい館にお泊まりだ、疲れないわけがない。
だがその反面、創作中華と云っていたが食事は真っ当な物が出てくれた、素直に云えばとっても美味しかった。館も部屋も色を除けば快適この上ない。見変えてみればこんな豪華絢爛なお屋敷にお泊りだ。旅暮らしの身なら悪い気がするはずがない。
部屋に入ってみればベッドの上には既にいつもの天狗服とパジャマが畳まれて鎮座していた。流石は瀟洒なメイドさんだ。
ああ、そうだ。メイドと云えばこの館には他にも多数のメイドが居る、妖精のメイドさんらしいが意外なほどに数が居るらしい、それなのにお嬢様の身の回りの世話はもっぱらメイド長である十六夜咲夜がしている。何故かと訊いてみれば、自分勝手な妖精たちは自分の世話をするので精一杯なのだそうだ。それでメイドとして雇ってもらえるのなら前言撤回して私でも出来てしまいそうで笑ってしまった。
「でも、メイドになったら頑張っちゃいそうだからやーめた」
云いながら私は着ていたメイド服を脱いで裸になってやる。そして、ベッドの上に用意されていたパジャマに着替えると、そのままベッドに飛び込んだ。
私の身体を受け止めてベッドが揺れて沈み込む。昼間は堪能する間も無かったがこれは堪らない、寝袋や布団とは別次元、クセになりそうだ。その柔らかな心地に身を任せて天井を見上げる。
「……」
ベッドだなんて久方ぶり、まるで実家に帰ってきたような気分だ。瞳を閉じ、大きく深呼吸をした私は身体と心の強張りを解いていた。
「ねぇ」
解けた強張りから言葉が漏れていた。誰にでもない、瞳を開くと視線を宙に投げてつぶやいた。

「私――がんばってるよね」
それは、自分に問いかけるように呟く。
「私は強くなったのかな……」
今までも、これからも。
旅に出てから事もなしに過ごして来たわけじゃあないよ。
幻想郷に来てからもそうだ、平気な面でも、心の中では、少しくらいは怖かった、辛かった。
家を出て、自由を得た代わりの自己責任は想像以上に大きかった。
だから叱咤した、誰も助けてくれないのが当たり前なんだと。そして、助けてもらうたびに自分の弱さを噛み締めたんだ。

そんな強がりだけは一人前だった。そしてそんな強がりも、いつか強さに変るんだ。そう信じてきた……今までも、これからも。

私は独りでもがんばるんだ……。
誰が認めてくれるわけでもない、お姉ちゃんが褒めてくれるわけでもない、友達に自慢が出来るわけでもない、そもそも姉も友達ももういない。だから、独りでもがんばるんだ。
嫌がっているわけじゃあない、この旅は好きでやっているのだから。

それでも、泣きたいくらいに辛いんだよ。

そうやって心中に呟いて慰めるしかできないんだ。私は独りだから。
「馬鹿みたいな話……」
古い話にドン・キホーテという物語がある。
頭の中の妄信に支配され猛進を続けた男の滑稽な物語。私もドン・キホーテのようなものじゃないか。
幻想郷なんて所を旅してるくらいだ、私の頭ももうちょっと馬鹿

だったら良かったのに。
「馬鹿な餓鬼……」
僅かな嘲笑が漏れた。皮肉を込めて笑ってやったのだ。
そうだ、愚痴なんか空に投げてどうする。私は強いんだ。強く在ればいいんだ。
ただ、強くだ。

自分を確かめ、納得をしたその刹那。
呆けた私を叱咤するかのように、壁の向こうから衝撃。壁に何かを打ち付けるような音が部屋を揺らした。
「きゃ！？」
驚いた口から素っ頓狂な声が出て、思わず口元を手で押さえ赤面する。
部屋に独りだからって馬鹿丸出しだ……。
「それにしても、何の音？」
ずいぶんと大きな音だった、壁に何かぶつかったのだろうか。
夜勤の妖精メイドが起き抜けに転んだのだのかもしれない。そう思っても大きな音だった。
きっと相撲取りのような重量級なのだと失礼な想像をしていると またしても二度三度と立て続けに打ち付けるような殴るような音が壁から響いた。
「ちょっと、何なのよ……」
とりあえずいつもの服に着替えてドアに向かう。何かの騒ぎなら様子を確認くらいはしておきたかった。
部屋の扉を開き、首だけを覗かして廊下の様子を確認する。一体どんな騒ぎが起きているのか。
だが、予想とは裏腹に水を打ったような静寂が廊下を満たしていた。何事もない、私の気のせいだったのかと思い部屋を後に廊下に

出てみる。
「何も聴こえない……？」
耳を澄ましても異変はない、気のせいだったのかと思えばそれはそれで逆に怖くなってしまいそうだった。だがその瞬間、気のせいではないと言い張るかのように、再び先ほどの音が廊下に反響した。
「ひっ！？」
間違いない、この音は隣の部屋から聴こえてくる。
視線を向けた隣の部屋の扉、それが闇夜の廊下で妙に明るく照らし出されていた。見れば扉の正面には館内ではあまり見かけない窓がある、窓の先には庭と湖がよく見えるほどに照らし出されていた。見上げるとやたらに紅い月が丸々と夜に浮かんでいる。そして、その月光が窓から射し込み格子状の影を落としながらドアを紅く染めているのだ。
「誰？」
私の言葉ではない。扉の向こうから声が聞こえたのだ。
部屋の中に誰かがいる？　いや、人が居るから物音がしたんだポルターガイストじゃああるまいに。
「そこに誰かいるの？」
二度目の声。幼い声は少女のものだろうか、その主には覚えがない。
「あ、いや。隣で寝ていたんだけどすごい音がして、それで気になったんだけど」
「そう。それなら館の者じゃあないの？」
「……まぁ、そうだけど」
「それなら、ちょっとお願いがあるんだけれど」
「お願いっていきなり云われても、人にお願いをするなら先ずは顔を見せてもらえないの」
「それなのよ。あのね。この扉を開けてくれない？」
「扉を？　開かないのなら、鍵なんか持ってないわよ。誰か呼んでこようか」

バールのような物でもあれば強引に開けれるかもしれないがここは他人の家だ、あのメイドでも呼ぶのが筋だろう。
「鍵なんか要らない。ノブを回して開くだけでいいの、そういう扉だから」
ノブを回すだけでいいのに開かない。どういう扉だ？
おかしい。そう感じ、扉の向こうから聞こえる言葉に懐疑的に構えてみる。
「待ってよ。そもそも何で部屋に閉じ込められてるの。その様子だと鍵が壊れたってわけじゃないんでしょう」
「ここの吸血鬼に酷い事をされたの。それで閉じ込められてるからお外に出たいのよ、それだけ」
「それが本当ならいいんだけど……」
開けるだけならなんて事もない。そう思い銀色のドアノブに手を……。銀のドアノブ？
一点の曇りもなく輝く銀のドアノブ、調度に金を掛けるにしても不自然だ。
やはり悪寒がする。扉を見つめる私の瞳がチリチリと熱を持って警告している。開けるなと、第六感が云っていた。
「運命……」
ドアノブに伸ばした手が自らの呟く言葉に動きを止めた。
あのお嬢様のいやらしい笑みが脳裏に浮かぶ、私の一挙一動がその言葉に見透かされているようで信用ならない。そう思うだけで私の懐疑心に拍車を掛けていた。
「あいつに何か吹き込まれたのね」
「吹き込まれた？」
「あいつは“嘘つき”なのよ。運命がどうとかなんて云っているけどみーんな嘘。吸血鬼なんて“嘘つき”なのよ」
“あいつ”とはあのお嬢様を指しているのだろう。
しかし、本当に嘘つきなのだろうか。確かにプライドが高い。我が侭で身勝手、ろくでもない奴には見えたけども……不誠実な印象

はない。そう思えばお嬢様らしい性格とも思える。ちなみに念を押すが私はああいうのは苦手だ。

「だからお願い、助けて？」

助けて。

追い討ちの言葉にまるで魔法に掛けられたか、脊椎反射のように私はドアノブに手を掛けそれを回していた。

仕方ないだろう。私にとって予感や警告よりも、何よりも先んずるものが立ってしまったのだ。

こういう場合、考えが甘いのは承知だけど後味悪いよりはいいのだから。

「分かったわ。開けるから、あとはどうなっても知らないわよ」

半ば投げやりに、声を掛け手を掛け捻ってやると、何でもないようにノブは簡単にまわり奥へとドアを押し開こうとした刹那。

「えっ――！？」

跳ねる様にドアが開いてノブを握る右手ごと私は部屋の中へと突っ伏してしまった。

「痛っ！」

突っ伏す私の頭上を何かの気配が通り抜け、次の瞬間には硝子を砕く音が夜の静寂を割った。

「あーあ、だから云ったのに……吸血鬼は嘘つきだから、気を付けたほうがいいよお姉さん」

声に視線を向けると硝子の無くなり枠だけになった窓に片足を乗せて少女が笑顔を向け、そのまま窓から庭のほうへと飛び出していった。

嘘をつかれたのだろうか。起き上がり窓に駆け寄ると庭先で先ほどの少女が伸びをして月光浴を楽しんでいた。

何者だろうか。

紅のベストとスカートが際立つ。お人形のようなブロンドのショ

ート髪を短いサイドテールにして帽子を頭に乗せている。手には杖か何か凝った装飾品のようにも見える歪曲をした棒状の物を持っている。

そして極めつけに背中から生えているモノは羽だろうか。枝のように生えた羽らしきものには七色、色取り取りの宝石が木になる実のように並んでいる。木に宝石が成っているのだ、あれが羽だとしてもおよそ飛べるような羽じゃあない。

「一体全体、どういう事態よ……とりあえず待ちなさいって」

状況が飲み込めない。分かっている事と云えばそこの少女が人間じゃないことくらいか。

無残に砕け散った窓の枠から庭へと私も出て近寄る、歩くたびにガラスの割れる小さな破砕音が耳に障った。

「あーあ、窓こんなにしちゃって。あのメイドが怒るわよ。あなた吸血鬼に閉じ込められてたんじゃないの？」

「吸血鬼に閉じ込められていたよ。あのドアノブが銀で出来てたから触れなかったんだもの」

「それよ。私にはアナタが“その”吸血鬼に見えるんだけど」

「“その”吸血鬼じゃないよ。私は私、この吸血鬼だよ」

この子が吸血鬼だとして、吸血鬼が吸血鬼なんか閉じ込めるのだろうか。まさか、そう思った丁度そのときだった、

「ああ、紅い紅い。あの月夜。夜のその凡てが、紅が鮮烈の異を染め示すのだから。夜の黒へと溶けてゆく。血は美しいほどに紅くはない。紅の月光を漆黒の闇夜に融かして流れる。だからああも慟哭的なまでに紅黒い」

今度は館の敷地中に演説のように高らかな声が響き渡った。仰々しい台詞、語るのは聞き覚えのある声。聴こえてきたそれは私たちの頭上から響いていた。

「よい月夜だわ、ねぇフラン！」

見上げる先は真上の時計台。その文字盤の横には人影、その影から蝙蝠の翼が音を立てて広がった。

「こんなに良い満月の夜だものね、散歩に行きたい気持ちはよーくわかるわ。でもアナタは屋敷の調度品を壊しまくったんだから。そう一ヶ月、部屋でおとなしくしてなくちゃ罰にならない」
　月光に照らされて影の中からレミリア・スカーレットの姿があらわになった。威圧的な物云いは昼間のままだがあの時は私よりも背が低かったが、今は時計台から私たちを見下す格好になっているのがまた小憎たらしくみえる。
「あら、お姉様」
　横の吸血鬼の子が時計台のお嬢様を見上げて確かにそう云った。
「お姉さま！？」
　まさかと思ったが。前に美鈴から聞きかじっていたけれど、この子がお嬢様の妹ということなら合点がいく。
「ああ、紹介がまだだったわね。紹介するわ、その子は私の妹“フランドール・スカーレット”ご覧の通り御転婆だから閉じ込めてお仕置きしてたんだけど……嗚呼、身勝手な人間が好奇心に任せて扉を開いてしまったじゃない。どういうことなの咲夜」
　仰々しく云い後ろに目を配せると影からメイドが歩み出て、頬に手をあてて困った様子をする。
「“何かあっても保障しない”とは念押したのですが……」
「いやらしい三文芝居はいいわよ！　つまり、私をお祭り騒ぎのダシにしたわけ？」
「御名答、この騒ぎはアンタの責任。あれもこれも皆アンタの責任。さぁ咲夜、パチェと門番を呼んできて責任はそこの客人の奢りよ」
「御意」
「ふざけんじゃないわよ！　私に払うような責任の持ち合わせがあると思ってんの！？」
　私の激昂を余所にメイドは主人の命令のままに頷くと、私に頭痛を残してその場から姿を消した。
「ひぃーふぅーみー、の……咲夜が呼び出してお姉様の方が四人、私が独り」

声に目をやると妹ちゃんが指折りで数を数えていた。
「お姉さまが皆を呼ぶと私の数が合わない。じゃあお姉さんは“私側”なのかな？」
妹ちゃんは私の方を向いて笑いかける。姉が人手を集めてまでとっ捕まえようとしているのに、笑っていられる状況なのだろうか。
「私がアナタに手を貸せって云うの？」
「だってアイツが嫌いなんでしょう」
「えっと……」
苦手なのは確かだが、嫌い……とまでは云うまい、会って一日も経ってない間柄だ。
だが、いいように使われて少しだけ心が揺らぐのも本音か。
「いいことフラン！　特別に運命をちょっとだけ教えてあげるよ」
割り入るようにお嬢様が時計台から庭へと降り立ち、私を指で指した。
「“その人間が味方についた方”が勝つ」
「はぁ？」
何を根拠に云うのか。妹ちゃんが嘘つきと云っていた事は本当かもしれない……。
しかし、効果はあったのかお嬢様の言葉に妹ちゃんの私を見る眼が急に訝しげなものに早がわりする。
「……じゃあ要らない」
よっぽど姉が気に喰わないのだろうか。袈裟まで憎いらしい。
「じゃあ、その人間は私が頂くわ。さて、まずは大将戦からだったっけ？」
「逆でしょ。まぁ好都合だけど」
こっちとしては大将が負けたら白旗振ればいいんだ、上手くいけば何もせずに済む。
「逆じゃないわ。ウォーミングアップの大将戦よ」
「後に見所がないわね」
「最初から見所満載じゃない。出し惜しみはしなくていい」

臨戦の言葉を投げかけると妹ちゃんも戦意万全の様子で楽しげに笑った。
「そっちが勝ち抜き戦なら、こっちは総当り戦ね」
妹ちゃんが云うと。瞬間、その小さな身体がブレて見えはじめた。ブレがズレになり、そのままするりと二つに分かれて、さらに分かれる。目の前で妹ちゃんが四人になってしまった。馬鹿を云うなと云いたいが、事実私の目の前でそうなっているのだ。私の眼が馬鹿になったのか。
「増えた……？」
「増えてるわよ」
それを聞いて安心した。いきなり乱視になったのかと思った。
「そういう芸当ができるのよ」
「吸血鬼ってすごいのね……。四つに分かれたなら強さも四分の一にならないの？」
「何の話？」
「三つ目の武道家の話」
「人間。少しあっちで待っていなさい、すぐ集まるわ」
お嬢様が湖側の庭端を指し示す。あそこでメイドがメンバーを集めてくるのを待てと云うらしい。
「あっちで待ってたら私も戦いに巻き込むんでしょう？」
「今ここで巻き込まれていいのね」
「行けばいいんでしょ！」
仕方もない。吐き捨てるように云って私は庭の端へと駆け出した。
庭の端では騒ぎを聴きつけたであろう美鈴が既に吸血鬼同士の戦

いを見物しに来ていた。
「詠さん。一体何事ですか？」
「何事と云うのかな、私にもよくわからないわよ」
そこに丁度メイドと、パチュリーさんだったか地下の図書館で出会った本の虫が一緒に歩いてきて私を見つけると眉をひそめた。
「そこの天狗もどきはまた何かしたの？」
天狗は私の服を見てのことだろう。早速本の虫が私に突っかかってきた。
「違……ちが、わないけど。私も被害者よ」
「咲夜は“客人の責任”って云っていたわ」
それは盥回しと云いたいがただの押し付けだ。傀儡回しに狂言回しをさせられたと云えばおもしろいか。
難癖をつけられる私の様子に見かねたのか美鈴が間に入ってくれる。
「まぁまぁ、パチュリー様。何があったかは存じませんが――」
「存ぜぬなら黙れ」
「……はい」
気持ちは嬉しいが立場が弱すぎないか門番さん。
「私は無関係じゃないけども。このお祭り騒ぎはあのお嬢様の画策よ」
「だと思った」
既知同然の様子で納得する本の虫。分かっていたのなら突付かなくてもいいだろうに。
「なんにしても、姉妹対決で決着付いてくれたらそれが一番なんだけどね……」
云いながら庭の中央へと視線を移すとウォーミングアップと云いながら盛大な大将戦が行われていた。

紅魔「スカーレットデビル」

四人の妹ちゃんが殺到する最中でお嬢様が諸手を広げるとその肢体から紅の色が空間へと流れ噴出す。オーラとでも云うべきか、不定形に空間を染めるそれは形容の仕方がない。

紅の奔流。庭の中心に巨大な十字架が立ち上り四人の妹ちゃんを四方へと跳ね飛ばした。

その様子にお嬢様はダメだダメだとかぶりを振った。

「総当りで負けるだなんてダメよ。フランなら得意でしょう。気に喰わないのに運命すら“破壊”できないの」

「お姉様は運命なんて見えるのかしら？　怖いったらないわ」

四人の妹ちゃん各々がまったく同じスペルカードを取り出してゆく。

「お姉様は、ただ運命を視ているとか云ってるだけ。破壊を理解なんかしていない。だから咲夜が御付に居ないと駄目なのよ」

禁忌「レーヴァテイン」

「なんでも壊せるって云う事は、この世界すべてがあやふやで脆いと云うことが解るの。地面なんて無いに等しいし、空なんて今にも落とせるわ」

禁忌「レーヴァテイン」

「一秒先にも世界すべてが滅んでしまいそうなあの倒錯を、お姉様は知らないのね」

禁忌「レーヴァテイン」

「――教えてあげる」

禁忌「レーヴァテイン」

「「「「――これがモノを“壊す”っていうことよ」」」」

お嬢様の周囲四方に天を突く紅の光剣が立つ。スペルの名は北欧神話の魔剣だったか。箱入りというなら彼女にお似合いだが、これは反則だろう。そうだ、スペルの四重宣言なんて反則だ。

これが姉妹喧嘩なのか弾幕ごっこなのか、やっぱり姉妹喧嘩で弾幕ごっこをしているのか甚だ疑問だが私の及ぶ弾幕ごっことは次元が違う。

あんなものに巻き込まれたらなんて思いたくもない。

そんな狂気にも似た威圧の最中でお嬢様の視線が私達の方へ平然と向けられた。つまりあの状況で余所見などする余裕があるのだ。

「こっちのチームは、揃ったみたいね」

私達の頭数を確認するとお嬢様が腕を大きく横へと振り薙いだ。

「さぁ、フラン退きなさい――抉って穿つわよ」

云うとお嬢様は後ろへと飛び上がり、宙に大きな弧を描いてその足を館の壁面へと乗せ手を着く、壁に対してその身体を垂直のままに留めた。

「「「「逃げるつもり？」」」」

私たちとお嬢様の間に四人の妹ちゃんが殺到する。お嬢様から私たちへの道を囲むよう上下左右に穴の開いた十字に並び、その身の丈を超える紅剣を手に構える。

上は下段から切上げ、左右は鏡併せの薙ぎ払い、下は上段からの切り落とし。その十字の中央を抜けるものを何としても斬り落とすという構えだった。

対するお嬢様は……満足そうに笑みを湛えていた。その幼い顔が作り出すその表情。少女らしからぬ禍々しい……いや、最も少女らしい顔なのかもしれない。

嬉々とした無垢な顔。少女らしい無邪気なその笑みこそが私にすれば禍々しいだけなのだ。そして大きく身体を振り被る。その全身を弾として込めるように、次の瞬間を清算するかの如く緩慢で確かなその動き。

宣言。

夜王「ドラキュラクレイドル」

瞬間。館の壁面を蹴ったお嬢様が弾丸となって撃ち出された。その身体がライフリングの刻まれた弾丸のように紅色の尾で螺旋を描く。

同時に、寸分たがわぬタイミングで四本の剣が外から内へと互いに刃を触れさせること無く、その切っ先凡てが弾丸を捉えた。そして、そのままに振りぬくと、違和感を覚えたのか妹ちゃんが首を捻った。

「「「「あれ？」」」」

姉を斬り裂いたであろう、手にした剣を見やる。すると長さ半分、寸前まであった刀身が抉られ消滅していた。そして、その後ろでは

斬られたはずのお嬢様が私達の目の前で蝙蝠のような翼を広げ姿勢を整えると優雅に着地をしていた。
それは剣の舞を一寸の減衰もなく穿ってしまう。剣が成す“払い”ではない、無駄のない圧倒的な“打突”だった。
私達の揃えた雁首を見てお嬢様は満足そうに頷くと手を上げて妹ちゃんのほうへと声を投げた。
「メンバーが集まったから作戦会議！」
四人の妹ちゃん達は納得したのか不満そうにふんと鼻を鳴らしていた。いいのかそれで。
「さあ、これからが本番よ。こちらも総当たり戦なんだから」
「総当たり戦って……でも妹ちゃんは四人でしょう、一人は？」
「だから一人は抜けて大事な仕事がある」
「大事な仕事？」
もしもそれが応援する役なら是が非でも願い出たい。あんなのを相手にしなくていいのなら、ボンボン持ってホイッスル吹きながらたすきがけのチアリーダーで太鼓叩いて応援しても構わない。
「そう、大事な仕事」
だが、このお嬢様に限ってそんなことはないのだろう。何にしてもまったく意図が読めないのだから。

作戦会議から数分。四人の妹ちゃんが横一列に並ぶその正面。
紅い月光の下、四人の影がそれらに向き合う。その時、時計台の鐘が鳴った。十二時を知らせる鐘が、昼間はうんともすんともいわ

なかった鐘が夜が来たと云わんばかりに鳴っていた。
美鈴に本の虫、メイドさん。

そして……。

「あれぇ。お姉さん顔色悪いよ？」
「お、お手柔らかに……」
そして……私だ。
引きつった笑いで笑いかけると上目遣いの顔で妹ちゃんはにやにやと笑っていた。
手を抜いてくれるだろうか、それが問題だ。
そして、このまま死んだら姉のもとにいけるのだろうか……それも問題だ。

七話　運命は空虚なパラドックスを謳うか？（前書き）

あらすじ

紅魔館の主、レミリア・スカーレットに一泊していくことを勧められた私、別に急ぐ旅でもないので申し出に私は頷いていた。
目的であった美鈴との挨拶も済ませて姉に関する質問もできた。まぁ結果的には何かしら情報が貰えた訳じゃないが、あのとき美鈴は何を口篭っていたのだろうか……。
それから夜になって美味しい料理に心地のよいベッド、何事もなく夜を過ごせていたらどれだけ良かっただろう。
しかし、私はレミリア・スカーレットの妹であるフランドール・スカーレットを表に出してしまい紅魔館は住人総出で大騒ぎ。

だからといえ、私までもが妹ちゃんの相手をさせられることになろうとは……。

七話　運命は空虚なパラドックスを謳うか？

今宵は良い夜なのだと云っていた。
庭から見える湖の水面は鏡のように美しく、そこに映る月の異様な紅さは夜を染め地を照らす。まるでどこかの写真家が撮る風景画か画家の描く幻想風景のようだった。
夜に棲むというのならよい夜なのだろう。だけれど私は夜に棲んでなどいない、それが別に嫌いということも無い。昼間が特別に好きというわけでもない、朝も夜も違って好きだ、だからきっと中途半端なのだろう。
そんないずれ明ける良い夜の下、私は紅魔館の面々と輪を作っていた。
「相手は四人、こちらは五人」
そう云ってお嬢様は右手に四本、左手に五本の指を立てるとそれを私達に見せつけた。
「パチェ、咲夜、美鈴。一人が一人づつ抑えるのよ」
三人が各々の反応で頷く。すると、今度は何のためらいも躊躇もなくお嬢様の指先は私を指した。
「で、そこの人間もひとり抑えるんだよ」
「……あのねぇ」
いまこのお嬢様はなんと仰りやがったか。　一人抑えろ？　馬鹿を云うもんじゃあない。
「無理よ無理。出来るわけ無いでしょ、ただの人間にバカじゃないの？　いくら常識に捉われない場所でも限度があるわ」
「倒せとは云わないわ、狼から逃げる畜生のように死ぬ気で逃げ回ればいいわ」
「畜生ってなによ。そもそもあんたは何するの。お嬢様らしく紅茶でも啜る役っていうなら代わって頂戴」

「代わって……？」
その言葉が気に入らなかったのか、お嬢様は笑みを消すと私の眼を凝視しながらずかずかと眼前まで歩み寄ってきた。
歩きながらも眼は寸分もぶれずに私の眼を見つめる。その凝視があまりに狩猟的だったため気圧された私が僅かに眼をそらした瞬間、人形のように小さな手が私の顎をに伸びた。それはグラスをつかみ上げるような端麗さで私の顎を掴んだがそれは見た目だけ、まるで万力のような力で私は顔を正対させられた。
「っ……」
「道行　詠？　貴女のその紅い紅い瞳が運命すら見据えるなら代わってあげられる」
紅い？　何を云いだすのだ。
奇妙な不安から目元に指をあててみるが、鏡も無いのに自分の目の色が分かるわけも無い。
「でも視えないでしょう、違う？」
「私はそんな妖怪みたいな眼の色はしてないわよ……」
私の否定にお嬢様はニタリと笑って私を掴む手を離す。
「あらそう。それで人間というなら人間らしく運命を掴み取ればいいじゃない」
「私は運命なんか信じていられないの。だからアンタがどうにかしなさい」
わがままだ、横暴だ、反りが合わない、だが信用はしてやる。その幼くも確かなプライドは信用に足るものだ。
「……ふーん。いいよどうにかしてあげる、それが私の役割だ」
役割か、時間を稼ぐだけなら、逃げ回ればやられはしないか。
「わかったわ。時間を稼ぐのはいいけれど――別に、アレから逃げ回っても構わないんでしょう？」
「――ええ、遠慮はいらないわ。けれども、別に倒してしまっても構わないのよ？　道行　詠」
「冗談いわないで」

そんなやり取りの後、私たちが並んで妹ちゃんたちと相対す頃。お嬢様はせっかく客人に云われたのだからと庭に置かれたテーブルに鎮座して本当に紅茶を啜っていた……。

鐘が鳴り、祭りと呼ばれた勝負が行われている中。その一角で、紅魔館の門番こと紅　美鈴はその実力差をものともしながら猛攻を凌いでいた。

フランドールの手にレーヴァテインが握られるのに対して美鈴はその後ずさりを武器としていた。

三歩後ろの間合いを取る、一歩前に出ればもうそれは自分の間合い。彼女にとって存分の戦いの出来る場なのだが……。吸血鬼であるフランドールに小手先の体術が通用しないということが分かっているからこそ、美鈴は自らの間合いを確保しながらけん制を続けていた。

「私はこういうのは苦手なのですが……」

縦に振り落されたレーヴァテインを半身に構えて避け、間髪入れずに飛んでくる横薙ぎを伏せるように屈んで避けると間髪の所で頭

上がなびく髪先と共に斬り払われた。
「弾幕ごっこが苦手？」
「いやぁ、そういうわけでもないんですけどね」
攻める勢いのまま詰めようとするフランに美鈴は手堅く弾幕でけん制をして距離を取る。下がれば弾幕。前に来れば往なして下がる。ただそれだけを最も適当に、適切にやり遂げられるのが美鈴にとっての強さだった。
「じゃあ私が嫌いなんだね」
「そういう訊き方をなさらないでください……。私は一介の門番に過ぎません」
口をつくのは柔軟な言葉ではあるが、美鈴の瞬きなおした瞳は門番としての明確な意思と使命感を携えている。
「ですが主のご命令です。一介の門番として、外に出るのならお止めしますよ」
「ふーん、門番って門を開けるのが仕事じゃないの？」
「違いませんが、違います……」

“オータムブレード”
「ロイヤルフレアを使えたなら楽なのに」

スキル宣言の後、躊躇なくパチュリーの華奢な腕が金属元素を萃め、抱えるほどに大きな金属の回転鋸を生み出し放り投げる。一つ二つ三つ、出し惜しみはなしだと云わんばかりに眼前のフランドールへと投げつけた。

回転鋸は凄惨を想起させるような音を唸らせ少女を裂かんと襲い掛かったが、それらはフランドールに触れる手前でまるでビスケットのようにことごとく砕け散る。

「壊れるようなモノじゃないのだけれど。物質では“目”を潰される」

すばやく手段を切り替えるパチュリーの突き出したグリモアから火炎弾が吐き出されるが、火球という形がまずかったのかフランドールの手の内で“目”を壊されて炎すら霧散してしまった。

「ダメね、後手に考えるのは。やっぱり吸血鬼には……」

云いながらパチュリーは半身に構えて腕を突き出す。止んだ攻撃に対する突進から眼前に迫るフランドール。その鼻先に伸ばした指が僅かに触れた。

「これが手っ取り早い」

土水符「ノエキアンデリュージュ」

宣言。同時に指先に蒼い魔法陣が現れるのを視認してフランドールはとっさに顔を庇った。

魔法陣から飛び出したのは岩石をも穿つ高圧力を持った水の弾。それが庇った細くも頑丈な腕に叩きつけられる。その数は文明の器、自動火器にすら匹敵する。弾丸の雨、という言葉があるがまた違う。雨の弾丸。が無数に撃ちだされる。雨の弾丸の雨。とでも形容するか。

無尽蔵に乱射され続ける水弾にフランドールの身体が強引に後退をさせられてゆく。

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！！」
「致命的ではないか。つまりこれは、嫌がらせというべきね」
フランドールは顔を庇いながらも水弾の“目”を捉えて潰す。だが、壊して爆ぜた飛沫すら散弾の一部に変わりがない。結果、更に細かな水の粒が多数襲い掛かるだけだった。
「痛い――」
痺れを切らしたフランドールが右手を後ろへ振りかぶると瞬く間にレーヴァテインが発生し、躊躇うことなくそれをパチュリーめがけてなぎ払う。
「てばぁ！」
瞬間、眼前のパチュリーの姿が消える。なぎ払って消し飛んだわけではない、手応えが無い剣を仕舞ってフランドールは空を仰いだ。

“スプリングウィンド”

パチュリーはその華奢な身体を風に任せフランドールの後ろへと曲線を描いて舞い上がっていた。本来は風で相手を圧す魔法だが先ほどの状況で距離を取ったのなら真っ二つになるのは明白、見上げるフランドールと頭上を舞うパチュリーの視線が交わる。
いざとフランドールが構えるが、行き当たりばったりの吸血鬼よりも先を思慮する魔法使いのが先手を取った。

“コンデンスドバブル”

パチュリーの指先からあふれ出すように水の泡が生まれる、人を丸呑みに出来そうなまでに膨れたそれが破裂。頭上から滝のように水が降り注ぐのをフランドールは紙一重で飛び退いた。
その隙に地面に着地するパチュリー。泡は牽制であり着地までの時間稼ぎ。間髪入れず再びノエキアンデリュージュをばら撒いてフランドールを封殺しにかかる。だが、致命的ではない。やはり嫌が

らせにしかならない。
「むしろ、致命的なモノは“雨”より“銀”」

風を切る音と金属の散る音が一つセットで無数に響く。ひゅんと鳴ればパキンと返す。その只中では、チラチラとまるで雨のように銀色の破片が舞い、十六夜　咲夜とフランドールの間に降り注いでいた。
咲夜が淡々と取り出して投げつけた銀のナイフが軽快な音と共に無為に砕け散った。先ほどの音と破片はこの行為の繰り返しの跡だった。
「咲夜はナイフを作って投げてるわけじゃないんでしょう。拾って投げてるから、壊せばいいんでしょう？」
咲夜はナイフを投げる。フランドールもそれくらいは知っている。そしてナイフは壊せるものだということも知っている。吸血鬼の苦手とする銀のナイフも届かなければただのナイフにも劣る。ただのナイフはもっと劣る。
だが、紅魔館のメイドは不利であろうとうろたえない。
「そうです。ではこれは――」
言葉の隙間に時間を停止させ、咲夜は投擲しておいたナイフを雨にする。
「いかがでしょう」

フランドールがその言葉を耳にした時は既に遅く、彼女の周囲の空間がナイフで埋め尽くされそのすべてが自分に刃を向けていた。
壊すのなら追いつかないほど、数え切れない数で圧せばいい。咲夜が時間停止を解除して襲い掛かるはずのソレは、だがしかし、動くと同時に乱れ打つように立て続けに砕け散っていった。咲夜の予想を裏切って、刃ではなく残骸が雨となっていた。
「……あら」
「駄目だよ。止まっても、速く動いても。空間とか時間を弄くっても、ナイフの“目”は私の手の内なんだから」
もしもこのまま、ナイフを全て破壊されたのなら彼女に攻撃の手段は残らない、手詰まりと云って差し支えない状況。だが紅魔館のメイドはうろたえない。
「さて、困りましたわ。今ので殆ど投げてしまいましたから」
頬に手を当てて本当に困っているのか疑わしいように困る咲夜。次の瞬間には妙案が浮かんだのか、彼女はいつもの端正な動きで滑稽に手をポンと打った。

「確かに。“目”は手の内ですが――」

咲夜の手首がナイフを振りかぶり投擲。それに対してフランドールは当然のように“壊れろ”とナイフの目を潰す。
だが――その頬を切り裂いてナイフが後ろの地面に突き刺さった。
「え？」
目を見開いてフランドールは意図のない声を出していた。
“壊した”はずのものが壊れない。フランドールの中では頬を焼く銀の痛みよりも己の能力の通じない驚きが勝っていたのだ。
「ナイフが砕けて散るのは一瞬です。では、その一瞬にどれほどの“時間”が必要なのでしょう」

停止した時間の中では壊れることすらも許されない、壊れる時間がないのだから。だから咲夜はナイフの時間を奪う。時を動かせば清算されるがこの時だけは壊れも劣化もしない銀の刃となる。
ならば二本もあれば充分だと、見せ付けるように両手にナイフを握り締めて咲夜は宣言をした。
「残念ですが、ナイフの時間は私の手の内です」

傷魂「ソウルスカルプチュア」

一振り二振り。
恐ろしい速度で私の眼前を風切る音が抜けていった。
「こんな喧嘩ごっこしてないで一緒に紅茶でも飲みなさいよ」
「事情も知らない客に何が分かるの？　何も分からないのに何が云えるの？」
その両腕の動きがあまりに速すぎるので私はとにかく予備動作を見て避けるしかない。
幸い、妹ちゃんはむやみに振り回すのでその軌跡はよくわかるが、

それを有り余って動作が速いのだ。
「何も分からないから無責任に云っているの、それが他人ってものよ。だから紅茶でも飲んでなさいって云うのよ」
「一緒に紅茶を飲もうなんてお姉さまは云わないもの」
「……」
まともに喰らえば一撃で充分だろう、そんな恐怖で身体が大げさに避けてしまう。いや、逃げるに等しい。そもそも逃げるつもりだったが背中なんかみせたのならどうなるかわかったものじゃない。
私は大きく体勢を崩しながら彼女の戯れを避けることしかできない。これなら畜生の方がまだ華麗に逃げ回るだろう。
追い詰められてゆき崩した体勢から避けれないと判断して仕切りなおそうと結界の札を放る。

“三点結界”

妹ちゃんとの間に張られた三点の結界、しかしそれはあっというまも待たずに突き破られて無残にも役目を終えた。
聞いた話では彼女は“ありとあらゆるものを破壊する程度の能力”を持っているとかいないとか。
モノの弱点、点穴をその手の内に移動させれば握るだけで何もかもが壊れる。額面どおりに捉えるなら馬鹿みたいな能力と云うしかない、きっと線や点が見えているに違いない。
私の結界に関して云うのなら、これは点穴を突かれる以前の問題だ。単純に私が弱いのだ。私が作る結界では時間稼ぎにもならない。
結界を破られ、詰められた距離から大振りな引っかきをバク転からバク宙の連携で強引に距離を取る。
「そ〜こだぁ！」
バク宙をする私の後頭部を狙って突き出された細い手首の先の鋭利な爪。私は背を向けたままその華奢な手首を掴んでそのまま腕の上に倒立する。妹ちゃんの顔の見えない向きで逆立ちの状態から—

―。
「いくわよ、痛いけど我慢して頂戴」
そのまま崩れ落ちるように全身で腕に絡みつき全体重を乗せる。サブミッション、いわゆる腕拉ぎというやつだ、いくら吸血鬼だからって体つきが人間と同じなら関節技が有効なはず、このまま押したおして封じ込めれば妹ちゃんといえども……。
だが、しかし。
「ん？」
「あら……まぁ」
妹ちゃんは片腕で平然と私の体重を支えていた。倒れないのだ、私はまるで木にしがみ付くコアラの様に、曲げた肘すらピクリとも動かない。テコでも埋まらない力の差がそこにあった。
「せぇー……」
そのまま、腕を振りかぶる！？
「のっ！！」
「――っ！？」
遠投をするように細腕が私を絡みつかせたままに空を薙ぎ払った。しがみ付いていられるはずがなかった。真横に投げ飛ばされた私の身体が宙を舞ってから水切りの要領で地面を幾度も撥ねてゆく。死に際に走馬灯が回るなどと、身体、脳みそごと世界が回っていたら世話も無い。
世界が回る中、宙を掻いた私の右手が地面に触れた瞬間、保身をかなぐり捨てる。迷わず五指を地に突き立ててフルブレーキ。皮が裂け肉に喰い込み骨が軋む。痛い。脳が感じる拒絶の痛みを無心で押さえ込む。　滑り滑ってかろうじて地面に喰らい付いて留まった。その、あまりの出来事に放心した様に焦点を宙に投げていたが、私の内心は痛みに反して淡々と思考していた。
右肩の感覚がおかしい。違和感と重なる痛み、皮膚と肉が突っ張ったような感覚。左手で触ってみると激痛と共に肩の部分の皮膚が歪に隆起していることが分かった。右腕で無茶にブレーキを掛けた

のが原因だろう。
端的にいってしまえば脱臼だ。弾発固定で二の腕が動かなかった。だが、引っかかっている外れてはいない。
まどろっこしい、手にあったナイフの柄でガツンと殴った。筋肉の中で固形の物体同士が擦り合い、力のままに一息に嵌る。激痛と自分の腕がプラモデルにでもなったかのような異常な感覚を脳が拒否していた。
「痛っ……たぁ」
他の感覚がどうでもよくなるほど痛くて、胃の中が戻ってきそうなくらい気持ち悪い。
「最悪だわ……」
ゆっくりと立ち上がり、もう一度妹ちゃんと相対する。
胸や腹は打っていない、痛くても内臓を傷つけてはいないだろう。だが全身が痛いと云っている以上、続けても嬲られるだけだ。
冷えた肝と共に、心中も冷徹な思考をまわし始める。眼を閉じて一呼吸。開いた眼から出る視線で相手を射殺すように、自分の顔が強張るのがわかった。
私の持ち得る凡てを出そう。足りなくて元々だ、灯火なんてものは風で消える前に燃え尽きればいい。
そんな私の様子を察したのか妹ちゃんは爛々とした瞳で笑顔を向けてくれる。
「じゃあ、いくよぉ」
「……ちょっとくらい待ちなさいよ」
私は懐から取り出した札を宙に舞わせてそれをナイフで斜めに射抜く。それは踏み込み飛び出そうとしていた妹ちゃんの足元に突き刺さり、指を鳴らすと札の霊力が地面に広がり天へと迸った。
夢符「封魔陣」
その持続は三秒ほどだろう。その間に私は緩慢に歩いて結界との

距離を詰める。四歩か五歩か、もう少しと三歩の距離にまで詰める。そして、結界が役目を終えて収束する。燐光だけを残して消えてゆく壁の向こう側で吸血鬼が笑顔で真っ向に飛び込んできた。

「今度はあたしの番だね」

「……まだよ」

その突撃に眼が反応すると同時に静から動へ、弛緩から緊張へと身体を動かし、すべての神経、感覚を澄まして私は息を止めた。眼が慣れた、もう見得ている。それは集中と呼ぶのもおこがましい、須臾を永遠にするように。

封魔陣はタイミングを計るために置いただけ。動きに無駄の多い私では妹ちゃんの懐には潜り込めない。だが、飛び込まれる瞬間に構えれるのなら、初手だけなら対応してやる。

飛び掛ってきた妹ちゃんの右手、吸血種の爪が私の眼球を抉りにくる。五本の指に備える鋭利な刃物、まるで銃器で撃ち出されるフォークのようにも見える。

だが、直線的な動き。左へと流れる私の首の動きがその爪を視界の外へと流してゆく。

小指の爪先が私の右目尻をわずかに抉り取る。紙一重、妹ちゃんの吐いた息の音が私の耳をひゅうと通り抜けた。

私の左足が地を踏み込む、右足を宙へと振り上げて。前へ、踏み込んでいた妹ちゃんの右足を草刈鎌のように引き薙ぐ。

そして上半身は、昼間に打ち込まれた美鈴の動きを模倣する。右足の動きと同期するように右腕を突き出す。掌の底が妹ちゃんの顎を捉えて貫くその刹那、小さな身体を地面と水平にした。

その小さな身体が重力に逆らい僅かに宙に浮く、七色の羽が広がって空中で姿勢制御を――。

「――まだ」

暇などくれてやるものか。バグリと口を開けた私の右腕が指という牙を使って妹ちゃんの小顔を丸ごと喰らい、地へと叩きつけた。

「喰らえ……」

指の隙間からはみ出している札が茜色の光を帯び、結界を形成する為の博麗の力を妖怪の身体に直に叩き込む。

神技「八方鬼縛陣・接発」

直接叩き込まれた結界の力が小さな身体を奔り地面へと流れる。八角の結界が地面に浮かび上がり天へと昇るとその威力のほどを見せつけた。

これで終いだ。茶番のような祭りは、くだらない姉妹喧嘩はもう。その半面で立ち上がるなと念じるように、祈るように私は札を持つ右手に力を込めていた。

だがその瞬間、電気ショックを与えたように妹ちゃんの身体が跳ねるように仰け反る。

「っ！？」

抵抗されている！？　右手の札が弾け飛ばんと暴れだす、そしてゆっくりと……弱々しくも私を掴まんと小さな手が空を掻きながら伸びる。

右腕に左手を据えて全力で押さえ込む。これで無理なら死ぬ以外の選択肢が浮かんでこないんだ、だからここで抑え込む。

そんな私の願いが届いたのか、結界の力が消え果る前にまるで糸が切れたように妹ちゃんの手が地に落ちた。

そうして燐光も消え、結界も消えた。それでも妹ちゃんは動かなかった。

たおした……の？　私が倒した？

「はぁ……はぁ」

肩で息をする、視点が浮かれている、頭痛がした。体の節々も痛かった。頭の中身も身体も付いていけてない。

自讃は趣味じゃないが少しくらい自分を褒めてやってもいい気がした。人にしては出来すぎた、人外の動きと云ってもいいくらいじゃないだろうか。

脱力、弛緩した意識が時を鈍重に流している。
寸前に限界まで拡大されていた時間は今や普段以上に縮小されていた。何度息をついても息は切れている、一秒なんてこんなに短いものだ。十秒前まではコンマすら遠かったのに。
疲れと余裕が出来てふと妹ちゃんに気をやる。万が一、やり過ぎていないだろうかと流した私の視線がソレを見た。
「あ――」
その顔に据えるだけになっていた右手の指の隙間から猛禽のような瞳がこちらを見つめ返して笑ったのだ。
「っ！！」
次の瞬間、右手首が締め上げられるように掴まれる。あまりの力に機械に挟まれたような錯覚を覚える。
顔を顰めたのは一瞬、迷わず左手で地面に刺さっていたナイフを抜き取り手の中で半回転、逆手に持ち直して迷わずに右手の指の隙間に突き立てた。
だが遅すぎる。
「“壊れろ”」
妹ちゃんの空いた右手が手の中で何かを握りつぶした。すると、魔法を掛けられたように手にしたナイフが柄だけを残してばらばらに破砕してしまった。
大切なナイフが……壊された。一本しかない大事なナイフを壊された。その悔しさで奥歯をギリとかみ締めた。形見のナイフが。
「このぉ……っがぁ！？」
私に反抗すらさせずに妹ちゃんの右腕が首を掴み上げた。乱暴なままに鋭い爪が私の喉に食い込む痛み、そして鎖骨から胸へと血が伝う感触。
「アハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！　騙された騙された！」
触れたような無邪気な瞳が笑っている、私をあざ笑っている。
「お姉さんは英雄じゃない。巫女でも魔法使いでもない、人間でも

咲夜みたいにできるわけがないじゃない」
悲鳴の出ない喉の代わりに首の骨が肉の間で悲鳴を上げた。身体の中から骨の音が耳を使わずに聞こえてしまう。
「ねぇやっぱり可笑しい。ここにはお姉さまが立っているべきよ、なんでこんなところに立たされたの。お姉さまに捨て駒にさせられた？」
喉を掴む手が緩み、私に答えを促す。私は息を吸って吐くように、呼吸を整えてから口を開いた。
「……自分で選んだからに決まってるでしょ。貴方のお姉さまを信用してやったのよ」
「アイツがどんな運命を運んだかは知らないわ。でもお姉さんじゃ私には勝てない、コレは必然っていうのよ」
必然？　そんな訳があるものか。
“運命”というものは未来を、“必然”は現在もしくは過去を語るべき言葉だろう。どこの誰が未来の必然など語れようか。
確定した未来なんてつまらないし、そんなものは何も生みだしはしない。だが、もしかしたら妹ちゃんは未来の必然を語れるのかもしれない。こんな幻想郷だ、妖怪にも色々居る故に例外があって然り。私も否定はしない。

なればこそ――

「私は人間よ。私がこの結果を必然なんて云ってみなさい、“言い訳”にしか聞こえないじゃない」

人間に未来なんか分からないんだ。分かりもしなかったことを負けてから必然だなんて云ったら言い訳じゃないか。

一年前、あの時に私は決めたんだ。
八雲　紫と相対した時。何で私はこんなにも無力なんだ。死にたくないよ。そう叫びたかったんだ。だから――私はここにいるんだ。
息を大きく吸い込んで締め付けられる喉で拉げた声を出していた。

私は弱いのか。弱いのだろう。
私は勝てないのか、勝てないのだろう。
頭ではとっくに分かってる。

「おふざけでたまるものか――」

だからなおさら！
まだだ、と。私の意志が、身体が。抗ってみせしめてやるのだと云っている。

「私は、お姉ちゃんに会うんだから――そうよ」

身体が自然に動いて即座に三枚の札を取り出す。それは巫女に貰った札とは違う、私が造った自前の結界の札。
鋭く、三角をイメージしながらそれを地面に投げつけた。

外符「三方結陣」

私達を中心に巨大な三角の結界が顕現する。光の壁が燐光を散らして地から天へと遡る、私の創る境界がその力を以って吸血鬼を否定していた。
奥の手として出したが、これはとっておきではない。未熟ゆえに作った札が弱いからこそ使わなかったのだ。

ならば弱いこれを使った理由もある。これは巫女の力じゃあない、これが本当の意味での“私”の全力だ、私の意地なのだ。それを見せ付けたかったのだ。
僅か数秒。だが弱々しいそれは噴出花火のようにあっけなく力を尽かせた。
そして、それを待っていたように、首の爪が食い込み不機嫌そうな妹ちゃんはものともせずに平然と立っていた。
「さっきよりよっぽど弱いのによくいうのね。口ばっかり」
首を締め付ける音が鈍く、骨の悲鳴が絶叫に変わりいよいよ苦しむことしかできない痛みが私を襲った。
金魚のように口を開閉し、飛びかけた意識が札を取り落とした。
「アナタは――コインがあってもコンティニューできないかもね」
「ぁ……がぁ」
薄れ始めた意識。その只中で私の眼はまだはっきりと見据えていた。湖を背に立つ紅い霧の奔流を。
引き結んだ口が緩んで思わず笑ってしまいそうだった。
「……あーあ、云わない事ない」

時を同じくして、レミリア・スカーレットは満を持して動いていた。彼女は別にティータイムを満喫する役割ではない、ただ、“待

っている”時間をティータイムで消化していたに過ぎなかった。
飲み終えたティーカップをソーサーに、椅子から降り立ち誰にも聞こえぬ声で静かに呟いた。
「Ｓｐｅａｒ　ｔｈｅ　Ｇｕｎｇｎｉｒ」
神槍「スピア・ザ・グングニル」
静かに、端正に宣言、レミリアは右腕を高々と掲げる。
伍
「運命は必然とは違う。それを認めることもできる、それを否定することもできる」
肆
掲げた手、指先から紅の霧が迸る。線を描き絡み合う、それは収束。
参
神槍の名を持つ槍、その姿を創り描く。それはレミリアの身体を優に超える全長。
弐
「それを変えることもできる。とても自由で在って無いようなモノ。だけれども。今宵は私の運命に従ってもらうわよ――フラン」
壱

振りかぶる。

零

投擲。

衝撃の波。
初速で音を置いてゆく。
ソレは弾ける様な音を残して大気の壁を貫いた。

庭端で深紅の槍を作り出したお嬢様がそれを振りかぶり、腕を振り下ろすと、空気が槍に貫かれて割れた。白く放射状に確かに空気が貫かれていた。
手を離れ在り得ない加速を以って庭を横断する槍、それはまず美鈴の気弾を爪でなぎ払った一人のわき腹に突き刺さる。貫通はしない、その馬鹿に丈夫な身体丸ごともってゆく。
次は本の虫の放つ水弾の雨に顔をしかめていた二人目の背中に一

人目がぶつかる。槍は当然の如く二人目もまとめて吹き飛ばす。
そして、メイドの振るったナイフを避けるために羽を翻した三人目に正面からぶつかる。途中でメイドもぶつかりそうだったが紙一重で時間を止めてそれを避けていた。
最後は私の首に爪を立てていた４人目の背中に突き刺さる。衝撃に手を離され私はそのまま宙へと放り出された。その瞬間に轟音が耳朶を突いた、最初の空気の破裂がようやく波となって私にまで届いたのだ。その速さたるや、お嬢様が投げたと思ったら私は宙に放り出されていたのだ。コンマ以下と云っていい。
槍はそのまま妹ちゃんを纏めて館の方へ運んだ。妹ちゃんの身体が数少ない窓のひとつを突き抜けて、館の中へと吸い込まれる様をみたのは私の身体が宙を舞っているとき。既に枠の壊れた窓、開きっぱなしの扉。妹ちゃんの割った窓、私が開け放った扉。確かにその中へと、元の場所へと返されたのだ。
重力に引かれてようやく地面に身体を叩き付けると同時に腹に響く轟音が館の奥から響いた。あの勢いのままに激突したのだろう、交通事故よりも酷い音だ。
「パチェ」
「……」
お嬢様の言葉に本の虫が指を一振りすると一陣の風が吹き抜けて、部屋の扉をパタンと扉を閉じた。あっけのないものだ、それはまるでスイッチを切るように唐突な終わりだった。
いや、本当に終わったのだろうか？　そのあまりの唐突さに本当に終わったのかと疑心に駆られる反面で、私はそういうことかと納得をしていた。あれが、役割だったのだ。
偶然に一直線になった妹ちゃん達は偶然にお嬢様と部屋の間に位置して偶然お嬢様が槍を構えていた。その重なる偶然を必然とと呼ばないのならばそれはまるで運命か奇跡のように妹ちゃんをもとの部屋へと返してしまったのだ。
だからこそ、私にはできない役割だったのだなと内心で深々と納

得をしていた。
「生きてるわね。上出来、上出来」
地面に座り込んでいた私の眼前にお嬢様の顔が現れた。その顔が憎らしい反面、安堵を覚えてしまった。
「死ぬかと思ったわ……よ」
「でもおかしいね。あなたはあそこで首を折られて死んじゃう運命だったんだけど」
「あのねぇ……」
「冗談だよ。冗談」
「私、運命とか信じていないんだから」
「そう。それくらいの方が運命なんて変えられるものだよ」
「運命を変えられたなんて誰にも分からないわ、貴方こそ証明できるわけがない」
「そうよ。でもね詠、貴方は“今”の証明すらままならないのだから偉そうな事を云えないよ……さぁ、祭りはお終いだからもう休みなさい」
そう云うとお嬢様の瞳に引き込まれるような感覚と共に眠気が溢れて私のまぶたを重くさせた。
「あ……れ、ちょっと……」
疲れが出たのだろうか、何かをされたのだろうか、それすらも分からないままに私は瞳を閉じて意識を闇へと落としていた。

嘯いて、目を背けていた姉への想い。
戦いの最中で猛って云って、ひとつ気付いたことがある。レミリア・スカーレットがこの子の姉と分かってから私の心中にあった妹ちゃんに対するもやもやとしたモノ。
私は彼女が“妹”だと知って、なんで姉と仲が悪いんだと……そう憤っていたのだ。
だが、いつか身内を失うことは悲しいなんて。それさえ知っていれば私は姉のために何かが出来たのだろうか。
私が馬鹿なのだ。なぜ姉が居なくなってから必死に云うんだろう、姉が生きているうちに何かしてやれていたらと、そう思うことが言い訳がましくて胸が痛い。

でも、あの子に、妖怪に人の死の尊さは分からないのだろう、わかってたまるものか。
でも、あの子に姉の大切さを知って欲しかった。

そうだ……私は羨ましかったんだ。

姉と喧嘩のできる彼女が羨ましかったんだ。

「――天狗様」

闇の中で私の思慮が遮られる。
「天狗さま？」
声？　確かに声が聞こえる。無意識の闇の中で自分の身体を確かめる。
その闇の中、私の眼前と云っていい距離に一人の少女が立っていた。覚えがある。
「天狗じゃないわ、こう見えて人間よ……ああ、貴方は確か」
「情報屋でございます」
私よりも幼い顔立ちに似合わない口ぶり、相変わらず紅色の装いが目立っていた。
「覚えてるわよ。一応、宿を見つけてくれた恩人だもの」
「それはよかった。いえ、良くないのかもしれません……？」
何を云っているのやら。情報屋の女の子は判断しかねて小首をかしげていた。口調よりもどこか抜けたところがあるらしい。
「トンチをしにきたの？」
「そんなことはございません。私はとりあえずご無理はなさらないほうがよろしいかとお伝えに参っただけです」
「無理って云われても。したようなしてないような覚えが薄いけれども」
「吸血鬼なんてものを相手にああも立ち回られた」
「云わないでよ。私だって怖かったし逃げたかったのよ？」
「でも貴方様は戦ってしまわれた。そういう御方なのだから態々お伝えに参ったのです」
そのとおり、確かに戦った。私はそういう性格なのだろう、それくらいの自覚はある。
「……気持ちだけはありがたく受け取っとくわ」
目を逸らしながらいうと、満足したのだろう少女は笑顔で頭を垂れた。

「では、これからも御贔屓に」
「はいはい。またね」

眼前は紅々と塗りたくられた天井。見覚えのある天井がそこにあった。
「知ってる天井……夢か」
夢現に独り言を呟いて身体を起こす。そこは紅魔館のベッドの上、メイドに案内された部屋だった。さっきの情報屋がまだ近くにいるのかときょろきょろと周囲を見回すが人の気配はない。
どういう状況なのか、頭の中のデジャヴを交えながら思索していると、ひしひしと痛む身体が昨夜の出来事を想起させ、同時に夢ではないのだと教えてくれた。
妹ちゃんに出会って、戦って……。そうだ、そうだった。
「昨日はごめんね」
聞こえはしないだろう、ポツリと呟いて私は隣の部屋の壁を軽くノックして廊下へと出た。
窓の少ない館だが廊下に窓があるとはっきりと朝だとわかる。昨夜は格子の月光を落としていた窓が、まばゆい光を取り込んで妹ちゃんの居る部屋のドアを照らしていた。
「なるほど」
このための窓なのかと私は一人で納得をするのと同時に、夜が明けたのだなとガラスの砕けた窓から流れる朝の空気を懐かしんでいた。

「何で太陽は昇ってくるのかしらね。夜が来て、ずっと夜だったらいいのに」
「吸血鬼が館から出てきたら困るからじゃないかしら」
紅い部屋の中、入ってきた私の言葉に窓の外を見ていたお嬢様が振り返った。
「そうなの？　なら、今日は散歩にしようかしら」
「吸血鬼がお日様の下を闊歩できるもの？」
「日傘をね、差すのよ」
私の指摘にお嬢様は傘を肩に置くような仕草をすると、見えない傘をくるりと回してみせた。
「勘弁してよ」
夜に闊歩する吸血鬼が昼間闊歩しているなんてらしくもないし、おっかないだろう。
「……ところで、妹ちゃんのことなんだけど」
「うん？」
「見ていて思ったけれども、愛情不足よ。もっと構ってあげないとあの子ぐれちゃうわよ」
「今更まだ捻くれるの？」
「今更なら尚更よ。もっとお姉さんとして可愛がってあげて姉妹愛を深めなさい」
妹ならではの私の説教にお嬢様は子供らしく口をへの字に曲げる。
「だって悪さばかりするんだもの。姉としてお仕置きしてるのよ」
「飴と鞭よ」
「飴よりも血。鞭なんか効かないよ」

これだから。どこぞの吸血鬼退治の一家の鞭でも持ってきて欲しいところだ。
「云いたいことは済んだ？　なら客人は帰った帰った。今日の私は散歩に出る予定なんだからね」
「客人って呼ばれる扱いだったのかしらね」
「そうでしょう、だからこそ楽しかったわよ」
あっさりとうなずくお嬢様。敢えてそう扱われたのだろうか、そう思うと妙な親近感が沸いた。
「そりゃあ……よかったわ」
客人以上に扱ってもらえたのかと云われたらそうなのだろう、そもそも上も下もあるものかとも思うが私はそういうもてなし方は嫌いじゃない、もちろん穏便なほうが好ましいのは云うまでも無いが。
それを言葉にできる無邪気さにあてられて、思わず私の口の端からは笑みが漏れていた。
「散々な世話になったわ、またね」
「ええ、またね。人間」
お嬢様に簡単に手を振ってから私は部屋を後にした。

門近くにまで出たところでちょうど見回りをしていた美鈴と出くわした。
「精が出るわね」
「お帰りですか？」
「いつ血を吸われるか分かったもんじゃないし、図書館の主にも嫌われたもの」
私が茶化して云うと美鈴は笑いきれずに苦笑いを返してくれた。
「ああ、いたいた」
後ろから掛かった声に振り返ると館のほうからメイドが歩いてき

ていた。
「あれ、お見送りにでも来てくれたの？」
「ちょっと違うわ。昨日のことで駄目になったんでしょう、それ」
メイドが私の懐を指差した。それが昨夜壊れたナイフのことを云っているのだとはすぐに分かった。
「……たしかにこんなになっちゃったけど」
ナイフを取り出すと柄だけが残ってそこにあったであろう刃は初めから無かったかのように欠落していた。
「でも、捨てないわよ。お姉ちゃんに貰ったモノなんだから」
「相変わらずね……」
「何がよ」
「昨日の夜にアレだけ鎬を削ったのによく云うものね」
「あ、ちょっと！」
するりと隙を突かれてメイドにナイフを取り上げられてしまった。取り返そうと私が手を伸ばすと鼻頭に何かを突きつけられた。
「はい。交換よ、今度は大事にしなさい」
何かと目を瞬かせる。それは銀のナイフが五本収まっているベルトだった。
「無茶を云わないでよ。それに“今度は”なんて貴方にナイフをもらった覚えなんかないわよ」
「確かにそうね。でも二度目なのよ。それと、こっちは直しておいてあげるわ」
「……わかったわよ」
意図も読めないままだが直してくれるのならと私はメイドから素直にベルトを受け取った。短いベルトは腕か脚か、腰に巻くならコルセットがあっても無理だろう。
「投げるなら数があったほうがいいでしょう」
「……ありがと」
とりあえず、天狗の服が足の出ている服なので丁度良く太股に巻きつけられた。ナイフを取り出すときも不自由は無いだろう、収ま

りが良すぎて癪なくらいだ。
「それで貴方はこれからどうするの？　姉を探すなんて云っていたけれども」
「ええ探すわよ、もうこの世には居ない姉だけれどね。馬鹿な話だと思う？　でもね――」
確かめるように、私は自分のために言葉の間に僅かに頷く。
「それでも、逢いたいのよ」
私は姉に逢いたいんだ。そんな自分の弱さを認めていた。
「死んだ人なら――里からみて妖怪の山の裏手側。“中有の道”の先に“三途の川”があるわ。渡る手前で探せばいいでしょう」
メイドの指が里の方角と妖怪の山を指した。“三途の川”なんてそのままのモノがあるのかとあきれ半分感心する。
「中有の道に三途の川ね……閻魔様にでも訊けばいいの？」
「それがいいわ」
冗談で云ったがメイドも冗談なのだろう、そのまま私は紅魔館の門をくぐって外へと出た。
振り返ると腕組むメイドに手を振ってくれる美鈴が居てくれる。
「じゃあ美鈴にメイドさん。またね」
そう云って、一際大きく手を振りながら私はまた歩き出した。

客人が去った後、手を振り終えた美鈴と咲夜、視線を交わさず美鈴は口を開いていた。
「咲夜さん、放っておいていいんですか？」
美鈴の言葉に咲夜は何を思うのか、何も思わないような口調で答えていた。
「ここにはもうあの子の姉は居ないのだから仕方ないわ」
「……」
「さて、私は戻るから寝扱けないでね」
それだけ云うと咲夜は館へと戻って行った。
館の中、階段を上り廊下を歩き、咲夜が主人ことレミリア・スカーレットの元に戻ると彼女はなにやら鏡の前で帽子を整えている最中だった。
「あの人間……詠は？」
「もう、発たれました」
視線を逸らさずに云うレミリア。首を回して多角的に確認すると“よしよし”と頷いた。
「そう、なら私も散歩に出かけようかしら」
「さっきの会話……売り買いの言葉ではなかったんですね」
「そうよ、吸血鬼は嘘つきではないわ」
「はい」
「さぁ咲夜、日傘は二本用意しなさい」
「かしこまりました」
ちょっと変わった主人の命に一礼をして咲夜は微笑を浮かべつつも準備のために部屋を後にしたのだった。

八話　しを想え、此岸に曼珠沙華は笑うのだから（前書き）

あらすじ

命もからがら、紅魔館で一夜を明けた私。
館の主であるレミリア・スカーレットに挨拶を済ませて里へ帰る際
私は美鈴とメイドに見送って貰ったのだが、その時にメイドが姉探
しについて教えてくれたのだ。

死んだ姉を探すのなら、三途の川に向かえば見つかるかもしれな
い。と

八話　しを想え、此岸に曼珠沙華は笑うのだから

三途の川。
それは此岸と彼岸を別つ川、俗にいう死後に渡ると云われる川である。
この幻想郷にはそんな川があり、生者でも行くことができるという。厳密には幻想郷の外になるらしいが幻想郷から歩いていけるのだ、いかがなものかと思う。
紅魔館から帰った私は慧音先生に三途の川の場所を訊き、本当にあるんだと少し驚いてから姉に逢える期待を込めて川へ向かうことを決意した。
なんでも先生が云うには三途の川に行くためには山の裏手にある中有の道という道を通らなければならないらしい。
当日、私は早朝から里を発ち山を大きく迂回をしながら歩き詰めた。教えられた中有の道に辿りついたのは日が高くなった頃、私はその場所でまず二つのことに驚いた。

まずひとつ。
霊にもただの幽霊と亡霊の二通りがいるらしい。
どう違うものかと私は思ったが、幽霊よりも亡霊のほうが特殊なのだそうだ。
そしてその幽霊が中有の道にたくさん居たのだ。居るのはいい、ここは三途の川へ向かう道。問題は見た目だ。驚くなかれ、私は驚いた。
行き交う幽霊の大半は白塗りのおたまじゃくしのような外見をしていたのだ。それこそ絵に描く人魂そのもの、安直過ぎる。
しかし、幽霊は自分の意思でその見た目を変えることができるらしい。中には人の姿を取っている足付きももちろん居るのだが、お

たまじゃくし型が多いのだ、何故だろう？
ひょっとすると幽霊の皆も“幽霊らしさ”に気を使っているのかもしれない。イメージ戦略とはさも重要なのだろう。
だが、個人的にはこればかりはもう少しくらい抽象的でも良かったのではないかと思い、安直な現実に私は緩慢にうなずくことしかできなかった。

そしてふたつ。
中有の道にあったのは行き交う幽霊達だけではなかった。
簡易なつくりのカウンターに暖簾を下げて、呼び声が飛び交う。夏の祭りで見ないことはないだろう縁日の“屋台行列”が道には並んでいたのだ。
何故、屋台行列があるのか？　この中有の道は三途の川への道程だ、つまり屋台行列は三途の川に行く霊たちが道中で楽しむものだという。
個人的にこういう祭事は嫌いではないが、いざ死のうというのに騒ぐのだろうか。
いや、彼らは死んだ後なのか。そう思うと陰鬱になる理由はどこにも無いのかもしれない。
これが本当の“後の祭”というものなのだろう。

そんな中有の道で皆が血気盛んに三途の川へ向かう雑踏の只中。
当の私は一軒の屋台の前に立ち、そのカウンター越しの店主にへの字口を見せつけているところだった。
「……だってそっちが云った値段じゃない」
突っ掛かるような私の言葉に店主である厳つい中年の男はやはり首を横に振って“お前さんの勘違いが悪い”と付け足した。
「饅頭ぽっちがこんな値段で売られてるわけないでしょ！」
足もない幽霊の雑踏を割るかのように、私の叫びが響いていた。

さてさて、事は少しばかり前になる。
中有の道に来た私は呆気に取られながら周囲を見やる。
並んでいるのは死んだ金魚掬い屋に人魂ボンボン屋、死後占いに遺書の掴み取りなどなど。まるで外の世界にあるブームに乗っただけのこじつけ商品のような露天だ。
そんな罰当たりな商売で賑わうとは、なんと生き生きとした死者達なのだろう。ひょっとすると自虐なのかツッコミを待っているのだろうか、関心を通り越して呆れそうだ。
だがそういった思慮の反面で私にも物珍しさはやはりある。
そもそも、こうも露天が並んでいると気が浮いてしまうだろう、あてられたと云ってもいい。銭の足りない私でもひとつ位何か買いたくなったのだ。
そんな衝動のまま目に留まった饅頭屋に駆け寄った。その良い匂いに期待を持ち私がいくらかと訊ねると屋台の店主は数字の頭だけを指で示すので私は勝手に値段を想像してふたつ下さいと云ったのだ。
出てきた饅頭は人の顔を模したものだった。キャラクター商売だろうか、紅白のリボンを付けているものと白黒の帽子を被ったものの二種類、特徴的だがどちらも小憎たらしい顔つきをしていた。元々の饅頭というのは“人の頭”を模して作ったと云う。そんな由縁に則るのはいいが、今時にこれは悪趣味だろう。
見上げると店の暖簾には“ゆっくり饅頭”という妙な銘が打ってある。どこかでみたかな。
珍妙な人面の饅頭を受け取ると、私は当然として代金を差し出す。
そこで問題が起きた。私の出した代金に店主は不服の顔を見せると零がひとつ足りないと、予想の十倍の金を要求してきたのだ。

まさかそんな馬鹿なと思うだろう、私も思う。
そんなこんなで私は饅頭屋の店主を前に引かず、媚びず、省みずに云いあっていた。
だが云いかかる私を相手に店主は厳つい面構えで小娘だと馬鹿にする目を向けてくる。そのデカイばかりの面に博麗の札を接発してやれたのならどれほど爽快だろうか。もしくは食い逃げでもいいから逃げてしまおうか。こういう商売にはびた一文払いたくも無いのが私の本音だ。
そういう気持ちが沸いてきた頃である。私の丁度横に誰かの気配が寄って来た。
「お待ちなさい。そこの饅頭屋、貴方は嘘を付きましたね」
凛とした声に振り返ると、小さな少女が立っていたのだ。私が何だと思う前に、現れた少女は店主に向かってキツい眼を向けた。
すると不思議なことが起こった。あれほどふてぶてしい顔をしていた店主が少女を前にした途端、明らかに動揺していたのだ。
「嘘を付きましたね？」
少女の念押すような問いかけに店主は視線も定めずに“いいや”と否定はしたがそれはそれは弱々しい否定だった。
「なら……」
少女は懐から手鏡を取り出してそれを男性に突きつける。
「貴方はこの鏡の前でも同じことが云えるものですか」
不思議なことに手鏡を前にした店主はうろたえ顔を引き攣らせると達者な口を開けようともしなかった。
あれはなにか特別な鏡なのだろうか。その効果覿面ぶりはまるで水戸の黄門様が持つ印籠だ。
店主の諦めたような様子に少女は感心していた私を横目で見ると眼差しを瞬きなおす。
「ですが――」
言葉を次いで、今度は私のほうを向くと少女の指が私の鼻頭を小突いた。

「貴方も不注意なのです」
それは、私よりもひとつ頭小さい身体で緑の髪に装飾を盛った帽子、ツンとつくった目付きの少女だった。

「お金を稼ぐということにもちろん罪はありません。しかしそこに生まれる欲ばかり追ってしまえばいずれ罪をつくるのです」
少女の慣れたような説教が通りに響く。私達の周囲の生きている通行人は目を配せはするが見ぬ振りだ、触らぬ神に祟りなしか、臭い者には蓋をするのか真意はどちらだろうか。そんな通行人も私もお構いなしに少女は言葉に言葉を数珠のように繋いで店主への説教を続けていた。
店主は店主で頭を下げる回数で許しがもらえるゲームのように低頭するばかり。少女を前に大の大人がへこへこと頭を下げて許しを乞うというそれは寒々しい光景だった。
少女の口から説教が流れるその間、私はその横で少女は何者だろうかと想像していた。少女相手にいい大人がヘコヘコとする奇妙な

光景は権力など外力による絶対的な上下を感じさせてくれる。
だから、少女がよほど偉い立場に居るのではないかと私は思ってみる。
縁日の出し物と云えば、そういう堅気の人間ではない方向の人のお仕事と聴くが真偽は定かじゃない。香具師というなら私も同属なのだろうが、私にはおっかない団体がバックに付いていたりはしない。そこのところの事情は詳しくないのだけれど。
ひょっとするなら屋台の店主は堅気ではなくて少女はそういう組の偉い人……なんてことは無いだろう。
なぜありえないのか？
幻想郷のことくらい私も少しは分かってきたつもりだ。そんな暴力的な組織はありえない、幻想郷でじゃれ合いはあれど角を突き合わす事は無い、遺恨も怨恨もここでは水のように流されてしまう。
きっと少女は嘘を見抜ける妖怪とかそういう類なのだろう。ここでは可愛い少女ほど妖怪変化だと思うのが正解なのだ。
少女は数分ほど説教をした後、最後に手に持った棒でペシンと店主を叩き叱りその手で何かを受け取っていた、離れて見るが封筒くらいの大きさの包みだった。
なんだろうかと気にしているうちに少女は饅頭を頬張る私の元へやってきた。これが意外なことに店主は不味いが饅頭は美味いので少し悔しかった。
「説教ご苦労様、ありがとうね。貴方が云ってくれなかったらまだ云い合ってたと思うわ」
「いいえ、あのような事は本来あってはなりません。私の監督不行届きでもあります」
「監督だなんて大げさね。ところでさ、さっきの何を受け取ったの？　封筒みたいなの」
「これですか、売り上げの徴収です」
「……」
私の笑顔が緩やかに端を落としてゆく。少女の答えは予想以上に

アウトなものだった。私の中で自然と先ほどのまさかの想像が蘇ってくる。
「えーっと、何で売り上げなんか貰ってるの……？」
「この辺りは私が管轄していますから。他の者にも徴収させてもいいのですが、キチンと出さない者も多いのです」
嗚呼、いやな予感が確定の方向に進んでいる。半信半疑に私は少女に質問を続けた。
「貴方ってやっぱり偉い立場なの？　辺りを仕切れるような……」
「一応そういうことになります。最近は三途の川の渡し賃では成り立たなくなってきたのでこうして足しにしているんですよ」
「あー……そ、そう三途の川を渡してあげるようなお仕事なんですか」
もうだめだ。幻想郷にもタマを取る取らないの抗争があるのだ。
グラサンとパンチパーマに匕首。ハラマキにダイナマイト。そんな絵に描いたような光景が脳裏に浮かび、口には苦笑いも浮かぶ。
「私は幻想郷を担当していますが、それに限って云うならば一番上になります」
「……一番上、ああ、うん。そうなんだ」
この少女はきっと頭首なのだ、若頭なのだ。
先ほどから手に持っている、なにやら達筆な筆文字の描かれた棒。意味も無く持っているわけではないだろう、恐らく仕込み杖とかそういう刃物っぽいものだ。
「貴方は、どうも私の名前は知らない様子ですね」
「え！？　ええ、最近幻想郷に着たばかりで……さっぱり」
「そうですか、私は“四季映姫・ヤマザナドゥ”です。貴方は？」
「え、詠です。道行　詠」
「詠ですか、良い名ですね。出店が目的にも見えません、他に何か用事でもある様子ですね」
「うん、用事というか観光とでも云えばいいのかな？」
「……観光は構いませんが、この先は三途の川しかありません。生

きた人間には縁のない場所です」
「それが、三途の川に用事があって……あ、いや別に死にたがりって訳じゃないのよ？　人探しをしているの」
「人探しですか……。まぁいいでしょう、私も仕事に戻るので川岸までなら案内してあげます」
人探しという単語に釈然としない様子でうなずいて映姫さんは私の横を歩きだした。
「あ、ありがとう。助かるわ」
ありがたいのは本当だ、建前ではない。声が上ずったのは、彼女に対する私の妄想がやたらに駆け巡っていたからだ……。

中有の道を抜けてしばらくすると賑やかな喧騒はどこへやら、生の境を終えたような静寂の中を白無垢の幽霊たちと共に道を進んでいく。
すると先の見えないほど大きな川が見えてくる。映姫さんの話によるとここがあの有名な三途の川らしい。
まだ昼間のはずだが川は深い霧に覆われており昼夜の区別が薄い、他にあるのは刺々しく突き出す岩と川原の石ばかり、川の水音はもとより物音すらしないそれは異世界だ。幽霊が多いからだろうか吸い込む空気が背筋に染みるような心地がする。
いかにもらしい三途の川なのだが。なんだここが三途の川かと思うと釈然としない気もある。
知らぬからと思っても知ってしまうとあっけのないもので、不気

味な川もなんだかどこかの遊園地のアトラクションのように見えてしまうのだ、先日の紅魔館もホラーハウスのようだといえばそうみえたかもしれない。もっとも、外のアトラクションは危険は薄いのだが……。

つまり、外の人間は自分が思うよりも幻想に慣れているではなかろうか。

最初は驚きはするが慣れてしまう。天があり地があり、知識の範疇のものがある。ただそれだけがずいぶんとした安心感をくれる。

それは幻想が想像の範疇だからなのだ。

私は前に八雲　紫の創るスキマの中を通ったことがあるがアレがいい例だ。あれは人智の及ばない何かだ、放心させられ、感性をゴッソリそぎ落とされるような衝撃があった。もしも私が宇宙に行ってもあれほどの衝撃はないだろう。

アレと比べればここはなんと安心の出来る三途の川だろうか。もしもこの幻想郷がスキマの中のような地だったのなら私はとっくに廃人だったろう。

「三途の川か……」

私もいつかこの川を渡るのだろうか。そんな感慨を込めてポツリと漏らす私を映姫さんは横目で鋭く射抜いた。

「さっき貴方は人探しと云っていましたが。もしや死人を探しているのではありませんか」

「え……？」

「ここは三途の川です。生者よりも死者の方が多いのですよ」

「あはは、それもそっか」

ちょっと考えれば誰でも想像がつく話だ。なにせ生きた人間を探すほうが難しそうな場所なのだから。

「なら……」

映姫さんは少し思案して懐から先ほど店主に見せた“手鏡”を取り出し、それを私に向けた。

鏡と向き合う私。その私には映姫さんの意図がさっぱり読めない、

自分の顔を見ろということだろうか？
「ふむ……貴方は少し過去に惹かれ過ぎる」
「過去って。んーまぁ、自覚はあるわよ。こだわっちゃう性格だと思うけど」
「分かっているのなら何故しないのです」
「我が儘だから？」
「それです。我侭も過ぎるのです。貴方は成長しなくてはいけない。充分に自分を見つめているのに何故“誰も”見ようとはしないのです」
「誰も？」
会って間もないというのに映姫さんは躊躇も間違いも無く私のことを云ってくる。何故こうもずばずばと迷い無く云えるんだろうか。目利きがあるという問題ではないだろう。もしやさっきの手鏡で占いでもしてくれているのだろうか。
「見てるわよホラ」
私が冗談めかして映姫さんの顔に鼻が付くほど顔寄せると、手に持った棒で頭を叩かれてしまった。
どうも、彼女と面と向かって話をすると私の虚実を白黒つけられそうで言葉を逸らしたくなる、何故だろうか。

それから話も有耶無耶に私たちは川沿いを歩き続けた。流石にここまでくると見渡す限り幽霊の白が見え、その霊気が私には冷気として届いている。
幽霊自身は見た目どおり温度も冷たく近くに居ると熱として活力を奪われてしまう。いや、私が失っているのだ、きっと幽霊に物理的に近づくと生きているものは物理的に死にも近づいてしまうのだろう。
珍しい場所が好きな私でさえあまり長居をしたいとは思わない。その中で映姫さんは何をみつけたのか、急に河原に視線を向けて立

ち止まると目じりを吊り上げた。
「やはり小町は、ああしていると思いました」
口にしたのは誰かの名前だろうか。横に立って視線を追うと一人の女性が河原に立って幽霊を相手に話をしていた。
「お知り合い？」
「私の部下です」
ため息混じりに歩み寄る映姫さんに私も後につく。
小町と呼ばれた赤髪の女性はひとりの幽霊を相手に何やら雑談をしている様子でこちらには気づいていない。
映姫さんはそのまま女性の後ろに立つと咎めるような声で云った。
「小町。一体何をしているんです」
「ああ、お帰りなさい映姫様。徴収のほうはどうでした？」
映姫さんの声に双肩を跳ね上げながらも、へらりとした顔で女性は振り返った。
「大方は素直に出しましたよ」
「屋台の奴等も映姫様直々に徴収されたら堪らないだろうに」
「小町に頼んだときはそれは酷い事、半分も集まりませんでしたからね」
短い赤髪、身長は私よりもひとつ頭大きくどこか気だるさを湛えた女性の風体が立派な着物を着流しのようにしている。
一見ではだらしのないように見えるその様がまた様になって似合っていた。
「なんだい？　ジロジロ見ないでおくれよ」
「い、いやぁ堅気じゃない人は風格があるなと思って」
「ずいぶんと失礼な子だねぇ」
「小町は堅気に仕事をする死神じゃあないでしょう？」
若頭から出た言葉に私は思わず唾を下す。“死神”だなんて仰々しい、一体何をしたらそんな呼ばれ方をするのだ。
「やっていますよ。いつものペースで、アタシは主体的に仕事をしているんですよ」

「仕事に主体などと云うものはありません、対外的にのみあるのです。主体的というのはサボっているだけなのよ」
「いやいや。今回は映姫様の送り迎えを優先した結果こうなったんですよ」
「そういうことではありません、貴方にとっての仕事というものが二つもありながら手を止める暇があ――」
角でも立てるように映姫さんが説教を始めると、その口にあわてて女性が割り込む。
「あー！　それでお前さんは何か用事でもあって来たのかい、見たところ三途の川にはまだ無縁そうだけども」
「私は、人探しを……ちょっと」
「人探しか、死人探しか？　名前はあるんだろう」
「えっと、詠です。道行　詠」
「詠か大層な名前だね。私は小野塚　小町だよ」
小町さんは私の手をとりぶんぶんと大きめに握手をしてくれた。
「生きた人間が来たのは久しぶりだ、死人に用事なんて酔狂な奴なら尚更だ。好きなだけ探すといい」
「ああ、それなんですけど。あんな魂だけだと私には区別も付かないし、閻魔様とか……そういう区別のできる人を先に探してみようと思ってるの」
私の言葉に小町さんだけではなく映姫さんまで飽きれたような顔をしていた。
予想はしていた。いくら幻想郷といっても閻魔様だ、私みたいなのではお目にかかれないような偉い人なのだろう。
もしくは幻想郷には閻魔様は居ないのだろう。そもそもメイドが云ったのも話の上の冗談だったのかも知れない、それなら尚更世迷いごとにしか聞こえないだろう。
だが二人の反応は私の否定的な予想に反したものだった。
「アンタ、私達の仕事なにか分かってるよね？」
「え。や……やくざ屋さん？」

二人は顔を見合わせてそれはそれは深いため息を吐いた。
なにか間違っていたのか。さっぱり分からない顔をする私に小町さんが苦笑をしながら答えてくれた。
「勘違いにもほどがあるよ。さっき話をしていただろう、私は死神をやっているんだ。といってもしがない渡し守だがね」
そう云って三途の川沿いに着けてある小さな船を指した。あれが三途の川の渡し舟だと云うらしい。
すると私の中でパチリと認識が切り替わる。まさか、抗争相手を三途の川先へ渡してやるようなお仕事ではなかったのか。
「死神って本物の？」
「偽者がいるのかい」
「ほら、二つ名かと思って……“死神小町”の異名を持つとか、語呂もいいじゃない」
「別に間違っちゃいないけどさ」
まさか本物の死神だとは。しかしよく見れば彼女は拉げた大鎌を肩に掛けているのだ。
「じゃあ、映姫さんは……」
「私が幻想郷の閻魔をしています」
「若頭じゃなかったの？」
「私がいつそんな自己紹介をしましたか」
「いやぁ何というか……私の早とちりだけれども、何と云うかイメージとあまりに違いすぎて」
厳つい赤鬼のような顔した閻魔大王をイメージしていたのにまさかこんな少女だったとは思わなかった。
小町さんはまだしも、映姫さんはこの容姿で閻魔は……云われた後でも少し納得しかねる。
「名乗ったでしょう。私の冠しているヤマザナドゥが役職を示しています」
「やまざなどぅ……あ、もしかしてヤマザナドゥって“ＹａｍａＸａｎａｄｕ．”なの」

ヤーマは閻魔であること、ザナドゥは楽園を示す。つまり彼女はヤーマザナドゥ、“楽園の閻魔様”という自己紹介をすでにしていたのだ。
てっきり小洒落てるだけの名前だと思っていた。
「じゃあ三途の川の渡し賃とか」
「比喩でもなんでもありません。小町のような死神達は船渡しをする時に賃金を貰っていますから」
「それが足りないの？」
「そうなんだよ最近は財政難でね。波も無い三途の川にも不況の波だけは立つみたいだよ。アタシとしては渡す船も新しくして欲しいよ」
「……止むを得なく、罪人達の審判を含めて店を出しています。私は先ほどその徴収をしていたというわけです」
「あーなるほど……合点がいったわ」
「誤解も解けたようですし、私が閻魔であることが分かって用事があるというのなら本題に移りましょう。私も暇ではありません」
「ああ、うん。お願い」
見もフタも無いというか切れ味が良すぎるというか、要領がいいのは嫌いではないけど歯車が合わない。私は映姫さんをどうにも苦手らしい。
「貴方の用事は先ほど、死んだ人間を探していると云いましたが」
「うん……姉を探しているの」
それから簡潔にだが私は姉についての事情を説明することにした。小町さんは酒の肴のように。映姫さんは戒気にしかしどこか哀れげに私の話を聞いてくれた。
私が話し終えると映姫さんは咳払いを一つした。
「事情は分かりました。貴方は幻想郷の外から来た云いましたね。昨今、閻魔は複数人居まして手分けをして死者を裁いているのが現状です、私の担当は幻想郷ですので、貴方の姉が幻想郷の外で亡くなられたなら私がそれを裁いたということはまずありません。手が

空けば幻想郷以外の死者も裁きますが、いずれにせよ私が判決を下した可能性は低いでしょう」
「そうだね。裁判なんて流れ作業なんだ、そもそも映姫様も覚えてらっしゃらないでしょう……“是非曲直庁”の方に直接訊いてみる何てのはどうだい、後は書記の死神に訊いてみるとか……」
「小町。余計なことを吹き込むのは止めなさい。確かに……記録は残っているかもしれませんがそれを洗うために時間を割くわけにはゆきません。もちろん部外者に公開するようなものでもありません」
上司に諭されて”仕方ないね”と小町さんは鼻でため息をついた。
「……だそうだよ。ま、何年も前に死んだって云うんだろう。死んだ後がとんとん拍子に進んでいたらとっくに転世してしまってるかもしれない」
「でも、もしかしたら居るかもしれないってことでしょ」
「駄々を云うねぇ。そもそも死人に逢えないのは当然だろう」
「だって……こんなところで当然だなんて云えないじゃない」
見回せば見回すだけ白無垢の幽霊たちが跋扈しているんだ。こんなに居るのなら、どこかに居るんじゃないだろうか。
もうここまで来てしまったのだ、それこそ三途の川の淵までも、当然じゃないのは此処のことだろう。
「大切な人に逢えないのは、悲しいし寂しいわよ。私だってそうよ、それがいけないなんて無いでしょう」
「いけないなんてことはないよ悲しいのは当然だ、ついでに死ぬなんてのも当然だ。それを特別視して云い訳をするのが生きてる奴だ。死者は弱い、枷になんか為るはずがないってのに枷にするのはいつも生者だ。下手をすればそれが冒涜にすらなるものだよ」
「そんなつもりじゃあない……。私が一方的なんだってことも分かってる」
「気持ちは分かるさ、云いたいこともね。だからってアタシは肯定できやしないよ。三途の川の渡し守には無茶ってもんだ」
彼女の言葉は間違っていない。そうだ分かってる。私が馬鹿なだ

けだ。
それなら如何すればいいんだろう、胸を突き上げるようなこの気持ちと憤りを。
逢えるのなら、逢えるのなら。アレをしてもいいコレをしても構わない。そんな危うい想いが胸の内で膨れ上がっている。
理性の内側で肥大化した想いは思考と同化して離れるようなものではない。慈しむべき切なる想いとは麻薬のようなものだ。
「でも……だけど……」
「彼岸花は此岸に咲いている。それを知ってから死を想うことだ、そうじゃあないと死に惑うことになる」
僅かな期待から縋った希望に肩透かしをされたのだ。弱る思考、続かない無為な単語ばかりが口を突く。
麻薬や煙草だけが肉体的に顕著だが、娯楽や他人に人は際限なく依存する適応する。それが無くては成らなくなる。
何かに“依存”をするということは弱さなのだろうか。私は姉が居なくては何も出来ない不出来な妹。紅魔館で会った妹ちゃんの顔が浮かんで情けなさが湧き上がる。
私は弱い私自身に姉を捨てろというのだろうか。だが内心の想いが理屈などと開き直ろうともする。
思慮と狼狽が胸中に溜まる私をどう思うのか、小町さんは訝しげに私の顔を覗き込んだ。
「お前さんは姉が死んだときに泣いたのかい？」
「……泣いてなんかいないわ。泣かないって決めたもの」
その言葉だけで弱った心中をかき混ぜられるような気分だった。そうだ、一年前の時と似ている。私の弱さを直に見られているような気持ちだ。
だが違う、私は強くなろうとしてきたじゃないか。泣いてなどたまるものか。私はいつも泣かなかった、私は泣かないと決めたのだから。
「……」

「駄々なんかこねてごめん。話だけでも聞いてくれてありがとう……」
どうすればいいのだろう。薄慮のままそれはキチンと言葉にも成らず。私は二人に礼と頭を垂れると、視線も合わさずに踵を返して私は駆けていた。

少女が二人に頭を垂れて駆けていった後、映姫と小町の二人は並んで少女の背中を眺めていた。
「難しい年頃だ。ああいう問いかけは間違ってはいないんだけれども……ね」
「あの問いこそ、問うこそがあまりに歪」
「まぁ、あたしはあの子の姉が“見つからない”ように願いましょう」
「意地の悪いことです」
「そうですかね？　しかし、そう仰られる映姫様は優しいお方だ」
「小町。もしや、あの子の姉の事でも知っているような口を利きますね」
「さて、知っても知らずも私の言葉は一つですから」
小町はその拉げた大鎌を担ぎなおして、小さく呟いた。
「君、死に惑うことなかれ。ってね」

九話　桜の花におもえずおもい後の世を咽び詠い待ち人なき世なりせば（前書き

あらすじ

死んだ姉を探すため、私が向かった先は三途の川だった。
その道中で中有の道で少女と知り合い、共に三途の川へと向かった。
そして三途の川で少女の知り合いであろう女性と出会った。

少女の名は四季映姫・ヤマザナドゥ
女性の名は小野塚小町

彼等は意外なことに閻魔様と死神の二人だった。

思いがけない出会いに私は二人に姉を探したいのだと懇願するが
死者には逢えないのだと、当然の叱咤を受けた。
しかし、それでも納得には至らず。私はその場から逃げるように
立ち去ってしまったのだ。

そして……

九話　桜の花におもえずおもい後の世を咽び詠い待ち人なき世なりせば

ここは何処なのだろうか。
そう疑問に思ったのは無思慮に歩く道が途絶えたからだった。
三途の川での会話は良く覚えていた。閻魔様と死神に当然のことを諭されて、私はその場から逃げ出したのだ。
それから途方にくれながら、意識を内に向けたまま歩いていた。どういう道を辿ったのか、どれくらい歩いたのかも覚えていない。
「階段……？」
ただ、私の真正面には長い長い階段があったのだ。どこに続いているのかは分からない。辺りを見渡せば多くの幽霊が漂っており、三途の川からそう遠い場所には思えない。
そういえばと私が住んでいた町、外の世界の神社に長い長い階段があったのを思い出す、だがここは違う。その階段に、幽霊から感じる肌寒さが相まって私にはそれがまるで天国への階段のようにも見えた。
上には何があるのだろうか。普段であれば面白そうだと興味本位に上るところだが、今ばかりはそんな気持ちになれない。里に帰ろう。こんなところにいても仕方が無い、幽霊に囲まれて気が滅入るばかりだ。
「……」
そう思い、踵を返して振り返るがそこは見たことの無い景色が広がっている。確かめるように周囲を見回しても、記憶にある景色はない。
来た方向は分かるから闇雲に戻ろうかとも思ったが、また迷うかもしれないと考えるとため息が漏れそうだった。
「上ろう……かな？」
これだけに長い階段だ。上から見下ろせば地形が把握できるかも

しれない。
ついでに誰かが居れば道を聞けるかもしれない。だが、今はあまり他人に会いたくないのも本音だった。
そうして弱気に迷っている私の背中に声が掛かった。
「なにをしているんですか？」
「ん？」
声を掛けられた方へ視線を移すと、一人の少女がそこに立っていた。
少女は小柄で私よりも背が低かった。短い白髪に黒いリボンを結び、緑色の服には仰々しく二本の刀が腰に背中にと帯刀してある。
奇天烈な容姿から人間でないことくらいはすぐに察しがついた。そして少女の手には籠があり、中にわらびやぜんまいなどの山菜が覗いていた。
「ちょっとね、ここは何処かなーって思ってたの」
「ここは白玉楼の階段です。何か用事ですか？」
「白玉楼？」
その名前は私の耳には聞いたことのないものだった。
「見かけない人ですけど。酔っ払っているんですか？」
「なんで？」
「花見をしに来たんじゃないんですか？　さすがにまだ咲いていませんけれど」
「ん？」
お互いに疑問符の応酬で、返すたびに混濁が深まる。
しかし、茶化されている様子は無い。疑問を湛える少女のくりっとした瞳がまるで美鈴の瞳と似ている。つまる馬鹿正直の瞳だ。
外見と実年齢の齟齬が激しい幻想郷に居るにしては、可愛げのある無垢な瞳が外見の年齢相応に見えた。
聞いた話だが、先日相対したあの小さな吸血鬼など五百年は生きているらしい。私はそんな馬鹿なと云ったが、それを教えてくれた霖之助さんも半妖で人間以上に長生きだと云われて返す言葉に困

ったものだ。
「えーと、まったまった。私はちょっと考え事してフラフラしていたらここに着いちゃったのよ」
「ふらふらとこんなところにたどり着きませんよ」
「それで、貴方はここの人？」
指で階段の先を示すと少女は迷いも無くこくりと頷いた。
「そうです」
「なら、丁度よかった。私ちょっと人里に帰りたいんだけど、道を教えて貰えないかな？」
「えー？　私はたった今帰ったんですよ、案内なんてできませんってば」
「ちょっとくらい……駄目？」
「夕飯の下ごしらえがあるんだから駄目です」
ぷいっと顔を背けた少女は私を放ってそのまま、階段を上り始めてしまった。
そして少女の後ろに続くように、一際大きな幽霊が横から現れて階段を上りだした。特筆したのにも訳がある。その異様な大きさだ、三途の川で散々見たつもりだが、その中でも見たことが無いほどだ。
あの幽霊は何なのだろうかと、私が呆気にとられているうちに少女はどんどん階段を上っていってしまう。
「ちょ、ちょっと待ってよ。私、迷子なんだってば」
流石に自分の位置も分からないまま彷徨うわけにもいかない。私はそのまま女の子の後を追って階段を上っていった。

階段を足早に駆け、少女に追いつき並ぶとやはり怪訝な顔が返ってくる。
「付いてきても案内はしませんよ」

「上ってから見下ろすのよ、知っている場所が見えるかもしれないでしょう」
「見えないかもしれません」
「そうなったら困っちゃうわね」
「もー……上で適当に道を知っていそうな幽霊を見繕って案内させますから。早く帰ってくださいね」
「幽霊の案内？」
あの世に案内されたりしないだろうか。いや、三途の川に案内して貰えたら道は分かるから逆に都合がいいのか。
「ところで、貴方の名前は？　私は詠よ、道行詠。お見知りおきってね」
「私は――」
少女が返そうとしたところで私はあえてそれを制止した。
「ああ、待って。ずばり云い当ててあげる」
閻魔様の時に盛大な勘違いをしたことに、私の負けず嫌いが立って出る。
今度はヤクザなどと突飛な間違いはしない。大方の予想もついている。先ほど少女の後をついていた大きな幽霊、それを従えるようにしていたということは。
「んー、そう貴方は幽霊使い？」
「違いますよー、前にもそんなことを云われましたけど……」
「前にも？」
「森と里の間にあるお店です。あの時ばかりはあんまりいい思い出がないです」
「ああ、あそこ？」
香霖堂に行ったことがあるらしい。霖之助さんのことだ、無垢な少女が相手だからと言葉巧みにたぶらかしたに違いない。
「じゃあ、メイドか半人半妖、ハクタクとか？」
「メイドはともかくハクタクではありません」
髪の毛が白っぽいのも共通点にはならないらしい。

「でも、どちらも半分くらい当たりです」
「半分くらい？」
「私は、白玉楼の庭師をしています。名前は魂魄　妖夢」
「庭師……ねぇ」
あどけない少女が庭師。まぁ今まで見てきた妖怪変化よりはまだ納得がいきそうだ。もっとも、大仰な刀を持っていなければの話だが。
察するに使用人という意味で半分メイドが当たりなのだろう。
「じゃあもう半分の正解は？」
「私は半人半霊なんです」
「はん？」
「半霊です」
云いながら彼女が後ろを指すと先ほどの大きな幽霊がちゃっかり彼女の後ろに付いていた。
「それが半分？」
「半分です」

「なによこれ……」
階段を上りきった私の漏らした言葉に、横の庭師がわずかに自慢げな顔をしていた。
“白玉楼”それは私の大方の予想の通り、建物を称した名前だったが私もそれが庭付きの広大な屋敷だという予想はしていなかった。
中庭であろう方に眼を向ければ玉砂利を敷いた枯山水の庭、辺りには咲くには早い桜の木が視界の限りに見える。
紅魔館も見事だったが、これはこれは見事なまでに対照的だ。あ

ちらが洋風ならこちらは純和風。しかし紅魔館のようにきつい色使いはしていない。
「って、感心してる場合じゃなかった」
圧巻されながら私は本来の目的を思い出して背中を振り返ることにした。階段から見下ろしてどこか知った場所を探さねば。
「……おかしいなぁ」
だが階段から見下ろし、眼下に広がるその風景にまるで見覚えが無い。それどころか幻想郷なのかどうかが怪しくなるほど景色が違う。
「ここ幻想郷よね？」
「いいえ、違います。ここは冥界ですよ、幽明結界が緩いので幻想郷とは地続きですけど。ここは死んだ者が転世を待つ場所です」
「冥界で転世……？」
ここが冥界というのは置いておこう。三途の川帰りに何を今さら驚くほどではない。私の引っかかったのはその次だ。
死者が転世。庭師の口から出た言葉に私の心がぐらりと揺れ動くのが自分でも分かった。
「転世を待つ場所ってことは、ここに居る幽霊がそうなの？」
「はい、そうですよ」
その肯定に、まるでゼンマイを巻かれたおもちゃのように盲目的に私の足は前に出た。
「ねぇ、ちょっとだけでいいんだけど。見学してもいい？」
「ほへ？　あ……ちょ、ちょっと勝手に入らないでくださいよ！」
答えを待たず、不躾に私は表から中庭の方に回り込む、そんな私に慌てた庭師が追いすがって服のすそを引っ張り上げた。
「勝手に歩き回らないでって……！」
「ちょっとだけなんだから、いいじゃないの」
「よくないですよぉー」
そんな云い合いをしていると、不意に横から声が割って入った。
「あら、お客様かしら」

屋敷から庭の見える縁側に線の細そうな女性が立っていた。
「幽々子様！？」
女性の姿に庭師が跳ねるように驚いて、私の横でいそいそと体裁を取り繕う。
その様子に私は何事かと肘で庭師のわき腹を突きながら小声でささやいた。
「誰？」
「幽々子様です。白玉楼のお嬢様ですよ」
「この人が？」
女性は温和そうな顔で僅かに興味深そうに、私と庭師の顔を眺めている。
薄桃色の髪に水色と桃色を合わせた服装。　温和そうな物腰に、渦巻きの模様が描かれた帽子を被っている。
「妖夢、お客様を通すなら庭じゃあないわ」
「違います。お客様ではありません、この人が下から付いて来たんです」
「あらそうなの？」
問いかけるように視線を向けてくる女性に、私は素直に頷いた。
「付いてこさせてもらいました。里までの道を教えてもらいたくって」
「道も分からないのに此処に来たの？」
「ちょとした迷子で」
「迷子ね。妖夢、山菜を取ってきてとはお願いしたけれど、迷子はお願いしていないわ」
「付いてきたんですってば。山菜のほうはこのとおり集めて来ました」
庭師はその籠に入った山菜の山を見せると、女性はよしよしと頷いた。
「沢山取れたわね。さぁ妖夢、昼食はまだかしら」
「昼食でしたら私が出かける前、さっき食べましたよ」

「……」
女性は庭師の言葉に視線を逸らしてからもう一度戻す。
「夕食はまだかしら」
「日が暮れるころには用意します」
「明日の朝食が待ち遠しいわ」
「そうなのですか？」
「だからまずはお茶を入れてきて頂戴、そこのお客様の分もね」
「は、はい。用意してきます」
脈絡の欠片も感じられない会話に押し切られて、庭師はそのまま玄関の方へといそいそ駆けていった。
残された私は居所が悪いので女性の方へ歩み寄ってみる。
「おかしな人ね、大丈夫？」
「なにもおかしなことなんかないわ」
訝しげな私の顔に満足そうな顔をする女性。捉えどころがないというか、雲か幽霊を掴むような気分にさせてくれる人だ。
「西行寺　幽々子よ、貴方のお名前は？」
自己紹介に名前と共に差し出された手に私も丁寧に握手を返す。
「詠よ、道行詠。お見知りおきってね」
「それじゃあ詠。少しお話をしましょう、妖夢がお茶をいれてくれるわ」
女性は縁側に腰を下ろすとその脇を叩いて示した。座れというらしい。
「旅人なもんだから。話題は山ほどあるけれど？」
「こんなところにまで来て迷う人は、面白い話のひとつもあるものだわ」
笑顔を向ける彼女の聞きたい話はどうやら旅の冒険譚のようなものではないらしい。
彼女に並ぶように縁側に腰をかける。ひとしきり悩んだ後に、私はつぶやくように口を開いた。
「……小さいころに、姉が死んでね。ずるずるとこんな所まで来た

のよ」
姉を語る私の口も、もはや自嘲気味になってしまっていた。

「なるほど。それで三途の川から此処まで遥々やってきたのね」
一通りの出来事を話し終えて、事情を把握した女性は納得した様子で頷いた。
「ええ。でも、どうしたらいいのかよく分からなくなっちゃった」
「あら、庭を物色しようとしていたじゃないの」
云われて言葉が詰まる。そりゃそうだ、私が押し入った理由くらい察しがつくだろう。
「そうよ、どうせ未練がましいわよ。あなたはここの主ならお姉ちゃんに会わなかった？」
「会ったわよ」
「え？」
その言葉に過剰に反応した私は前傾に身を乗り出す。
「貴方のお姉さんから伝言があるわ」
「お姉ちゃんがここに来たの？」
「来たわよ。妹を心配して“ごめんなさいね”と云っていたもの」
そこまで彼女が喋ってようやく私は茶化されていることに気がついた。
「……嘘ばっかり」

「ばれたかしら」
それが、あまりに取って付けたような口調で云うのだ。だがおかげで私がよほど重症なのだと自覚する。
「幽々子様、お茶をお持ちしました」
私が額に手をあて自己反省していると、丁度よく庭師がお茶を盆に載せて持ってきてくれた。
「お二人で何を話されているのですか？」
「この子の悩み相談をしていたの」
女性の言葉に庭師がぱちくりと目をしばたかせると、お茶を手渡しながら私に提案をしてきた。
「悩みですか。悩み事でしたらいい方法がありますよ」
「妙案でもあるって顔ね」
「ええ、これです」
云うと平気な顔でその腰に据えられた短い方の刀を抜いて見せてくる。
「白楼剣は人の迷いを断ち切ります。これでお切りしましょう」
その手入れの行き届いた刃が眼前に向けられ、鈍く光ると無言で私を威嚇した。
「……迷いついでに命も断ち切れそうだから遠慮するわ」
太股にナイフを並べている私が云うのも何だが、女の子が抜き身の刃物を持っている様は異様だ。もちろん包丁は除いて。
「そうですか。では幽々子様、私は庭の手入れをしてきますので」
「ご苦労様」
一礼して場を後にする庭師の後を、やはり半霊と思しき大きな幽霊がその後に続く。私はその様子を見送りながら女性に問いかける。
「あの子、半人半霊って云ってたけれど……ひょっとしてあなたもそうなの？」
「いいえ。私はただの亡霊よ」
「亡霊……？」
私が訝しげに見る女性の容姿は見る限りではそう人間と違いは無

い、見た目ではさっぱり分からないくらいだ。ちなみに足だってきちんとある。
三途の川に行く前、霖之助さんに聞いた話によれば亡霊というのは幽霊の中でも死んだことに気づいていないか、死を認められない魂が成りうるらしい。彼女はどちらだろうか、また別の止ん事無き理由でもあるのだろうか。
それから、しばらくお茶を堪能したところで、亡霊さんは思い出したように立ち上がり、その手をぽんと叩いた。
「貴方にいいものを見せてあげるわ」
「いいもの？　変なものじゃないわよね」
「こちらにいらっしゃい」
誘う様に庭に出た亡霊さんに私もあとから続く。
見えていた庭よりもさらに奥の方へ、数多の桜の木、広い庭を歩いてしばらく行くと、一際大きな桜の大木が見えてくる。巨大なそれは周囲の桜がまるで小枝に見えてしまうほど大きな大きな化け物桜だ。
亡霊さんはそのまま大木の前にまで歩いてゆき、その歩を止めた。
「大きいでしょう？」
「とっても、こんなの見たこと無いわ」
「この桜は“西行妖”という桜よ。白玉楼でも一番大きな桜の木なの」
これが“いいもの”なのだろうか。確かに千年以上は過ぎて居そうな長大な樹齢を感じさせ、枝を見るのに見上げなくてはいけないほどの桜だ。外ではそうお目に掛かれないだろう。
しかし、何だろうかこの違和感は。
「……？」
違和感を探るようにしげしげと眺めていると、唐突に私の背筋をぞわぞわとした何かが抜けていった。
その大木の大きさに圧倒されたというわけではない、枯れたこの木が春になったらどうなるのかと満開の様を想像して恐怖したのだ。

これはただの桜ではない、樹木の内から妖艶で禍々しいものを感じる反面、それが発露しないという安心感も感じられる。
それはまるで檻の中の獣を見ているような気持ちだ。
「どうかしたの？」
「何か……結界のようなものが」
「あるのかもしれない。この桜は花を咲かさないのだもの」
「これから春なのに？」
「ええ、春になってもこの西行妖は花を咲かせたことはないの」
これだけ大きな桜なのにもったいない、咲けば壮観なのは違いないだろう。だが、反面で咲くべきではないだろうと理由も分からず思ってしまう私は捻くれているのだろうか。
「咲かない桜は異様ね。けれども逆に万年桜のように散らない桜があったらそれも異様だわ」
意味深に話をつなげる亡霊さんが優しげに笑った。
「桜の花は、散るからこそ美しいのよ」
「けど、散っていく桜をみるのは物悲しいじゃない……」
「花さか爺さんという話を知ってる？」
「知っているわ」
長年愛した愛犬を隣人に殺され、犬の供養に植えた木から作った臼も燃やされて、嘆いた老夫婦が臼の灰を桜に撒いてみごとな桜の花を咲かせる。そんな物語だ。
「死の灰を撒くほどに花が咲くというのは輪廻を暗示させるでしょう」
「ならいっそ、この桜に灰でも撒いてみる？」
私の提案に亡霊さんはクスリと笑って言葉を続ける。
「けれども、大切なのはおじいさんは花が咲くからと灰を撒いたわけではないことよ」
私の聞き及んでいる話では、夢で犬が撒いてくれと頼んだから灰を撒いたのだ。話によって違いはあれど犬の供養をしたかったことは確かだろう。それは花のためではない。

「“後日”と“前日”という言葉があるわ。これは“後日は未来”“前日は過去”を指す言葉。おかしいでしょう、未来を後ろと呼んで過去を前と指すなんて」
亡霊さんは扇子を取り出すとソレをまっすぐ、前へと伸ばして見せた。
「イメージしてみなさい、一本の道をあるく自分を。貴方は過去から未来へと歩いていく、でもソレは後ろ歩きなの。誰も皆が“過去を見つめながら未来を想う”ものよ。誰も皆が“後ろ歩きに人生を歩いている”、どうしても人に未来は分からない、頭の後ろに眼は付いていないのだから、前を過去を見つめることしかできない。それでも貴方は過去を想いながら未来を見つめたいのでしょう」
小気味よく扇子を閉じて、その先を次は私の眼へと向ける。
「そんな眼で未来すら見通そうとする。そんなだから、貴方は今夜の夕食のことすら頭にないのよ」
その指摘に彼女が庭師に云っていた言葉を思い出す。
夕食を楽しみにし、明日に何が起きるのだろうと思い描く、その当然が欠落していると彼女は云うのだ。
「私があさっての方向を見てるって云うの……」
「認められないのでしょう。お姉さんの死を」
「そうね……そうかもしれない」
認められるものか。いいや、条件が良すぎたのだ。
ある日唐突に居なくなり、死んだとだけ告げられて。葬式もせずに、まるで消えるように姉は死んだのだ。
そんなものに死別の実感なんかあるわけがない。
言葉の上では認めてる。でも、それ以上に私が認められない。
姉は死んでなど居ないのかもしれない、きっとどこか遠いところで生きているのではないだろうか。

そんな妄想を私は心の内に根付かせていたのだ。
もう、泣かないと。孤独であっても強くあれば、きっと姉が迎えに来てくれる。
いつか風のように私の前に現れて、私をさらってくれる。そうやって、姉を愛するほどに現実を憎んでいた。

私にとって、姉は幻想の象徴だった。
姉の見せる種も無い手品が、私の現実を否定していた。幻想を在るものとしてこんなにも私を取り巻く現実は不確かなものだったのかと。
死体も残らないその不自然な死では、姉という幻想への焦がれを断ち切るには不十分だった。
普通であれば幼子の頃に自覚し、己の中に在るべき“現実と幻想の境界”が私の中ではあやふやだったのだ。

故に、“現実と幻想”は私の中で“幻実と現想”という歪な形を持っていた。

故に、私はまどろむ夕日を愛したのだ。

「けれども、あなたは死者でしょう、亡霊なんでしょう」
そう云う彼女はどうなのだ。亡霊になるのは死に気づかない者ないし、死を否定する者。それで、彼女には死の自覚があるのなら。
「なら、家族に逢いたいとか。そういう未練はないの……？」
「私に生前の記憶はないの」
その何気ない一言に、私はまるで憑き物を落とされたような気持ちになった。
自分の死も認め、生前への執着も無いのなら彼女はどうして亡霊

なのだろうか、そんな疑問はなかった。
「私はなぜ亡霊になったのかしら。そんな問いかけと好奇心しか残ってはいないわ」
彼女の言葉に、もしかしたら姉も私のことを忘れてしまっているのではないか、もう転世をして別の人生を歩んでいるのではないかと。
まるで能天気に生前を否定する彼女の言葉が、姉の言葉のように思えたのだ。
もう、逢えないのだ。彼女は死んでしまった。納得をしかける私の心は請うように最後に言葉を欲していた。
「ねぇ、もうひとつだけ教えて」
ゆっくりと亡霊さんは頷いてくれる。
「もしもあの子が、妖夢がアナタの元から居なくなってしまったらアナタはどうするの」
「……」
私の不躾な質問に彼女はわずかに瞳を閉じただけ、何も語らなかった。
そして、その沈黙こそが私にとって何よりの言葉だった。
「そう……ありがとう」
沈黙。ただそれだけが、あまりに確かで。まるで和紙に零した墨汁のように、死という現実が私の身体を浸していった。
そしてそのまま、西行妖を見つめ、何にも抗わぬままに私は涙を零していた。
静かに、静かに。
止まらない涙を流した。
流し続けた。

幽々子さんの腕が私を抱きとめて、頭をなでてくれた。
私はその優しさの中、彼女の腕の中でただ泣いていた。
死を悼むように、静かに、静かに。

――ほとけには桜の花をたてまつれ我が後の世を人とぶらはば

――桜の花におもえずおもい後の世を咽び詠い待ち人なき世なりせば

（桜の花を供えても待ち続ける貴方はいないのだから。言葉で飾って泣くことしか私にはできません）

日は傾き、夕日が沈み始めたころ、私は白玉楼の本殿前で二人の見送りを受けていた。

先ほど、日暮れだからと幽々子さんが夕飯に誘ってくれたがあまり世話なっても申し訳ない。私は里に帰るとその誘いを断わった。

「どうもありがとう、お世話になったわ」

二人を前に一礼する私、その顔が気になるらしい庭師の視線が私の目を見ていた。

「詠さん。眼が真っ赤ですよ」

指摘をされて目尻を拭うと泣き過ぎで少し目元が傷んだ。

「私ね、姉が死んでからというもの、一度たりとも泣いてなかったのよ」

庭師はキョトンとした顔をする。事情を把握していないのだから当然だが、私はそれでも言葉を続ける。
「だから、今日は今までの分たくさん泣いたわ、おかげさまでスッキリしたし。それに、私は帰って今日の夕飯の心配をしないとね」
「ひょっとして、貧乏なんですか？」
「……う～ん間違ってはないかな」
苦笑いで返す私に庭師はそれこそ本当に心配そうな面持ちをして云うのだ。きっと素直で愚直な子なのだろう。
「でしたら、何か作り置いている物でよければ差し上げますよ」
そう云って玄関から中へ戻ろうとする庭師を止めたのは亡霊さんだった。
「どこにいくの妖夢。“お見送りはきちんとしないと”いけないわ」
「あ、はい」
亡霊さんの言葉に素直に従う反面、少し申し訳なさそうにする庭師が可愛らしい。
「貧乏ではあるけどね食べるものには困ってないから大丈夫」
「そうなのですか。失礼しました」

「じゃあ“またね”」

私が手を振ると、庭師は丁寧に、亡霊さんは控えめに手を振ってくれた。

「幽々子さま。彼女の尋ね人は見つかったんですか？」
「お姉さん？　結局見つからなかったみたいね」
「じゃあ、詠さんはそれで泣いていたのですね……」
沈痛を表情にして妖夢は旅人の背中を視線で追うが、その横で幽々子は“ちょっと違うわ”と返す。
「泣いても悲しんでも、誰も帰ってはこない。だからと分かっても。それでも、悲しめない心などありはしないのよ」

帰り道、ふと空を見上げると薄明かりの中に一番星が見えた。
死んだ人は星になるのだという言葉がある。
そんなものは嘘だ。
今まで、この世で人が生きどれほど亡くなっていったのだろうか。
その数ほどの残された人々は皆この悲しみを乗り越えたのだろうか。

その別れは星の数ほど、いいや星の数も足りなくなってしまう。
そんなにもの数多の星が夜に瞬いたのなら雨夜すら昼間よりも眩く照らしてしまうだろう。

日は沈み、夜の闇に満たされた幻想郷。
まだ春には早いが冬も終わりを告げようとしている。その日は比較的暖かく、僕はストーブを点けずに過ごしていた。
もうじき春になる。そうすればストーブの燃料に困窮せずに済むのは素直にありがたい、燃料のために妖怪の世話にならずに済むのだから。
すっかり暗くなり、夜はその日の出来事を書いて過ごそうと僕は思っていたのだが……その予定は残念ながら叶いそうになかった。
日が沈んだ頃に外来の旅人がやってきたのだ。彼女は何を買うでもなくそのまま居座り、妙に上機嫌のまま旅路の話を僕に聞かせてくれた。もちろん僕の都合はお構いなしだ。
「それでね。白玉楼っていうところで大きな桜の木を見てきたの、西行妖って云って本当に大きいんだから」
手を広げて大げさに話す彼女の顔は今までに見たことが無いくらい上機嫌だ。とはいえ、彼女が僕の店にやってくる時は何かしら困った時が多いのだから当然かもしれない。
今回は、数日前に行きたいからと話していた三途の川まで行った帰りらしい。彼女の話は妖怪退治から紅魔館での出来事、三途の川へ行き冥界のお屋敷にまで広がっていた。
「それで、桜の木を見て帰ってきたわけだ。その様子だと、君の云っていたお姉さんのことには踏ん切りがついたみたいだね」
「んーまぁね」
道行詠と名乗る彼女は幻想郷に来てから姉を探していた。それがただの人探しならよかったのだが、死んだ姉だというのだ。
死んだ人間には会えないのは当然だ、死んだ人間に再会するなんてことをしたら当然それに見合った不幸がある、しっぺ返しがあるのだ。
そんな道理に外れた彼女の行動を僕が諭してもよかったのだが。詠は僕が言ったくらいで聞く耳をもつような子ではなかった。それがすっかり未練は無くなった様子で僕も安心した。

「さて、気が済んだのならそろそろ帰ってもらえないかな」
話し終えて気分上場なのだろう、話を終えた次は窓の外の星を眺めはじめていた。
「まぁまぁ。ところで霖之助さんはもう夕飯食べちゃった？」
「もう済ませたよ。まさか、君は他人の夕飯をつまみに来たとか言うんじゃないだろうな」
「ははっ……そんなわけないわよ」
逃げるように視線を星空へと逸らした、それにずいぶんと間のある返答だ。図星なのは間違いないだろう。
お金が無いからと商品の交換は構わないが、いくら僕でも食べ物まで恵んであげる義理は無い。
「あれ……？　ねぇ、霖之助さん。星がいきなり現れるなんてこと普通ないわよね」
いきなり何を言い出すのだろうか。夕飯の話はもういいらしい。
「星がいきなり？　雲で隠れていたんじゃないのかい」
「雲なんかないわよ。ひょっとして誰かが亡くなってお星様になったのかしらね」
よほど浮かれているらしい、普段の彼女ならこんなことは言わない。
僕は無垢な瞳で星を眺める彼女の横に立って、視線を追ってみることにした。
「どの星だい」
「あそこよほら」
彼女の指し示す先を見て、僕は首をかしげた。
「詠。君は何を見ているんだい」
「なにって？　ほらあそこにある星、大きく光ってるじゃない」
「まさか」
振り返って彼女の瞳を見返して交互に見やると、その予感が確かなものだと分かった。彼女の肩に手をかけてこちらを向かせる。正面からその顔と見詰め合う。

「ちょ、ちょっと。どうしたの」
やっぱりだ。
「紅い」
彼女の眼の色が異常なまでに紅いのだ。
「昼間にちょっとね、沢山泣いたからそうなのよ」
彼女は自覚しているのだろうか。誤魔化すようにいうけれど、その眼は人間の眼の紅さではない。
「おかしいと思っていたんだ。君に聞いた話で君は紅魔館のメイドが“時を止めていた”と云っていたね。何故そんなことが分かったんだい？」
「何故って……いや、違うかもしれない。でも止まった空間で彼女が平気で動くのよ」
「そうじゃない。何故、君はその事がわかったんだい。」
確かにあのメイドは時間を止めることができる。僕も一度体験したことがあるが、それは気づけるようなものじゃない。
「三人組の妖精が居たと君は云ったね。あの妖精のひとりは光を屈折させて物を見えなくすることが出来るのに。それを君は見つけた」
「隠れ忘れてたんでしょ妖精ってうっかり者じゃない」
「それと妖怪退治の話では、二度目に会ったときに“闇を纏っていた少女がきょろきょろしていた”と云ったね。何故、闇を纏っている中の様子が分かったんだい」
「……」
彼女の顔が不安に曇り始める。異変の自覚は無かったらしい。恐らく自分の変化を無警戒に見過ごしていたのだろう。
「初めてこの店に来たとき君の眼は紅の色をしていたんだ。ここではそう珍しいものじゃないから気にしていなかったけれど……。手鏡がある。見てみるといい」
複雑な表情をする詠に僕は机にあった手鏡を渡す。
彼女の瞳はまるで妖怪の眼のように異様な紅さを持っている。僕が見た限り人間らしい黒色と異様な紅色の二色に変化している。い

つも気のせいかもしれないと見過ごしてきたが今ので確信を得られた。
「その紅い紅い瞳が原因だろうね。仕組みは分からないが普通じゃないのは確かだろう」
「気味の悪いこと云わないでよ。私の眼は霖之助さんの髪も顔も、青と黒の服もちゃんと見てるし変なことなんか何もない」
「詠。君がさっき指した星があったね。大きく光っている。でも、あそこに星なんか無い。ただ黒い空があるだけだ」
僕は先の彼女の視線に倣うように空を指した。だが、もちろんそこに星なんか無い。なにもありはしないのだ。
「嘘。だって、見えないの！？」
驚く彼女の視線は確かに空を見つめている。無為に虚空を見つめるのではなく、何かを見つめている。何かが彼女には視えているのだ。
「だから訊いたんだ。詠、君は何を視ているんだい？」
「何よ。そんな云い方、人が妖怪にでもなったみたいじゃない」
「けれども、君の身に何かが起きているのは確かだ」
「違うっていってるじゃないっ！」
怯え気味に癇癪を起こしてしまった。彼女は人間だ、更に言えば幻想郷の住人でもないのだ。脅かすつもりは無かったが少し言い過ぎてしまったようだ。
彼女にとってもはたから妖怪を見るだけなら物珍しかったのかもしれないが、それが自分に降りかかるとなれば話は違ってくるのだろう。
だが、彼女も怒鳴ってしまった事に気を病んだのだろう。ばつの悪そうに彼女は戸口の方へと向かった。
「今日は帰る……話聞いてくれてありがと」
それだけ短く言って詠は店から出て行った。

カランカラン。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9118l/

遊詠歌

2010年10月15日20時59分発行